
CYBER AGE 2111 - NANOTECH CITY TOKYO -
net - works

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CYBER AGE 2111 - NANOTECH CITY
TOKYO -

【Nコード】

N7057T

【作者名】

net-works

【あらすじ】

西暦2111年、人類はナノテクを実用化し、その恩恵を享受していた。

ナノテクは世間一般にまで浸透し、都市環境の制御にまで利用するに至っていた。

東京都再構築化計画により、ユーティリティ・フォグレット・ナノマシン<エレメント>が散布されたナノテクシティ東京。

ナノマシンをハッキングし、その組成を組み替え、自由に操るス

ペシヤリスト、通称<ウィザード>の高校生レイジは、逃亡中の美少女明那と出会い、企業の陰謀に巻き込まれる……。ネオ・サイバーパンク・ナノテクバトル小説。

登場人物

●レイジ（薬師レイジ）
ミドルタウン
都内の中層下町に住む高校生。ナノマシンを自由に操る事の出来る
スペシャリスト、通称「ウィザード」でもある。

●朧
レイジが共生実装している「マージ」の論理人格。ロジックパーソナリティ幼い時からレイ
ジを守ってきた。レイジのウィザードとしての力の根源。

●比嘉明那
アイコニック社から逃亡するタレント志望の練習生。彼女もマージ
を共生実装している。

●グレイン教授
メテイション・テンブル
仮想空間「瞑想寺院」の主。レイジの師匠。高名な天才科学者の模
ミューター倅人格……？

●ブラックシエル
アイコニック社の支社長田宮が招きよせた民間軍事会社PMCウィザード。
共生実装しているマージは「メルトダウン」。

●紅龍
PMCウィザード。ブラックシエルの部下で、造形師モデラーの異名を持つ。
無数の無人機械を同時に操ることができるマージ、ハイク「巢」を共生実
装している。

●オフィリア
「ポップを牽引するトップアーティストの一人。デビューすぐ、人

々を魅了し、ミュージックシーンに躍り出たポップ・クイーンで、
アイコンック社のヒット商品にして、ディーヴァノイド。

● 田宮

アイコンック社の支社長。

● H

情報避難地<メモリーシティ>という仮想世界の住人。機密情報の
ブローカーでもある。

用語解説

【ウィザード】

ナノ・ハッカー、複製師^{レプリスト}など様々な呼び方があるが、ナノテク・ユーザーでも高度な技能技術を持つ技能者たちである。

マジと呼ばれるウェットウェアAIを脳内に共生実装し、記憶媒体であるDNAメモリーに保存貯蓄されたソフトを元に、ファンタジーに登場する魔法を駆使する魔法使いながらのさまざまな現象を引き起こす。

胎内外のナノマシンの自己組織化機能へハッキングを行い、組成改竄を行い、書き換えるのは序の口で、導師^{グル}級の優れたウィザードになるとナノマシンそのものの分子設計まで行う。

エレメントや在野のナノマシンの組成を無断で許可なく行うことはもちろん違法行為であり、社会問題になっている。

【マジ】

ナノウェア型インプラントAIであり、ウィザードをサポートするソフトウェアエージェント。ウィザードがナノテククラッキングを行う為に必要不可欠なウェットウェア・デバイスで、脳の余剰情報処理能力と連動し、驚異的な演算能力を可能とする。記録媒体であるDNAメモリーとマジのCPUといえる核^{コア}チップで構成され、ナノテククラッキングのみならず、情報処理や保存^{セーブ}、そして仮想空間に没入するためのデータリンクなど機能は多岐に渡る。

【DNAメモリー】

DNAの情報保存機能を利用した、マジの記録媒体。膨大な容量を持つ。

【エレメント】

都市環境の大気汚染やヒートアイランド現象による気温の上昇、伝染病、都市型テロ対策として使用されたユーティリティ・フオグレット型ナノマシン。

普段は大気を模倣し、一種の生態圏バイオスフィアを形成、都市防衛を担うと共に、都市環境の正常化と大気を媒介にした情報伝達機能を持ち、空気の清浄化に加え、ヒートアイランド現象の都市気温の冷却化や都市環境の改善に勤め、より安価な情報処理環境を促す。

【東京都再構築化計画】

人工の過密、郊外への拡散化に因る都市機能の効率の低下、ヒートアイランド現象による都市環境の悪化などにより崩壊寸前だった東京を前世紀初頭、政府、民間、企業が一体となっておこなった都市改造計画。

水平拡張している都市を、一千メートル級の超々高層建築物コロシ＜環境建築＞の建設と、地下七十メートルの大深度地下利用により垂直へ拡張することで都市を立体化する一方、立体化により解放された地表面を利用した快適環境空間の創造によりメリハリのきいた街造りをするという内容である。

地下は首都圏を維持、管理する交通ネットワークやライフラインを再整備し、廃棄物処理場や発電所などの巨大支持施設の建設に活用している。

その最終計画事案が＜エレメント＞の散布である。

【ブレイン・マシン・インターフェイス】

BMI。脳波制御型デバイス、あるいはクレイマトンの制御や仮想現実へのアクセスに使用するマージの標準的機能。エレメントなどを媒介にし、脳波を増幅し、思考制御する。

【光学剣】 オプティカル・ブレード

ウィザードスキルの基本的技能の一つ。エレメントをハッキング

し、生成を組み替えることで電磁高周波の刃を形成する光学武器型ワイザード技能。近距離戦闘から長距離戦闘へ設定を変えることに
より、イオノクラフトで飛行する飛び道具や、仮想現実でプログラ
ム削除用への転用も可能である。
デリット

オブティカル・シールド
高等技能として光学防御と呼ばれる対光学兵器用の防御フィール
ドを形成するワイザード・スキルが存在する。

【カーキ・グー】

軍用ナノテク粘土で、PMCワイザードが主に使用する。自己組
織化機能により、等身大の人間から虫まで自由に形づくることがで
きる。ナノ兵器を組み込むことも可能。一般には販売されていない
軍用品で、取り扱いが難しく、厳しく規制されている。

【仮象体】

エレメントなどのナノマシンの位相制御による発光機能を利用し、
現実世界へ仮象体として投射出現した仮想物体のことであり、ホロ
グラムのみならず触覚情報を付け足すことで、実在しているように
錯覚させることもできる。

【仮想世界】 データヴァース

仮想現実世界型ネットワーク空間。接続デバイスやマージにより、
アクセスできる。

【氷壁】 アイス・ウォール

スラング
ワイザード隠語で、侵入迎撃型電子防壁（Intrusion C
ountermeasure Electronic Wall）
の事を指す。
ファイヤー・ウォール

防火壁をより攻撃的に発展させたもので、不正アクセス撃退用の
追撃型防衛システムが組み込まれた防壁。侵入者や防壁を破壊しよ
うとする者を逆探知し、攻撃を行なうセキュリティプログラム。

データハイブン
【情報避難地】

税金避難地よろしく、漏洩した機密情報の保護先として名高い仮想リゾート空間であり、機密情報が売買されている取引場でもある。メイン・サーバーは軌道衛生上に存在するという噂で、セキュリティ強度は世界最高度を誇る、難攻不落の仮想空間とされ、国家レベルのアクセス介入も許さない情報の聖地である。

【ナノテックス社】

ナノテク関連の商品開発を行い、莫大な利益を上げている巨大複合企業体。食品産業から医療関連、宇宙開発、そして軍需産業まで幅広く行なっている多国籍企業で、国家への影響力も大きい。グループ傘下には民間軍事会社なども存在する。

【アイコニック社】

ナノテックス社の宣伝部が独立し、広告およびPR業務を行っている業界有数の広告代理店。広告代理業務やマーケティング業務に加え、自社製品のみならず、PR戦略により世論誘導を行い、販売促進業務を行い、ナノテックス社のナノテク商品をイメージ戦略により販売の普及に努め、世に広めてきた。

また自社でメジャーレコードレーベルやモデル・タレントを数多く抱え、マネージメント業務にレコード出版業務なども行っている。PR業務は国家政府機関をクライアントに、世界各地で繰り広げられている戦争や紛争において、クライアントにとって都合のいい情報操作やイメージ戦略業務を行なっている。

プロローグ

まるでテレビの複数同時チャンネル表示機能のような光景だった。夜風と共に、〈エレメント〉が頬を撫でている。

静電気のようなエレメントの息遣いを比嘉明那は肌で感じていた。眼下に広がるのは夜の海で、大都会や環境建築が発するネオンの光の煌きに加え、エレメントが作り上げる仮象広告が浮かび上がっている。

明那は不意に飛び込んでしまいそんな衝動に駆られそうになった。明那がいるのは、アイコニック社ビル屋上だった。

明那の頭上からスポットライトのような眩しい光が降り注いだ。

上空ではアイコニック社所有の飛行艇ヘリがホバリングし、屋上にサーチライトを投下している。

屋上入り口から、数人の警備員に混じり、スーツの男が現れていた。

光を手でさえぎりながら、明那は顔を確認する。

「……シンカー　比嘉明那」

アイコニック社極東支部支社長の田宮が明那に詰め寄っていく。

明那は、自身のメンテナンスの最中の隙を尽き、逃走を試みた。

田宮の背後にはアイコニック社の警備部のガードマンが電極発射型スタンガンを構えながら控えている。

明那は逃げ場がない屋上へあえて逃げてきた。

脳内の〈マージ〉はすでにアクティブ状態である。

頭痛が酷くなっている。

痛み止めではすでに抑えられないほどだ。

マージを使用すればするほど、侵攻は進む。だが、マージを使用しなければ、この場を乗り切ることはできない。

「高い金を払って生み出した商品に手荒な真似はしたくない。素直に我々の元に戻って来い」

——……迷っている暇はないわ。連中を振り切るには私に変身しないと無理よ。

脳内のマージである<オフィリア>が明那に語りかけた。

——分かっている。

明那は脳内でマージと対話した。

明那は決心したように眼を見開くと、マージを通し、エレメントに働きかける。

マージの呼び応えに対し、エレメントが反応し、励起状態になると、電子の光を放っていた。

エレメントが明那の周りを収束し、ある形を作り上げていく。

明那の姿が変わった。

「……オフィリアか!？」

アシンメトリーの前髪に、長い髪をなびかせ、眼の下に星型の印がある。

顔はおろか体型、そして着衣も何もかも変化していた。

変身した明那〓オフィリアはどこか淡い光を全身から放ち、歌を奏でていた。

声を振るわせて放つ歌は、高周波にも似ていた。

「インタラクティブ・ボイスだと……!？」

田宮が驚きの声を上げた。

「撃て! 撃て!!」

田宮の命令に、警備員はトリガーを引き、電極弾を発射する。

周囲のエレメントがオフィリアに感応同調し、防御壁を展開していた。

防壁は電極弾を弾き返す。

オフィリアの歌声は、どこまでも響かせ行き渡らせるような伸びやか唄だった。

オフィリアの周囲に無数のオフィリアの仮象体が出現した。

「エレメントハーモニーか!？」

田宮の顔には動揺が浮かんでいた。

エレメントハーモニー——オフィリアが生み出す特化機能だった。エレメントの広範囲一斉励起現象で、空気中を漂う、無限のエレメント全てが呼応し、合唱しているようだった。

エレメントが一瞬にして塗り替えられていく様は、歌が光となってに周囲に伝播していくようだった。

オフィリアの歌を聞いている人間にも、影響を及ぼしていた。

警備員も歌の力により無力化され、思わず膝を屈した。

田宮はオフィリアがこんな機能を持っていることに驚いているようだった。

オフィリアの歌が響き渡る中、本人の姿が霧のように消え去った。

「消えた……！？」

歌もいつしか止み、周囲の仮象広告がノイズを起こし、エレメントの電子の光が激しく乱れている。

「……目標は完全にロスト。半径十メートル内のエレメントも機能障害を起こし、使い物になりません……！」

警備員が報告した。

「調査部と連携してすぐに追え！」

田宮は警備担当者に指示を出す。

「『イモータル・プロジェクト』の要に、こんな形で逃げられるとは……！」

エリートに相応しからず、田宮は感情を露にしていた。

田宮の顔には慙愧の念と焦りがはつきりと浮かんでいた。

ナノテク環境概論

「——みんなが知っているとおり、と……都市環境の大気汚染やヒートアイランド現象による気温の上昇化、そして当時流行していた都市型テロ対策に対し、そ……、その解決策として使用されたのがナノテクです」

大型スクリーンをバックに教壇に立ち、女性教師が授業を行っていた。

「ナノテクによる局地的リフォーミングを行うために散布されたのが、て……、東京の都市環境を管理する、ゆ……、ユーティリティ・フォグレット・ナノマシン<エレメント>です」

ところどころ言葉を噛む教師の説明に、薬師レイジは欠伸を噛み殺した。

授業が始まって何度欠伸を飲み込んだか分からない。

実に、退屈極まりない内容だった。

特にナノテク学は基礎中の基礎であり、レイジが熟知している内容だけに、余計だった。

ナノテクが世間に溶け込んでいる以上、ナノテクに関する一般教養は必須項目であり、一般学科に組み込まれている。

ナノテクは国家的戦略を担うため、授業に取り入れている学校は少なくない。

レイジが通う学校は、ナノテク制御の実習授業もある。

ナノテク学を授業で行うことにより、国から助成金を受けている。だが、ナノテク環境概論はナノテク学でも特に基礎的な内容を延々と繰り返すため、ナノテクに詳しい人間にはつまらないものだ。教科書を見る振りをしながら、レイジは授業を聞き流していた。本日最後の授業であり、疲労は溜まり、眠気はピークに達している。

講師の川越みなみは女子大生といっても、おかしくないほどの若

い教師だ。

大学院を出た程の才媛だが、就職難のため、大学や企業の研究室に入ることはできず、臨時で教師をやっている。

ショートカットの童顔のため、美人というより可愛いという言葉がよく似合う。

男子に人気はあるが、対照的に女子にあまりいい印象は無い。

ベテランの教師のような軽妙で、分かりやすい授業には程遠く、たどたどしい説明に、余裕の無い授業はおおむね生徒、特に女子に不評であった。

「——エレメントは……今こうして、わたし達の教室内にも、その存在します。……この空气中を漂っているわけです。あつ、……この表現はあまり正しくないかな……」

みなみは焦りながら、

教師の背後の大型モニターにエレメントの構造図が映る。

分子サイズのナノマシンだった。映像の端には分子サイズを示す縮尺率が入っている。

無数のナノマシンがアームを伸ばし、格子状に幾重にも組み合わせられているナノデバイスの構造体へと切り替わった。

「先生、さつきから噛みまくりです」

レイジの後ろの内村祐樹から揶揄が飛ぶ。レイジは思わず吹き出した。

「うるさい……！ どこ説明するか忘れちゃうでしょ。……エレメントは通常エミュレート機能により大気を模しています。環境の調整のみならず、大気汚染物質や伝染病、テロ兵器の濾過防止フィルター、そして情報処理媒体としての側面も大きく、主に広告や情報の提供を低コストで行うことができます」

エレメントを利用した広告の一例がモニターに映し出される。

「最近東京では、新型のインフルエンザが流行ってますけど、これは現在のエレメントのバージョンでは対応できないタイプだからです。インフルエンザの感染拡大を防ぐために、大々的なアップグレ

ードが行われる予定です」

みなみがモニターから生徒の方へ向き直る。

「エレメントもそうなのですが、ナノマシンは厳重なプロテクトが施されているので、それを無断で書き換える事は違法行為です。ところがこのナノマシンにハッキングを行い、構造を書き換えるくナノ・ハッカー」という存在が最近問題視されています」

レイジの興味を引く内容が教師の口から出たとたん、授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

眠気は覚め、レイジの体に活力が戻る。

「……あー、次回は引き続き、ナノテク環境概論に関する講義を行います。期末テストの重要ポイントなので、しっかり聞くように！」

生徒が次々と勝手に行動する中、みなみが釘を刺す。

「……あーっ、マジだるかった」

レイジの後ろの席からの裕樹のボヤキ声に思わず笑った。

「あんまからかうなよ」

「川越ちゃん、カワインだけどさあ……。授業ほんと面白くねえよな」

「ったく、お前は」

「ツツコまれて、キョドった顔がたまんねえんだよ。ぜったいMだぜ」

「……発想が厨坊なんだよ。否定はしないけど」

そっいいながらレイジは大きく身体を伸ばした。

「ホームルール終わったら、マックにでも行かねえ？」

祐樹がレイジを誘う。

「悪い、今日はちょっと用事があるんだ」

「あ、そう。どこ行くの？」

「母親のお使い。ちよっと頼まれてさ」

レイジはとっさに嘘をついた。

「ああ、そっいえば知ってたか？」

「何が？」

「幕張一帯でのエレメントのシステムダウン」

祐樹の話を聞きながら、レイジは身構えた。

「広告関係が機能障害起こしたんだと」

「……へえ」

「多分、＜ウィザード＞によるテロだよ、テロ」

祐樹の話を聞きながら、レイジは後で確認する必要性を感じていた。

急に裕樹はレイジに顔を寄せる。

「……でさあ、話は変わるんだけどさあ」

裕樹は指先大の記録媒体をレイジに差し出す。

「……またかよ」

「頼むよ」

裕樹は手を合わせると、外部端末のホログラムウィンドウを表示する。

この程度ならば、エレメントを介さなくても本体の表示能力で映し出せる。

「オフィリアの最新ハイパールバムが発売されてるんだけどさあ……ちよつと高すぎて手が出ねえんだよ。どうしても欲しくてさあ……。ディーバノイドと収録したロンドンの仮想世界データ入りのコンプ盤。なんとかデータ入手してくんねえかな……？」

祐樹は外部端末を弄びながら言った。

オフィリア——」ポップを牽引するトップアーティストの一人である。

デビューすぐ、人々を魅了し、ミュージックシーンに躍り出たポップ・クイーンで、アイコンック社のヒット商品にして、ディーヴァノイドである。

私生活を一切明かさないことから、人間であるのか、仮想であるのかその存在は謎に包まれている。

ハイパールバムとは曲のみならず、ビデオクリップや画像デー

タ集、ライナーノート、歌詞、ディーヴァノイドの複製プログラム、さらに歌の世界観などを仮想現実化した音楽世界が収録されている。ディーヴァノイドと仮想現実データにより、音楽と共に、アーティストの世界観を体感できる双方向型体験音楽である。

インタラクティブ・ミュージック

ディーヴァノイドはソフトウエア・エージェントとしても単独で利用でき、歌のみならず対話や会話が可能である。

「オフィリアってアイコンニック社の……？」

「そ」

レイジの中で軽い不快感が沸き起こっていた。アイコンニック社のメディア戦略の巧みに、毎回のことながら腹立たしさを覚える。消費者を巧みに取り込むやり方は反吐が出そうだった。

「……どうした？ 怖い顔して」

「いや……。ディーヴァノイドとデータヴァースのデータ入りだこれじゃおさまんねえぞ」

「うっそ」

「——千円、まあデータが入手できたらの話だけど」

「いつも悪いなあ」

「……まあ、探してみるわ」

手を合わせ、謝罪する友人に、苦笑しながらレイジは記録媒体を受け取る。

「ディーヴァノイドねえ……」

レイジは思わず呟いた。

「レイジはどうなの？ こういうの」

「あんま興味ないね」

もっと関心のあることが、レイジの頭を占めていた。

「何……。男同士で、また悪いことでも相談してんの？」

横から口を出してきたのは、川越みなみだった。

「な、なんすか、先生」

記憶媒体を隠しながら、祐樹が尋ねる。

手際のよさに、レイジは舌を巻いた。

「実習課題。分子配列制御の結晶構造体の提出。二人とも忘れてるでしょ？」

すっかり忘れていた。

ナノマシン制御による分子構造の製作実習課題である。

ナノマシンで絵を描くことと似ていた課題である。

外部デバイス型のインターフェイスを用いて、ナノマシンを制御するのだが、＜マージ＞に慣れているレイジは苦手な作業だった。

レイジくらいの歳でナノテクを胎内に組み込んでいる者は珍しい。エンハンスメントを目的とした物はもとより、医療用ナノテクなどを胎内にインプラントするなど、今だ抵抗感を持つものも少なくない。

グレイ・グーなどに代表されるナノテクテロやフランケンシュタイン症候群のようなナノテクが制御不可能となり、人間を排除する行動を常に想定する考えは根強い。

人為的進化や能力の飛躍を求め、ナノマシンをインプラントする人工主義者を、人として、有りのままを望む自然主義者にとって、サイバニスト人工主義は忌むべき存在であった。

「……すみません。忘れてました」

レイジは正直に言った。

「こら、早急に提出すること。評価に響くわよ。レイジ君はナノテク学は成績いいんだから」

「だって」

祐樹が笑う。

「……うっせえなあ、お前はどんなんだよ？」

「俺はもうできてるよん」

祐樹の要領の良さに、レイジは思わずむっとしていた。

マージ 臈

学校が終わると、レイジは自宅にもどった。

レイジの自宅は東京近郊のベットタウンで、東京都再構築化計画の再開発からもれた住宅街である。

中流階層が主に住む土地で、中古マンションや住宅団地、大型郊外店スーパーが周囲を固めている。

環境建築型タワーマンションの巨大な塔のような外観とは対照的に、レイジの住む自宅マンション周辺の建築物は、前世紀の姿を色濃く形を残したのもばかりだ。

東京都再構築化計画以降、老朽化の進むビルを補修するのに、ナノテクを利用する方法が主流となっている。

安価で短時間、しかも全盛期の建物をそのままの形で維持できるため、重宝がられている。

また、ナノ補修は旧市街の町並みや風情を保全保護する意味合いもあった。

事実、大手スーパーなどが進出しているが、下町情緒も未だ健在していた。

レイジは中古マンションで、母親と二人暮らしである。

レイジのマンションもナノテク補修が施されたリフォームマンションであった。自宅ダイニングリビングルームのテーブルに伝言があった。

仮象体メッセージが主流に時代に、メモ用紙に手書きというきわめてアナログな方法で、伝言は残されていた。

「暖めて食べること。そして、なるべく自炊を心がける。コンビニ弁当は避けること」

母からの伝言だった。几帳面で丁寧な字は、母親の性格を現している。

カウンターキッチンのコンロの上の寸胴に入っているのはカレー

だった。

母の職業は、バイヤーである。

腕利きのフリーのバイヤーで、複数の商社と契約し、日々商品の商談と買い付けに国内および海外に奔走している。

レプリケーターなどのナノテクにより安価に商品が製造できる時代、ヒット商品を探し出し、選定する能力は貴重な才能だった。

海外に出張の為、家を空けることが多い。

近々また、海外に出かける予定で、今日も帰りは遅いようだ。

レイジは自分の部屋に入り、制服から部屋着に着替えながら、黒光りするボディのアクセスポイント用のホームターミナルを起動する。

仮想現実への没入は、通常VRデバイスを装着してネットに接続するが、レイジには必要なかった。

レイジは部屋内のエレメントの濃度を確認する為、精神統一し、エレメントたちの存在を感じ取るうとする。

この程度ならば、脳内の<マージ>により、感覚を研ぎ澄ませれば十分に知りうることであった。

レイジが行おうとしているのは、特定仮想空間への没入接続だった。

特定仮想空間へ結節点の形成——エレメントを仲立ち《インターフェイス》にし、さらにエレメントでゲートウェイを構築し、仮想空間への扉を開く。

レイジの目の前に突然、小柄な女性が出現していた。

白を貴重にしたミニスカートのコスチュームにニーソックスと、まるで電子コンパニオンのようないでたちだった。

「……まだ出てくるなよ、朧」

「別にいいでしょ」

朧と呼ばれた小さな女性は笑った。

朧——<マージ>と呼ばれるナノウェア型インプラントAIであり、ソフトウェアエージェントである。

脳内のAIというより、脳内に住む精霊という言い方が適している。

ファンタジー風に言えば、契約した使い魔そのものだった。エレメントの位相制御による発光機能を利用し、現実世界へ仮象体として投射出現できることもできる。

朧は今仮象体モードで、現実世界へ出現していた。

仮象体——エレメントを媒介にした仮想物体のことであり、ホログラムのみならず触覚情報を付け足すことで、実在しているように錯覚させることができる。

「わたしが開けようか？」

朧がレイジに言った。

「……いや、これくらいでできなきゃ、ウィザードじゃない」

レイジの周りのエレメントが励起し、活性化していく。

仮想現実へ接続を行うには、十分な量だった。

レイジは目を閉じ、精神を統一する。

「……よし」

準備が終了すると、レイジはベッドに横たわる。

「ゲートウェイ開放と同時に、違法接続用の追跡ソフト対策を展開してくれ」

レイジの命令に、朧の瞳に電子の光が瞬く。

「了解……じゃあ行くわよ」

朧の言葉に従い、レイジは目を閉じた。

意識の拡張を感じると、幽体離脱したような飛躍感が全身を包んでいた。

仮想世界 『瞑想寺院』

荘厳な石造りの洋風建築の大広間だった。

床には薔薇を模した模様が描かれている。

レイジの手には光の剣を握っていた。

西洋の長剣のような形状の光の剣を構えながら、レイジと対峙するのはワイヤーフレームで描かれた巨人である。

セルオートマトン
人工生命体である。

広間の隅には朧と、初老のスーツ姿の男性が立っていた。

細身の白髪の紳士で、レイジとオートマトンを静かに見守っている。

オートマトンが動き出すと、攻撃をかわしながら、レイジは、オートマトンに剣を振るう。

剣がオートマトンを切り裂き、オートマトンは消滅した。

「また腕を上げたな」

初老の男——グレイン教授の言葉に、ふっとレイジは笑う。

レイジの手にしていた光の剣が突然、錆びや腐食に犯されたように変色すると、崩れ落ちた。

剣を放り投げ、レイジは顔をしかめる。

「……ずるいですよ。こんなのアリですが？」

レイジは抗議する。

「油断しているからだ。ウイルス侵食による反撃は基本中の基本だぞ」

グレイン教授はレイジを生徒を叱る教師のように言う。

銀髪白人風の男で、白いシャツにジャケットを羽織った姿は、初老の紳士を思わせる。

「……だらしがない。抗プログラム型の強力な光学剣くらい作れないの？」

レイジの顔を朧は笑う。

「……簡単にできるか」

レイジは投げやりに言うと、口を尖らせる。

「だから半人前なの」

朧の言葉に、レイジは反論できなかった。

レイジがいる場所は、メタ・インフォメーション・テンブル瞑想寺院と呼ばれる仮想空間である。

ウィザードが腕と精神を磨く場であり、精神活動をアップロードすること、アクセスできる。

ウィザード——ナノ・ハッカー、レプリカ複製師など様々な呼び方があるが、ナノテク・ユーザーでも高度な技能技術を持つ技能者たちである。

＜マージ＞と呼ばれるウェットウェアAIを脳内に共生実装し、マージの記憶媒体であるDNAメモリーに保存貯蓄されたソフトを元に、魔法を駆使する魔法使いのようにさまざまな現象を引き起こす。

自己組織化機能へハッキングを行い、組成改竄を行い、書き換えるのは序の口で、ゲル導師級の優れたウィザードになるとナノマシンそのものの分子設計まで行う。

ナノテクが世間に浸透し、日常の風景として完全に溶け込んだ
昨今、ウィザードはトランスヒューマニズムの最先端モードとして、
いまだアンダーグラウンドシーンで注目される存在だった。

一方で、犯罪と結びやすく、法の行使者たちから危険視される存在でもあった。エレメントや在野のナノマシンの組成を無断で許可なく行うことはもちろん違法行為であり、大きな社会問題になっている。

グレイン教授は人の精神活動を複製したシミュレーターであり、
瞑想寺院の管理プログラムである。

オリジナルである本人が生存しているのかは、レイジにも不明であった。

「この仮想空間＜瞑想寺院＞は、ウィザードの技術と受け継ぐ場——」

「ようは魔法の学校って訳でしょ？」

朧の言葉に、グレイン教授は苦い顔をする。

「……まあ、そうだな」

こういう表現をグレイン教授は好まなかった。

子供の時からゲームにどっぷりと漬かり、慣れ親しんだ世代ならばファンタジーゲームと現実世界の境界が曖昧なのは無理も無かった。

「君のお父上に頼まれた以上、私には責任がある」

「分ってますよ。何度も言わなくても……」

「ゆえにウィザートの技術と能力は決して偽物を作り上げるためのものではない」

教授の小言に朧は舌を出す。

朧は瞑想寺院の力と連結し、ネットを洗い、祐樹に頼まれた目的のデータを搜索していた。

ウィザードの違法コピー犯罪は大きな社会問題である。

情報の強奪のみならず、自己組織化素材を使用し、本物と紛うこと無き偽物を作り上げることなど、ウィザードにとって造作もない結果、偽物が世の中に溢れかえる形となり、捜査機関が神経を尖らせていた。

「自分だってコピーみたいなものでしょ」

朧の言葉にグレイン教授はジロリと睨んだ。

「しょうがないわよ。お友達に頼まれたんだもの、ねー？」

「……前から思っていたが、君のマジは、軍用規格を遙かに凌駕する性能を持つにも関わらず、性格に若干問題があるようだな」

「性格設定はわたしの責任じゃないもの。そもそもコミュニケーション型に抑制と可塑性を求めるなんて、ナンセンスじゃないの……？」

朧の反論に、さすがのグレイン教授も口を噤む。

身体的強化処置を行う人体用ナノテクで、マジは最高峰の内部デバイスである。

マージは、ウィザードがナノテククラッキングを行う為に必要不可欠なウェットウェア・デバイスで、脳の余剰情報処理能力と連動し、驚異的な演算能力を可能とする。

ナノテククラッキングのみならず、情報処理や保存、そして仮想空間に没入するためのデータリンクなど機能は多岐に渡る。

朧は瞑想寺院を経由し、データを更新、マージとしての性能を絶えず上位互換してきた。

幼い時からレイジを守ってきた守護天使は、レイジのウィザードとしての力の根源であり、レイジの古い友人でもあった。

「……ナノテクはもはや僕たちの生活に入り込んでいます。使うなという方が無理では？」

レイジが反論した。

「生意気を言うな」

グレイン教授はぴしゃりと言った。

「……話は変わりますが、幕張一帯でのエレメントのシステムダウンについてなんですが……広告関係が機能障害起こしたとか」

旗色とが悪いと思ったのか、レイジは別の話題を出していた。

「私の耳にも入っている。今確認中だ」

「……そうですか」

「どれ、じゃあ久しぶりにあたしと戦ってみる？」

朧が仕事が終わったのか、身体をほぐしながら言った。

「……別にいいぜ」

「言っとくけど、手加減しないからね。マスターの能力向上はマージにも影響してくるから」

「待ちたまえ。別のカリキュラムに移ろう。ナノマシンの再自己組織化の練習だ」

グレインの言葉にレイジはゲツという顔をする。

ナノマシンの再自己組織化——ナノマシンをハッキングし、自己組織化機能を利用し、まったく別の働きをするナノマシンへ作り返ることである。

ウィザード・スキルにおいて、ナノマシンの変換および合成速度は、ウィザードの優劣を決定付ける重要な要素である。

特に生命維持機能タイプの短時間での生成は、生命の危機に対し、大きく影響する。

「この前の続きだ。インターフェイスタイプ型を代謝制御型への作り変える。目標は十秒台だ」

リポゾーム型で、触手の様な鞭毛モーターをいくつも生やしたナノマシンの電子複製体がレイジの目の前に現れる。

「……苦手だなあ」

複製体を前にし、レイジは頭をかく。

「……つべこべ言うな。鞭毛モーターおよびアクチュエーターフレームの再アセンブリングに取り掛かれ。急げ」

「……だって」

臃が悪戯っぽく笑いながら言う様に、レイジは祐樹とのやり取りを思い出し、さらに顔をしかめていた。

PMCウィザード

アイコニック社ビルの支社長室で男は、ガラス窓から環境建築型タワーマンションが立ち並ぶ幕張の様子を見ていた。

男は銀髪に、黒いコートを羽織っている。コートの下は戦闘スーツだった。

NBC対応型の自己組織化装甲機能を持つ戦闘スーツである。相手の攻撃に対し、形態を変えることで、フレキシブルに対応する。この部屋の主であるアイコニック社支社長田宮はデスクに座り、電話での対応に追われていた。

全てオフィリア関連のビジネスに対する電話だった。

三〇代と若いながら、極東支部社長にまで上り詰めた男だった。

男が身に着けているのは、極めて上等なスーツだった。

ナノテクで作り上げられた大量生産の安価な衣服ではない。

天然素材使用の職人が作り上げた、極めて高価なものだった。

ナノテクにより、あらゆるものが製造できる時代だからこそ、人の手により生み出されたものが価値を帯びる。

右手には職人が作り上げた舶来製の時計を巻いている。

「オフィリアの特化機能『インタラクティブ・ボイス』をこんな形に使用するとは……」

田宮は親指を噛みながら言った。

インタラクティブ・ボイス——バイオリズムに干渉し、ヒーリング効果をもたらすオフィリアの歌であり、能力である。

男は資料を手にとった。

「もう一つの機能が『エレメントハーモニー』……エレメントとの連結により無限に歌唱効果の有効範囲を広げる特化機能。無数の仮象体を出現させ、音楽を広範囲で視聴させる……か。聞きしに勝るデীবノイドだな」

ブラックシエル——銀髪の男は感心したように言った。

アイコニック社は、親会社のナノテックス社の宣伝部が独立し、広告およびPR業務を行っている業界有数の広告代理店である。広告代理業務やマーケティング業務に加え、自社製品のみならず、PR戦略により世論誘導を行い、販売促進業務を行っている。

ナノテックス社のナノテク商品をイメージ戦略により販売の普及に努め、世に広めてきた経緯がある。

PR業務は商品販促だけに留まらない。国家間の戦争や紛争の情報戦やイメージ戦略業務も行なっている。ネガティブキャンペーンなどにより世論を巧みに操作し、紛争の行方さえも左右するほどの影響力を持つ。

国際世論を味方にしたものが勝つという現代の戦争において、アイコニック社が繰り広げるPRにより、事実に関わらず、クライアントにとって都合にいい構図を作り上げ、国際世論を誘導するなどアイコニック社にとっては造作もないことだった。

アイコニック社は自社でメジャーレコードレーベルを抱え、リード出版業務およびタレントのマネージメント業務も行っている。

自社でモデルを抱え、親会社の製品を世間に売り込むためだ。

「新曲の発表に加え、ライブも控えているこの大事な時期に……」
ブラックスエルは民間軍事会社に登録しているPMCウィザードで、特殊工作を得意とする指揮官クラスのウィザードでもある。

ナノテックス社は海外で民間軍事会社を運営している。

表向きは自社の危機管理およびテロ対策だが、実態は戦争に加担し、ナノテク兵器を納入していた。

ナノテックス社傘下のPMCの日本現地法人はさすがに存在しないが、荒事に対し、招聘され、非合法活動を行う。

ウィザードは戦争においても重宝され、ナノテク兵器が蔓延する現代の戦争を語る上で外せない存在だった。

「宣伝費はもとより、彼女を作り上げるのに、肖像権や遺伝子データ、仮象領域の賃料、遺伝子デザインに至るまで莫大な投資が……」

田宮は苛立ったように言う。

「逃げられたら世話は無いな」

「……ナノテックス社上層部は大変ご立腹だ」

「何故逃げられた？」

ロジック・パーソナリティ

「オフィリアを構成する論理人格は我が社に絶対服従である反面、音楽的能力を学習成長させるために、生存戦略の創発や自己保存、自由意志を有している。拡大解釈により、抜け穴を見つけ出し、シンカーをけし掛けたのだろう。シンカーの精神状態が最近極めて不安定だという報告も上がっていた」

「ようは互いに示し合わせて逃げたというわけか」

ブラックシエルは失笑する。

「で、どっちをだ？ シンカーか、マージか……？」

「両方だ……！」

田宮は思わず大声を上げた。

「まあ……我々に任せておけ」

ブラックシエルは余裕げに言う。

「彼女のマージは休眠状態のようだ。追っ手を振り切るため、マージの活動を自閉モードにして追跡機能も一緒に眠らせたらしい。うちの調査部も手をこまねいている。どうやって見つけ出すつもりだ……？」

社長室に一人の女が入ってきた。ブラックシエル同様、赤い戦闘スーツを身につける。

女の背後にスーツ姿の男を一人いた。しかし、男は肌はおろか、髪の毛、スーツの色までカーキだった。

「俺の部下だ。仕事名は紅龍^{ホンロン}という」

ブラックシエルが説明すると、紅龍は軽く頭を下げた。

「後ろは……？」

田宮は尋ねる。

トラッキング

「嗅覚センサー搭載の追跡型クレイマトンです。犬以上の識別能力を持ち、地雷や兵士を探り出す為に実際の戦場で使用されています。わたしが作り上げました」

紅龍が答えた。

肌や頭髮まで再現された、人と見まがうほどの精巧な造型に、力
ーキ色の肌だけが、人工物であるということを認識させる。

戦場ですら死が忌避される時代に、クレイマトン兵は格好の道具
だった。

モデラー

「造形師の異名を持つ女だな。ナノ素材さえあればなんでも作れる。
後方支援に長け、マルチワイドセンサーを搭載したマージを実装共
生したウィザードでもある」

レプリスト
「複製師……という訳か」

田宮は揶揄するように言った。

レプリスト——ウィザードの別称である。

「現在アイコニック社との提携先などに設置されている防犯カメラ
の映像分析を中心に大まかな逃走経路の絞込みを行っています。シ
ンカーの体臭データや使用していた化粧品、香水などは入手済みで
す。このクレイマトンがシンカーの匂いやフェロモンを辿り、見つ
け出すのも時間の問題かと——」

紅龍は自信げに答えた。

仮想空間 『廃品広場』

明那は仮想現実『^{データウアース}廃品広場』内を歩いていた。ジャンクヤードは無料の仮想空間サーバーで、サーバーエージェントがネット内を自動巡回し、ネット内の情報を集めている。

新鮮度とスピードが命の情報は、すぐ腐敗しゴミと化する。そんなゴミやガラクタ同然のジャンク情報が集まる空間が、このジャンクヤードだった。

空間内は広大で、前世紀のオーディオやスピーカー、冷蔵庫に、ブラウン管のテレビなど、アンティークの家電製品を模した巨大なオブジェがビルのように並び、飾られている。

無数の情報はファイル化され、保存されている。

オフィリア関連の情報を中心に確認していた。

データウアースでも幕張の出来事は、騒ぎになっている。

情報ファイル群の中に、付随データが着いているものがあった。

オフィリアがイメージキャラクターを勤めるCMの動画データだった。

一般に配布されているもので、無数にコピーされ拡散しているものだった。

コピーといえば聞こえはいいが、用はデータの盗用である。

すでに先日発売されたハイパーアルバムのデータも流出していた。関係者としては決して愉快なものではない。

明那はファイルを再生する。

『肌に光のアクセント——』
ナレーションが流れる。

『もう畏れない——。輝く光のバリア。進化したナノテクコーティングが肌に保湿と美白を取り戻す』

動画再生が続く。明那には何の感慨も浮かばなかった。

『もつと強く、もつと自由に。ファンデーション誕生、コンプレックス・コート』

オフィリアの顔がアップになる。

『ずっと輝くために――』

キャラクターと共に企業ロゴと商品名が重なる。

失踪する前に収録したCMだった。

明那が逃亡生活に入り、一週間が経っていた。

現在渋谷に身を潜め、安宿を転々とし、仮想現実へ来訪していた。ジャンクヤードのような情報サイトや仮想SNSなどを渡り歩き、必要な情報を集めていた。

マージを共生実装していたが、使用できなかった。

マージの中にある追跡監視機能を作動させないため、マージの活動を完全に停止していた。論理人格の自閉休眠モードである。もし再起動させれば、追跡機能はロックされ、簡単には見つからないはずだった。

明那のアバターはオフィリアであった。

オフィリアのアバターは仮想現実ではポピュラーだった。仮想世界では芸能人のアバターは極めてありふれている。アーティスト

事実、タレントのアバターは肖像権利用料を払えば、誰でも使用できる重要な収入源である。

まさかオリジナルがその姿で仮想空間に存在しているなど、誰も思わないだろう。

仮想現実へのアクセスは、脳内のマージではない。

ヘッドギア型外部デバイスをを用いたアクセスである。

ホテルに備え付けられている接続ターミナルのポートを利用し、匿名化を行い、接続していた。アニメイスイズ

ジャンクヤードの来訪者たちは、アイコンが動物を擬人化したようなアバターだった。

いわば廃品回収し、再利用する廃品利用者である。

明那が今探しているのは『データ・ハイブン情報避難地』への情報だった。

情報避難地——税金避難地タックス・ヘイヴンよろしく、漏洩した機密情報の保護先

として名高い仮想リゾート空間であり、機密情報が売買されている取引場でもある。

メイン・サーバーは軌道衛生上に存在するという噂で、セキュリティ強度は世界最高度を誇る、難攻不落の仮想空間とされ、国家ですら簡単には手が出せない。

目的地である情報避難地への情報は、ある程度掴んでいた。

「……オフィリアのデータか。知らないならくれよ」

明那は声を掛けられた。

男でありながら、女の姿だった。

アバターは、人気のグラビアアイドルだった。

明那と違い、おそらく肖像データを違法に入手したものだろう。

「……誰かウィザードを知らない……？」

明那は無駄だと思いつつも利用者に尋ねていた。

「……ああん？ ウィザードだって？ 犯罪でもするつもりなの……？」

「……違法複製？ 不法ハッキング？ それともテロ……？」

「……そういうんじゃないくて」

明那はウンザリしていた。同じやり取りを何回も行っている。

「……データの取り出しと移送を頼みたいの」

「どこに？」

「情報避難地……とか？」

「そりゃ無理だ。電腦横丁だったらいるかもな」

「……やっぱり」

明那は溜息を吐いた。

これも同じ答えだった。その電腦横丁こそが、明那の目的地も一つでもあった。

「ウィザードが集う仮想都市空間らしいけど、ウィザードでないと中には入れない。一般人はとても無理だね。電腦横丁には情報避難地への受付窓口もあるらしいが……」

「どこにあるの？」

「秋葉原にアクセスポイントがあるらしいが、行き方は分からないな。直接行けば分かるんじゃないか？」

これもすでに知っている情報である。

ここはジャンク情報しかない。

廃品利用者との会話を打ち切り、別の仮想世界へ転送しようとした時、明那の前に、オフィリアがもう一体現れていた。

オフィリアのオリジナルである論理人格ソフトウェアそのものだった。

「大丈夫なの……？」

明那は周囲に目を配りながら、オフィリアに尋ねた。

二人の様子を怪しむものはいない。

「……ええ、ここに存在するエージェントを借りたの。わたしたちの会話までは、彼らには聞こえない。あなたへの負担も無いはずよ」

「……………」

「あなたこそ身体のほうは……？メンタルバランスも著しく乱れている。インタラクティブ・ボイスの使用は、わたしの浸食作用を拡大させる」

「今のところは。薬で何とか抑えているけど……」

「後悔している……？」

オフィリア・オリジナルの言葉に、明那は首を振る。

明那の答えに嘘はなかった。

もう偽りの人生は懲り懲りだった。

「そう」

オフィリアは静かに言った。

「あなたはわたし、わたしはあなた。そして、あたしもあなたも偽物。……本物ではない。一部の人間を満足させるための、おもちゃに過ぎない」

オフィリアのアバターにノイズが走る。

「……タイムリミットだわ。これ以上はマージが完全にアクティブ状態になる」

そういい残すと、オフィリアは消えた。

明那に幻痛にも似た感覚が、頭をよぎった。

「あまり時間はない……か」

そう呟くと明那の情報ウインドウを出現させていた。

プロフだった。

電子名刺ともいえるプロフには高校生くらいの男子の画像が自己紹介情報と共に記載されている。

現実の世界でも情報を求め、街を歩いているときに、偶然知り合った人間から入手したものだった。

「……望み薄だけど、当たってみるか」

明那は溜息を吐きながら、そう言った。

父の遺産

レイジはその日は暇だった。

放課後、特に予定はなく、街をぶらぶらしていた。

アイコニック社ビル前広場で行われるはずだった、オフィリアの屋外ライブが急遽中止になった。

バージョンアップに伴い、プログラムの不備およびメインサーバーの不調が発覚し、現在原因究明のためメンテナンスにはいり、活動を休止するというのが、所属会社の公式発表であった。

復帰の目処は立っていないらしい。

ライブに参加するはずだった裕樹は残念がっていた。

ウィザードの修行はエレメントのバージョンアップ期間に伴い、休みである。

使用できないわけではないが、エレメントを主体とする以上、影響がまったくくない訳ではない。

学生服に入れてある携帯電話が突然鳴った。

「……なんだ？」

携帯を確認すると、プロフの受信だった。

『AKINA』という名前の女の子だった。

画像に年齢などの人物紹介が画面いっぱい映る。

プロフの情報を確認すると、通信モードになる。

——薬師レイジ君……？

女の子の声だった。耳障りのいい、いつてみれば美声だった。

「……誰？」

——今、話できる？

「……別にいいけど」

レイジはプロフを見る。

プロフには画像データが載っていた。

データ通りならば、中々の美人だ。

——プロフ突然送っちゃってご免なさい。会って話したいの。
ナノテクに詳しいって聞いたから……。

「誰から？」

——リサちゃんて娘？

「ああ、あいつね。友達……？」

リサは都内の女子高に通う女子高生で、放課後はリサーチャーのバイトをしている。

リサーチャーとは、繁華街の流行を調査したり、新商品の拡販などを行う仕事で、リサはマーケティングリサーリ会社に登録している。

流行発信地の渋谷において、彼女のようなバイトをしているのは珍しくない。

女子高生がもたらす情報は、企業側にとって垂涎の情報だった。

——うん。渋谷公園近くのクラブ『アーバン・トライブ』って知ってる？

「……知ってるけど」

——明日7時そこに来れる？ 明日は未成年でも入れる日だから。

「……ちょ、ちょっと」

——入り口で待ってるから、絶対に来て。

そついい残すと、電話は一方的に切れた。

レイジは困惑していた。

電話の後、どこか気分を削がれたレイジは自宅に戻っていた。

母親は海外に出張に出かけていた。

長期出張のため、しばらくは家事一切は自分で行わなくてはならない。

荷物と着替えを行なう為、部屋に入ると、グレイン教授が居た。

「——無礼を許して欲しい。早急に君に伝えることがあってね」

「……いいえ」

仮象体メッセンジャーだった。

グレイン教授の分身そのもので、ある程度の独立行動は可能だった。

バージョンアップ中にも関わらず、仮象体に乱れは無いのは流石だった。

グレイン教授の技術の高さを証明している。

「で、なんですか？」

「先日の幕張での大規模なエレメント励起現象の件だ」

「……あ、はい。やっぱりウィザード同士の戦闘ですか？」

「アイコニック社の動きが騒がしい。ナノテックス社傘下の民間軍事会社からアイコニック社がPMCウィザードを招聘したようだ」

「マジですか……？」

「連中は、ウェブ上の仮想空間にも網を張り、情報を集めている。現在連中がネットに放ったエージェントを一体捕獲し、解析中だ。もし、情報が耳に入ったら知らせてほしい。十分注意してくれ」

そういい残すと、グレイン教授は消失した。

グレイン教授と入れ替わりに、朧が出現した。

「……なんか、事態が緊迫しているわね」

朧の言葉に「ああ」とレイジは言う。

朧もバージョンアップの影響はほとんど無いようだ。

夕食を自分で作り、食べ終わると、レイジは部屋に戻っていた。

「この前のオフィリアのハイパーアルバムデータとプロテクト、解除できたよ」

朧が報告してきた。

データが最近ネットに流出し、ようやく入手できたデータだった。データは偽造防止用のプロテクトが施されていた為、その解除に手間がかかっていた。

「ああ……ありがと」

「さっそく再生してみる？」

「ああ」

朧は音響システムにデータをアップロードする。

ディーヴァノイドの対話機能を切り、再生する。エレメントとの調整を終えると部屋が一変し、外国の風景と共に、一人の女性が出現した。

オフィリアだった。

エージエントにありがちな最大公約数で生み出された人工的美ではなく、あくまで人間の持つ天然の美を持つ存在だった。

オフィリア――アーティスト名兼商標名で、二年前ほどデビューし、瞬く間にトップ・ディーバノイドに躍り出る。

アイコンニク社所属のアーティストにして、社の所有ソフトウェアおよび音楽コンテンツそのものである。

アジア系の美しさを有し、公式プロフィールによれば、製造が韓国製ソフトウェアメーカーとの共同開発の為、韓国籍を取得している。

フィギュアのように、さまざまな限定バージョンをリリースする販売戦略を行っている。

ディスコグラフィ
レイジは情報ウインドウを開き、楽曲情報を見る。

仮想世界は、ロンドンのストーンヘンジをデータヴァース化したものだった。

音楽世界に身を委ね、オフィリアの歌声を聴きながら、レイジは目の前に立方体を出現させていた。

エレメントを通して作り上げた仮象体である。

ルービックキューブのような形をしたものだった。

父からの遺産の一つだった。

仮象物体は、立体型積層暗号が施され、このような形を成している。

仮象物体が浮遊し、レイジの目の前で、緩やかに回転している。

暇があれば、子供のころから暗号の解読に取り組んでいた。

いまだ成功には至っていない。

仮象体は触覚情報を追加することで、文字通り立体として触れることも出来る。

ウィザードには造作も無いことだった。

オフィリアの歌は良かった。文句のつけようがない。

だが、アイコニック社製作のコンテンツに反発心が存在した。アイコニック社、いや親会社であるナノテックス社という言い方が正確だった。

父からの受け継いだマージである臍を胎内に共生実装し、ウィザードとしての能力を得た。

ある日、すべてを無くした。

レイジがまだ小学生に上がって間もない頃、会社の社長だった父は謎の死を遂げた。

ナノマシンによる他殺も考えられたが、検視の結果、自殺と断定された。

遺書は残されていなかった。

ナノテックス社の買収工作が原因であるのは明白だった。

風評を流され、株価は暴落し、あっさりと軍門に下った。

研究の成果や債権の回収に財産のほとんどは奪われ、残されたレイジとは母は突然裸同然となった。

父は死の直前に、レイジに開発中のマージを共生実装させるナノマシンのマテリアルを手渡していた。

興味があるなら、大人になったら身につけてみる、と言われていた。

突然訪れた受難と理不尽に対し、レイジは復讐のためにためらうと無く、ナノマシンをインプラントし、臍というマージを自らに共生実装させた。

父の遺産であるマージ臍を胎内にインプラントした時、瞑想寺院へのアドレスとアクセス・キーのデータとして保存されていた。

父の影響もあって、ウィザードの技能を身に着けることにのめりこんでいった。

きっかけは私怨だったが、勉強や部活よりも遙かに面白かった。臍が出現し、立体暗号の周りを漂う。

キューブの暗証コードは、朧の演算能力をもつてしても解くことはできない。

携帯端末が鳴った。レイジは手に取る。

——レイジ、おひさ。電話くれた……？

リサだった。

「ああ」

——なんか面白いネタ無い？

リサの口癖だった。リサーチャーというアルバイトの影響のようだ。

「……ないよ、別に。お前こそ肌のほうは良くなったのか？」

——うん。一時はカブレちゃってヤバかったけど、今は大丈夫。

「アキナって娘から電話あったぞ」

——ああ、あのかわいい娘でしょ……？ クラブで出会って、ナノテクで困ってる話だから、レイジのことを教えてあげたの。

「……人の番号あんまり簡単に教えんなよ」

リサはナノテクが詳しいレイジのことを便利だと思っているフシがある。

機械が本質的に苦手な女の子にとって、レイジのようなギーグは何かと重宝するらしい。

——いいじゃん、別に。話、聞いてあげてよ。ホント可愛いから。最後に「じゃあね」と言い残すと、リサは電話を切った。

「……ったく、どいつもこいつも、便利に使いやがって……！」

毒づくレイジに、朧はふふっ笑う。

「……で、どーすんの？」

朧が尋ねてきた。

「あんまり関わらない方がいいんじゃない……？ プロフは可愛かったけど」

「……そこなんだよなあ。リサの知り合いだからあんまり適当にできねーし」

「スケベ心出すと後悔するよ。それに女の子の『可愛い』は信用で

きないって言うでしょ……？」

臙の忠告に、レイジは顔をしかめる。

裕福でもないが、貧しくも無い。

母のおかげで少なくとも生活には困らない程度の暮らしは出来ていた。

自らに訪れた受難と理不尽さに子供ながらに、たぎるような怒りに身を焦がしたときもあった。

しかし、もはや子供じみた復讐心はもう無い。

自分の家族と友人を出来うる限り守っていく——それだけだった。

渋谷でのナノマシン戦

渋谷駅を出て、空を見上げるとエレメントが励起し、光の紙片が宙を舞っていた。

まるで空から雪が降っているような光景だった。

光の紙片はすぐ様、集まり、人の形となった。

エレメント型広告^{アド}オブジェクトだった。

CMのイメージキャラクターが夜の空に映し出される。

ユーティリティ・フォグレット<エレメント>の機能である。

位相制御による発光機能と情報伝送により見たいものをホログラムでリアルタイムに投影できる。

ビルに区切られた空は、エレメントが作り上げる仮象広告で埋め尽くされ、利用領域は極めて少ない。

情報発信基地である渋谷ならば尚更だった。

渋谷は、環境建築型タワービルがいくつも存在していた。

前世紀初頭、政府、民間、企業が一体となっておこなった都市改造計画が、「東京都再構築化計画」である。かつてこの街は、人工の過密、郊外への拡散化に因る都市機能の効率の低下、ヒートアイランド現象による都市環境の悪化などにより崩壊寸前だった。

水平拡張している都市を、一千メートル級の超々高層建築物の建設と、地下七十メートルの大深度地下利用により垂直へ拡張することで都市を立体化する一方、立体化により解放された地表面を利用した快適環境空間の創造によりメリハリのきいた街造りをするという内容である。

地下は首都圏を維持、管理する交通ネットワークやライフラインを再整備し、廃棄物処理場や発電所などの巨大支持施設の建設に活用された。

都市改造計画の最終事案として実施されたのが、ユーティリティ・フォグレット型ナノマシン<エレメント>の散布である。

この一大事業はレイジが誕生直後に終了した。

渋谷のエレメントおよび空間の使用料は、極めて高額であった。

『肌に光のアクセント——』

ナレーションが流れる。

オフィリアの化粧品メーカーの仮象広告だった。

美しい声に、宙に浮かぶ美の結晶ともいえるイメージモデルがする意志の強そうな眼差しは、街を行きかう人々の心を捉える。

足を止め、オフィリアを見入っている者も少なくない。

芸能人にあまり興味のないレイジはその場を通り過ぎようとした。黒のコスチュームに身を包み、ミニスカートから生え出る長い足は確かに目を引くが、すぐに目を戻した。

レイジはクラブ『アーバントライブ』に着いた。

アーバントライブ——公園通り近くにあるオオバコのクラブである。

音楽やダンス、アートはもちろんこと、料理なども充実し、音楽イベントのみならず格闘イベントなども行われている多目的エンターテイメントスペースである。

クラブカルチャーを牽引する存在として、渋谷では有名なプレイスポットであるため、人の出入りも激しい。

今日は未成年も入店できる日だった。

ネオン文字に加え、仮象体フォントが、建物を飾っている。

仮象体スクリーンが展開し、近々行われるパーティーイベントが大々的に告知したり、宣伝内容がめまぐるしく変わる。

待ち合わせ時間より、若干早く到着した。

店を前にし、レイジの視界に朧が出現していた。

周囲の人間には見えない脳内エージェント・モードである。

——……アドレナリンの量が高まっているよ。

朧の言葉に、レイジはギクリとした。

——ひょっとして緊張している？

——……苦手なんだよ。こういう場所。

臃とレイジは脳内対話^{チャット}で言葉を交わしていた。

入り口フロント近くで待ち合わせの予定だった。

ウィザードが人間の能力を高める者たちならば、アーバントライブは外見にこだわった連中の姿が目立つ。

タトウーに始まり、髪や瞳、肌を黒人のように変色したものと白人のように漂白したものなど、ナノテクによる簡易整形を施し、さまざまな外見改造を行っている。

アーバントライブはナノテク・フリークスの巣窟だった。

ナノテクファッションを繋がりにしたフリークスのストリートギャングの拠点であり、影で麻薬の売買も行われているという噂もあった。

「……帰りてえ」

クラブの客を見ながら、レイジの口から思わず言葉がこぼれる。

明らかに気後れしている自分がいる。

クラブを訪れたことに、激しく後悔していた。

——ナードの君にはきつい場所かな？

臃がくすくす笑いながら脳内であらった時、「レイジ君……？」

と声を掛けられ、レイジは振り向いた。

女の子が一人立っていた。手には携帯電話を持っている。画面が明るく光っていることから、おそらくレイジのプロフを確認しているのだろう。

大きな帽子を被り、モスグリーンのファールブルゾンにスキニージンズ、サンングラスをかけている。肩にはトートバックを下げていた。年齢はレイジとさほど代わらないようだ。

均整の取れたスタイルに、小作りの顔が乗っかっている。ぱっと見は駅前でたむろしている様な家出娘にしか見えない。

アーバントライブは家出娘たちの巣窟でもある。

宿を求めて、パートナーを探す者たちの姿も少なくない。

店のターゲットにしているのは、主に十代や若者で、街を彷徨う^{アーバン・トライブ}都会の部族達の社交場であった。

「……はじめまして。比嘉明那です」

女の子は、顔の半分を覆うような大きなサングラスを外すと、挨拶する。

サングラスの下はかなり可愛かった。

目鼻立ちはくつきりとしていて、人目を引く大きくて綺麗な瞳に、鼻先がツンと上を向いている。

学校に通う同年代の女の子など比較にもならないほど可愛かった。レイジも簡単には無視できないほどフォトジェニックな美しさを持つ。

リサの言葉に偽りなかったようだ。

明那と名乗った美少女はすぐにサングラスを掛ける。

「……突然、電話しちゃってゴメンなさい」

明那はまず真っ先に詫びた。

「……俺のこと、リサからだっけ？」

少し迷惑そうにレイジは尋ねた。

「……試供品をもらって、偶然仲良くなってね。プロフ交換し合って、ナノテクに詳しい人知らないって聞いたら、あなたの事を紹介してくれたの」

以前、リサの肌ケア用のナノテクが誤作動し、肌荒れが酷くなり、ウィザードの力を使い修正したことがあった。

「……中で話さない？」

明那は店の入り口を指差しながら言った。

「ああ」

明那に促されるままに、レイジはクラブ中に入っていった。

クラブの中央に存在するダンスフロアは吹き抜けで、最新の照明や音響施設が設けられ、サイバーテクノが鳴り響き、光と音が駆け巡っている。

来店者たちは、まさにトランス状態だった。

エレメントによる演出はないが、光と音で頭が痛くなってくる。

声も聞き取りづらい。

レイジと明那はダンスフロア隅にあるテーブル席に向かい合って座る。

壁を背後に座る明那に、「で……？」とレイジは切り出した。

「わたしの身体のナノテクを除去してほしいの」

「えっ？ 何！？」

周囲の激しい音に、レイジは思わず明那の言葉を聞き逃していた。
「わたしの身体のナノテクを除去して欲しいの！」

明那は大きい声で答えた。

「……市販のリムーバーでできるだろう？」

レイジはやりわり断りながら、明那を観察していた。

ナノテクの改造を受けているようには見えない。

改造している来訪者に比べれば、遥かにノーマルに近いように見える。

顔立ちは自然な作りだし、整形してるようには見えない。肌の血色もよく健康そうだ。

ナノテクを頼るような先天的な病でも抱えているのか、それともタトウーを身体に入れているのだろうか。

「……できないの」

明那は言いずらそうに答えた。

「どこの部分のナノテクなの？」

レイジの問いに明那は頭を指で突く。

「頭……？」

明那は頷く。

「……まさかマジか？」

レイジの言葉に、明那は驚いた顔を見せる。

「知ってるの……？ マージの事」

「……まあ」

しまった、とレイジは思ったが、遅かった。

明那の顔が明らかに輝きを増している。

可愛いだけにタチが悪い。

「腕のいい専門医でも紹介しようか？」

レイジは話をそらすように言った。

「……難しいと思う」

明那は拒否した。

正規の医療機関を頼れないというのはそれなりに理由がある。

トラブルの匂いをエイジは嗅ぎ取っていた。

「ウィザード——」

明那が言った。

「誰か知らない……？」

「犯罪絡みか……？」

レイジは警戒した。安易に自分がウィザードであると名乗ることはできない。

ウィザードの能力を犯罪に利用しようとする連中は多い。

「……違うの。そうじゃなくて——」

「あのさあ、全部話してくれないと相談の乗りようが無いだろ。いちおこうして来てる訳だしさあ……」

「……ゴメンなさい」

明那の先ほどからどこか落ち着きがない。

サングラスを掛けたまま、常に周囲に気を配り、警戒しているように見える。

「まさか、誰かに追われているのか……？」

明那はレイジの言葉に、一瞬否定するようなそぶり見せるが結局頷く。

明那の表情が変化していた。

レイジは明那の視線の先を見る。

三人連れの男女が立っていた。

男女はレイジと明那へ向かって近づいてくる。

二人の前に立つと、「……やっと見つけたぞ、比嘉明那」と女が言った。

明那は避けるように顔を背ける。

アジア系の美女で、レイジと差ほど年齢は変わらないようだ。

女は明那と同じく、サングラスを掛けている。女性にしては長身な身体に赤の戦闘スーツに身を包み、背後には二人の黒いスーツを着た男を従えている。

アイコニック社のウィザード、紅龍だった。

「……人違いじゃないんですか？」

明那は言った。確かにサングラスをつけている為、顔は確認しづらい。

「アイコニック社に雇われた人間と言えば納得するか……？」

アイコニック社という明那の言葉に、レイジに眼つきが変わる。

「……探すのに苦労したぞ。手間を掛けさせてくれるな」

紅龍は疲れたように息を吐きながら答えた。

「サングラスで顔を隠しても無駄だ。……あらゆる痕跡は消せても、匂いまでは消せなかったようだな」

いつしかレイジの視界には朧が出現している。

周囲には朧は見えない。

脳内エージェント・モード——視覚皮質に自らの姿を書き込んでいる状態だった。

レイジは朧を通し、密かに三人のセンシングを開始していた。

背後の男は、体温分布が人間と違っていた。

——構成素材はナノマシンマテリアル、全身が化学物質を感知するナノセンサー構造になっている……匂いを感じする奴ね。ようはナノ粘土のお人形よ……。マージのブレイン・マシン・インターフェイス機能で、その女とオンライン状態——。

朧の告げる情報が頭の中に流れる。

「……嗅覚センサー搭載のクレイマトンか」

レイジの言葉に、紅龍は怪訝な顔をした。

「——詳しいな」

——エレメントは……？

レイジは脳内会話で朧に尋ねる。

——十分。エレメントのバージョンアップも終了しているから、誤作動の確率はコンマ以下。

——光学剣の読込^{ロード}を……。

——了解。このまま戦闘態勢に移行するわよ……！

「付いて来てもらおうか？」

紅龍は明那に冷たく告げた。

「イヤだと言ったら……？」

明那の代わりに、レイジが答えていた。

「……ガキが。イキがると死ぬぞ」

「……やってみるよ」

エイジは笑う。

女の後ろ右側の黒スーツの男は口を開くと、レイジに息を吐く。

男たちが口から吐き出したのはエアロゾル型のナノテク兵器だった。

「言っとくけど、ナノマシンのガス攻撃は通用しねーぞ……！」

レイジは不適に笑いながら言う。

「こいつ……！？」

^{フリート}「実行……！！」

レイジの声と共に、光の剣が出現した。

^{オプティカル・ブレード}「光学剣……！？」

驚く紅龍に、実体化させた光学剣をひらめかせ、レイジはクレイマトンに斬り込んで行く。

光学剣——エレメントを組み替えることで、励起状態にし、電磁高周波の刃を形成、切断現象を起こすウィザード・スキルである。

^{スタン}麻痺モードに移行^{シフト}すれば、非殺傷兵器としても使用できる。

朧が仮象体としてフィギュアくらいの大きさで出現し、レイジの肩に乗っかっている。

「ウィザードか！？」

ウィザードの要、戦術AIたるマージ朧は完全にアクティブ状態

だった。

臓の戦闘モードへ移行し、脳に形成されている情報処理機能が活性化する。

臓の命令受けて、ナノファイバーにより結線されたマージや胎内で待機状態のナノマシンが動き出す。

負傷を担当する医療型に神経伝達の加速化、代謝機能の調整など、様々な機能を持つナノマシンが起動し、胎内に配備される。

臓がエレメントを利用し、空気中物質を分析しながら、マージによる戦闘ソフトの組み合わせたデッキが解凍起動する。

必要なナノマシンの自己組織化および組み合わせ作業は終了している。

光学剣の切断モードによる攻撃は、クレイマトンの腕を切り裂く。切断された断面は、粘土のような質感をあらわにしていた。

だが、粘土人形は腕を切られても、活動を停めない。

「ユニット2行け!!」

紅龍に指示にクレイマトンが動く。

だが、レイジのほうが早かった。

「サージ・プリンガー、読込……!!」

レイジのオーダーに、臓を耳をくすぐるように笑う。

久しぶりのウィザード同士の本格的戦闘に喜んでいるようだった。エイジの命令にマージの記憶媒体であるDNAメモリ内に保存されている別の戦闘ソフトの読込に入る。

読込と同時に、プログラムを光学剣にインポートすると、光学剣が青みを帯びる。

「実行……!!」

レイジの声と同時に、光学剣を中心に周囲に放電現象が発生し、静電気が走りすぎていくような現象が起きた。

エレメントが過負荷により焼き切れ、電磁障害が発生していく。周囲に磁気嵐が吹き荒れ、電磁波が駆け巡った。

「どう? サージのシャワーは……?」

レイジと朧が仕掛けたのは、EMP攻撃だった。

クレイマトンに、EMP現象により発生する電磁波でクレイマトンにインストールされているプログラムを初期化する。

黒スーツの男は大きく痙攣すると、自己組織化していた身体が服ごとヒビが無数に入っていくと、崩れ去る。

放電現象が飛び散り、クラブ内の電飾が弾け飛び、四散する。

周囲から悲鳴が上がった。

「逃げるぞ！！」

レイジの言葉に、「えっ」と状況を飲み込めないのか明那は聞き返す。

「局地的な電磁パルス障害が起こって、エレメントが一気に消失した。様子を見に管理会社や警察がすぐに来る。急げ……！」

「う、うん」

放電現象が生じ、空気が焦げ臭い匂いが漂う中、レイジは明那の手を引いて、クラブを出ていた。

手を引っ張られる明那の口に笑みが浮かんでいた。

「ま、待て……！」

紅龍の制止の声が背後に響く中、大混乱の店内に二人は紛れ、消えていった。

脳内間軍事ネットワーク

2111/05/23 08:15:45 >B・M・I ne
twork communication<
ONLINE:<blackshall>

TO:<honron>

——… ウィザードは対象者と一緒に逃亡、その後消失が。
ブラックシエルは脳内で呟いていた。

ブラックシエルと紅龍のマジおよびクレイマトンは、オンラインでマジのB・M・I機能を利用した、脳内間軍事ネットワークを形成していた。互いにリアルタイムでチェックし、双方向通信を行っている。

システムを通し、ブラックシエルはクレイマトンがクラッシュするまで戦闘の一部始終を見ていた。

——… 申し訳ありません。

紅龍は謝罪する。

脳内通信による情報交換と脳内チャットである。

—— 光学剣に、W・二三ソフトの使用……か。海賊版か……？

—— 分りません。ですがおそらくオリジナルかと……。

—— W・二三…… 通称<サージ・プリンガー>、特定圏内のナノマシンの複製機能を崩壊させ、ECM現象を起こし、行動不能に陥らせる。追手を振り切る為に、ウィザードが使う軍事戦闘ソフトだ。

マジが記録していた戦闘時の様子を解析した得られた結果だった。

引き起こされたECM現象はマーカーや追尾機能を破壊し、短時間使用不可能になる。

——マージと思われる姿も見えました。

エレメントのクラッシュによる局地的ジャミングが発生し、また追跡用のクレイマトンを失った紅龍が二人を追う事が出来なかった。

——サージ・プリンガーやマージは、マニアやおたくが扱うシロモノじゃない……。まさか、あんなガキがウィザードとはな……。

ユーティリティ・フォグをあそこまで組み替えるとは、ナノテク・キッズ蔓延る世界有数のナノテク都市……か。

——我々と同じPMC所属のウィザードということですか……？

紅龍はブラックシエルに尋ねた。

——問題なのはプロの我々が、ガキに言いようにあしらわれたということだ。

——探索用のセンサーを強化したタイプだった為、戦闘能力に特化したタイプならば……。

——言い訳はいい。

にべもないブラックシエルに対し、紅龍は一瞬言葉を飲み込む。

紅龍の悔しがる感情の波が、ブラックシエルにバイブレーションとして伝わってきた。

——……現在、独立行動型の別のクレイマトンがウィザードを追尾しています。相手に気づかれないよう、相互通信を切った状態ですが、もう少しで情報が送られてきます。それまでお待ちを……。

2111/05/23 08:24:30 >B.M.ine
work communication<
<<<< OFFLINE

脳内ネットワーク通信が終わると、ブラックシエルは眼を開いた。

「会話は終わったか……？」

田宮が自分のデスクから尋ねてきた。

「ああ」

ブラックシエルはソファから身を起こす。

田宮の社長室だった。

「見つけておきながら、まさか逃げられるとはな……」

ブラックシエルはジロリと支社長を見る。

「収穫がないわけではない」

「……………」

「シンカーがワイザードを探していたということは、マージの分離およびデータの抽出あるいは消却が目的であるのは間違いないだろう」

田宮はブラックシエルの言葉に鼻を鳴らす。

「……………それよりも対象者を助けたワイザードの詳細を調べる。データを渡す……………お宅ら向きの仕事だろう……………」

悠然と構えるブラックシエルを、田宮は無言で睨みつけていた。

魔法の錠前

レイジが午前九時を回った頃、自宅近くのコンビニに向っていた。都市内の温度は極めて快適に保たれている。

都市を取り巻く空気が、避暑地のように管理され、適温となっていた。

それでも若干肌寒い。

かつてこの東京が温暖化の影響で、灼熱の都市だったなどレイジは信じられなかった。

ユーティリティ・フォグレットがもたらす都市型情報環境である。

官民政の一大事業である東京都再構築化計画は、追加事業である都市環境の正常調整化に、ナノテクを利用した。

ユーティリティ・フォグレット<エレメント>の散布である。

エレメントはもとも惑星改造用^{テラフォーミング}に開発されたナノマシンであり、それを都市環境改善型に転用したものだ。

普段は大気を模倣し、一種の生態圏^{バイオスフィア}を形成し、都市防衛を担うと共に、都市環境の正常化と大気を媒介にした情報伝達機能を持ち、空気の清浄化に加え、ヒートアイランド現象の都市気温の冷却化や都市環境の改善に勤め、より安価な情報処理環境を促した。

ナノマシンが持つ情報処理能力を最大限に活かし、都市空間の情報環境は飛躍的に拡大し、情報は元より仮象オブジェクトであるアバターやエージェントを現実世界に投影することができる。

エレメントは文字通り四大精霊そのものであり、メタスフィア内は精霊と魔力に満ちた魔法の国だった。

世界有数のナノテク都市東京は、ナノテクフォーミング^{サイ}された自動管理都市である。

仮想現実と現実とは可能な限り溶け合い、境を失いつつある。

それは言ってみればファンタジー世界と現実世界の融合そのもの

であつた。

ナノマシンは科学も医学も宗教も生活も、そして戦争のあり方すら一変させた。

電話が入ってきた。

——身体、大丈夫か？ 川越ちゃん心配してたぞ。
裕樹からだつた。

「……ああ、風邪引いちゃってさあ。インフルかもしれない」
——……マジかよ。でも、合法的に学校休めるな。
祐樹の言葉に、エイジは笑う。

レイジは対ウイルス用ナノマシンを体内に持つ。エアロゾル型ガス兵器など通用しない。

風もめつたにひくことは無い。

「データの件だけど、入手できたぞ」

——サンキュ、持つべきものは友達だぜ。

「金、用意しておけよ」

——お前こそ、早く身体直せよ。

電話を終えると、レイジはコンビニに入ってしまった。

——情報検索は終了しているわ。

臍との脳内チャットだつた。

——それで？

レイジは雑誌コーナーに向つた。

愛読している漫画雑誌を手取る。

——紅龍……多分仕事名ね。PMCウィザードで、別の戦争代理派遣会社の傭兵やら軍役経験者と一緒に紛争地帯に派遣されているわ。画像データが残されてた。

——そんな連中を使って……。一体何が目的なんだ？

——そこまでは分らないわ。

——彼女の身元の確認は？

——さあ……。

——おい。

——……あのさ、彼女の名前が本名だとして、彼女のことを調べたら、向こうに私達の居場所伝えるようなもんでしょ？ 追われてんだから……。

朧の言うことはもつともだった。

比嘉明那——レイジは彼女のことを思い浮かべていた。

助け出した後、結局自分の自宅に匿っていた。

明那に付き合い、今日は具合が悪いということで学校を休んでいる。

レイジのベットで明那は眠っている。

——PMCの方は比較的入手しやすかったから、問題ないでしょうけど、明那ちゃんの件は、彼女から直接聞いたほうが早いよ。

コーヒー缶を二本買い、コンビニを出ると、レイジの目の前に朧の仮象体が出現していた。

「彼女のことで頭がいっぱいみたいね」

仮象体エージェント・モードだった。

「……何、言ってるんだよ」

慌てるレイジを、朧はニヤニヤ顔でからかう。

「……まあ、彼女可愛いし、若いからしょうがないけど、家にかくまうのは感心しないな」

「……仕方ねえだろ」

「あんま浮かれてると痛い目見るよ。多分、向こうは君を洗って追ってくる。たどり着くのも時間の問題。半人前の君が相手をするのは、荷が重いんじゃない。昨日は不意打ちでどうにか逃げられたけど……。一度、教授と相談したほうがいいんじゃない……？」

「教授が許す訳ないだろ」

「……そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。クールなようできて、直情型。すぐにアツくなって、物事が見えなくなる……。君の悪い癖だよ」

「……人を勝手に精神分析すんな」
プロフィール

「わたしをインプラントした時もそうだったでしょ……？ 熟慮っ

て言葉知らないの？」

反論できなかった。

勢いに任せ、行動するのは自分の欠点だと、レイジも自覚していた。

「特に君の場合は因縁もあるでしょ……？ アイコニック社、正確にはナノテックス社に」

ナノテックス社と言う言葉に、レイジは反応した。

「でも、まあ、ここで逃げるのも男の子じゃないよね」

「いいのか……？」

「わたしの行動原理は、オーナーの命が最優先、次に社会的責任を全うすること……ロボット系の基本でしょ？」

朧の言葉にレイジは苦笑した。

「とりあえず、彼女が起きたら、マージの撤去作業を行いましょう。話はそれから」

やっぱり朧は頼れる相棒だった。

自宅マンションに着き、レイジはドアの前に立つと情報ウィンドウが浮かび上がった。

情報ウィンドウには、鍵穴のような視覚記号が描かれている。

レイジは、自宅にエレメントによる防護プログラムを施していた。
ウィザード・ロック

『魔法の錠前』と呼ばれるウィザード・スキルである。

明那を保護するために偽装映像や電子トラップ、そして防壁などさまざまな防護プログラムを同時展開していた。

ウィザード・ロック
文字通り、魔法の錠前であつた。

「解除キーを」

レイジは朧に命じると、レイジの手に、鍵が出現していた。

もちろん本物ではない。朧や情報ウィンドウ同様、仮象体である。防護プログラムを解除するキーファイルを仮象体化したものだつた。レイジはキーを鍵穴に差し込む。

ドアを中心に電子の光が走り、エレメントの防護プログラムが解

かれていく。

臍も姿を消した。

本来のカードキーを出すと、本来備え付けられている鍵を開け、ドアを明けた。

部屋はカーテンを閉め切り暗かった。

浴室のほうから歌が聞こえてきた。

オフィリアの新曲で、歌っているのは明那だった。
かなり上手かった。

本人と同じ、いやそれ以上かもしれない。

明那は素肌にバスタオルを巻いている姿で、奥から現れた。
レイジは思わずドキツとする。

「……ごめん、お風呂勝手に借りちゃった。シャワー浴びてたの」
濡れた髪をドライヤーで乾かしながら、明那は答えた。

レイジは明那の無防備ぶりに、すっかり言葉を失っていた。

「のんきに風呂入ってる場合かよ。追われてんだろ……？」

レイジは不満そうに言った。

「……だって匂いを追ってきたんでしょ？」

「体の匂いだけ消しても意味無いんだよ。化粧品とかメイク道具とか全部取り替えないと……」

「そっか」

明那から漂う石鹸の匂いが、レイジの鼻に届いた。

女性に免疫が無いわけではないが、若い健康な男子にはあまりにも刺激が強すぎた。

考えてみれば自分の部屋に女の子を招いたのも初めだった。

母親が知れば、どんな顔をされるか、わかったものではない。

「エレメント制御で匂いの化学物質も変えて、その線では追跡できないようにしてあるから。もう対策済みだって」

「そういうことは、もっと早く言って欲しかったな」

「……何だよ、その言い草は」

レイジの言葉に、明那はしゅんとなる。

「……そんな怒らなくてもいいじゃん」

そういった後、明那はくしゃみをした。

「ごめん、すぐ着替えるから。ちょっと待って」

戸惑うレイジに、明那は再び奥へ行った。

服に着替えると明那は出てきた。

「改めまして、比嘉明那です。昨日は本当にありがとうございます……」

「……礼はもういいって」

レイジは買ってきたコーヒーを差し出す。

明那は「ありがとう」と言いながら、缶を受け取った。

「どこの高校行ってるの？」

「××高の芸能コース。最近はほとんど行ってないけど……」

明那は缶のプルトップを開ける。

「へえ……、芸能人なの？」

「……まあ」

明那は返答を濁し、缶に口をつけた。

レイジは明那の歌唱力に納得がいていた。

「レイジ君の親は……？」

「……ああ、母親は海外に出張中。バイヤーやってて、商品の買い付けに行ってた。しばらくは帰ってこない。親父は……いない」

レイジの言葉に事情を察したのか、それ以上明那は尋ねてこなかった。

急に明那は身体をふらつかせた。

「どうした？」

レイジが尋ねると、明那は首を振った。

「……ゴメン。最近頭痛がひどくて……。薬飲んでいい……？」

明那はバックからピルケースを出す。

「……大丈夫だよ」

明那は数錠口に入れると、噛み砕く。

「……うん。たんなる偏頭痛持ち」

薬を飲み干すと、

「レイジ君つてもしかしてウィザードなの……？」

と明那は尋ねてきた。

レイジは溜息を吐くと、頷いた。

隠しても仕方のないことだった。

「つていうかどうして言ってくれなかったの……？」

明那はレイジを睨む。

「……会って間もない、見ず知らずの人間に言えるか。世間じゃ犯罪者扱いなんだから」

ウィザードの修行は周りは知らなかった。

違法行為に等しいウィザードの技能を身に着けることは危険であり、自慢できることではない。

サイボーグの進化系、トランスヒューマニズム思想の最先端モードであるウィザードに対し、アンダーグラウンド的偏見が強く、チート行為と称され世間では批判的意見も多い。

「そつちこそ、何でウィザードを探してるんだ？」

レイジは本題に入る。

「……クラブで言ったでしょ？ マージの除去と分離。できればマージのメモリーに保存されているデータを取り出した上で行いたい」

リムーバーのチューブを、明那はバックから出していた。

「マツキヨとかハンズとかで買ってきて、いろいろ試してみたんだけど、ダメみたい」

レイジはナノテク除去用リムーバーを手に取り、確認する。

「とにかくマージを分離すればいいだろ？ …… 臃」

レイジが名を呼ぶと、電子の光と共に臃はフィギュア程の大きさで姿を現した。

「レイジ君のマージ……？」

明那が尋ねると、レイジは頷いた。

「名前は臃よ。よろしくね、明那ちゃん」

臃は明那に挨拶する。

「かわいいけど……こういうの好きなんだ」

「……言っとくけど俺の趣味じゃないからな」

明那のどこか冷めた視線に、レイジは明那に弁解した。

「嘘嘘。こいつ引くくらい、ナノテクオタクだから」

「……いいから、さつさとやれよ」

朧は微笑むと、明那の額に触れた。

「——アクセス開始」

朧は明那のマジに接続した。

アクセスに伴う情報交換に反応するように、朧の瞳が揺れ、高速運動を起こす。

「きゃっ——！」

朧が悲鳴を上げ、何かにぶつかったように、跳ね飛ばされる。

「……どうした？」

「何これ……！？」

朧が信じられないような声を上げる。

「データポートから接続してみたんだけど、拒絶されちゃった……。プロテクトがハンパない……！」

朧の様子に、明那も困惑している。

「……論理人格および保存データのプロテクトレベルはA A A……
国際基準第一級著作権保護規格指定。マジおよび内部データの所有権は、アイコニック社に帰属——」

朧は判明した事実を告げていく。

「マジのスペックは、本人との連動同調型……仮想現実接続ポートなど基本機能を搭載……。現在自閉休眠モードのため使用不可……。その他特化機能は不明——。アンインストールの際は、所有者の認証許可が絶対条件……。例外は一切認められず、何これ……？」

「……やっぱり無理か」

明那は溜息を吐く。

「専門医でも難しいかも……。A A Aって、トリプル・エー軍事機密レベルだよ。どんなデータが入ってるの……？」

朧が明那に尋ねる。

「それは――」

明那の言葉をさえぎるように、自身の腹が鳴る。

明那は顔を真っ赤にした。

緊張感の無さに、怒りを通り越し、レイジは笑った。

「腹減ってんの……？」

レイシが尋ねると、明那は恥ずかしそうに「実は」と言った。

ごまかす様に明那はレイジの手に腕を絡めた。

「外に食べに行こ。お礼じゃないけど、奢るから」

急に身体に密着され、レイジは再び明那から石鹸の匂いを嗅いでいた。

カーキ・グー

紅龍は燃料電池駆動型のミニバンを止め、道路に横付けしていた。すでに紅龍はレイジの自宅近くまで訪れていた。

紅龍がレイジの追跡に放った無人機からの情報だった。

NBC兵器使用下でも活動できる対電子妨害対策型追跡機で、レイジのECM攻撃に対し、とっさに生み出し、追跡させた。

相手の索敵能力を逃れるために、あえて自立行動モードで追跡させた為、発見が遅れた。

GPS位置情報や周囲の画像データなどを受信し、それを元にレイジの自宅近くまで車で駆けつけていた。

取り逃がしたウィザードの居場所は掴んでいた。

自宅には生意気にも電子トラップが施されていた。

無人機はそのまま自宅を監視していて、絶えず情報が紅龍へ入ってきていた。

数分前には、トラップを解除し、中に入っていくウィザードの姿が映像で送信されてきたばかりだった。

紅龍は助手席のグローブボックスからフィルム袋に包まれた長方形の物体を手にとった。

フィルム袋を破ると、カーキ色の粘土のようなものが出てきた。

カーキ・グー——軍用ナノ粘土^{クレイ}である。

先日の嗅覚センサーを搭載したクレイマトンの素材である。

一般には出回っておらず、ナノテク兵器を自己組織化により生み出すことができる。

紅龍は、軍用ナノテク素材を助手席のシートに置く。

紅龍はマジを起動させると、思考制御によるBMI機能とエレメントを媒介に、データリンクし、ナノ粘土に組成ファイルを送信した。

粘土は自己組織化を起こし、変化を起こしていく。

ウィザードが複製師といわれる所以である。

ウィザードの犯罪行為に、違法複製製造がある。

ナノ粘土に代表される自己組織化素材やレプリケータなどの偽造技術を用いて、製造元に無断で複製し、本物と称し、コピー商品として売買する。

もちろんオリジナル商品はオリジナル保護のため、さまざま偽造防止技術を盛り込み、著作権保護やコピー対策を行っているが、イタチゴツコの状態だった。

コピーに価値が無いのは、いつの時代も変わらなかった。

紅龍は仲間内から造形師モデラーの異名を持つウィザードだった。

紅龍がレイジの追跡に放った無人機も同じ素材でできたナノテク集合体だった。

カーキ・グーは軍事規格のため、戦闘能力に優れてて、さまざまな自己組織化兵器を実装させることができる。実際の戦場でも使用されているものだった。

粘土に発光ダイオードのような電子の光が宿ると、粘土から一匹の羽虫が飛びあがった。

蜂であつた。

羽はもちろん複眼、表皮の毛まで完全に再現された自己組織化機械であつた。

紅龍は車の窓を開ける。

蜂は次から次と粘土から誕生し、車の外へ飛び立っていった。

ファーストフード店にて

レイジと明那は、自宅近くのファーストフード店を訪れていた。自宅近くの商店街の端にあり、レイジもよく利用する店だった。ファーストフード店のほとんどはナノテクによる成型食材を使用し、コストダウンを図っている。

高校生の身分であるレイジ達にとってはありがたい存在であった。二階の席に座り、明那はハンバーガーに齧り付いている。

明那が頼んだのは、ダブルチーズバーガーだった。パテが二枚はいったボリューム満点のハンバーガーである。

「……まったくよく食うな」

明那の食欲に、レイジは呆れながら言った。

「……だってここ数日ともに食べてないんだもん」

レイジが頼んだのは、ロースカツバーガーである。

サイドメニューにはポテトを頼んでいた。

臃も出現していて、二人のやり取りを見守っている。

レイジもカツバーガーに口をつける。

「まあ、確かに俺にも聞こえるくらいの腹の音だったもんな」

レイジの言葉に明那は顔を真っ赤にする。

「……性格悪い。そういうこと女の子に言う……?」

「だからモテないの」

臃もレイジを攻める。

「モテるモテないの話は今カンケーねえだろうが……!?!」

レイジは抗議の声を上げる。

「……なんでさあ、アーバン・トライブなんて危ない場所を指定したんだ?」

「あそこはアンダーグラウンドシーンのナノテクフリークスの最先端が集まるクラブだって訊いてたから……。ウィザードってようはサイボーグなんでしょ?」

「否定はしないけど……。でも、クラブで群がってるような奴らとは一緒にして欲しくないね」

「むしろアキバ系……？」

「うっさい」

レイジは咳払いをした。

「改めて聞くけど、レイジ君はウィザードなの……？」

ポテトをつまみながら、明那はレイジに尋ねてきた。

「いちおね」

レイジもポテトを摘みながら答えた。

「半人前だけどね」

臃が言う。

「……いちいち口出すな」

「マージとか戦闘ソフトのほうは……？」

アイスコヒーをストローですすりながら、明那は尋ねた。

「……まあ、いろいろあつてさ」

レイジはあまり多くを語らなかった。

レイジが保有するソフトのソースは瞑想寺院である。瞑想寺院に保存されているデータだった。

ウィザードの命は情報量である。

ナノマシンの精製データは元より、戦闘関連のソフトから、生物のDNA情報に至るまで脳内のDNAメモリにストックする。

貴重な情報を得ることこそ、ウィザードの喜びであり、命題ともいえる。

様々な情報を保有することで、その情報を編集、ナノテクを通して、現実世界に映し出すことが可能だからだ。

情報ソースを守ることは、ウィザードとしては本能と言えた。

「子供の頃から、カードバトルのようにデータ同士を組み合わせ、遊んでたから、な。それより、明那こそ、どうしてあいつらに追っかけられてんだ……？」

レイジは明那に訊きながら、教授に相談するべきなのかもしれない

い、と考えていた。

「マージが関係しているのか……？」

明那は頷く。

「アイコン尼克社とどう関わりが……？」

「そんな一度に聞いたら、かわいそうだってば。……だからモテないの」

臃はレイジを諷める様に言う。だが、臃の言う通りだった。

明那は周囲を確認するように見る。

「……絶対に笑わないでね」

明那は真剣なまなざしで言うと、レイジは「ああ」と言った。

「——わたしはオフィリアなの」

明那は小さな声で、レイジに伝えた。

「はっ？」

「……だからオフィリアなの」

レイジはすぐに理解できなかった。

内容だけ聞けば、明那の発言はかなり痛い内容である。

レイジは反射的に臃を見ていた。

「……体温分布、声の緊張度合、発汗状態から嘘は言っていないわ。眼球運動や表情から精神的疾患の兆候も見受けられない。……まあ、本人が本気でそう思い込んでる場合は別だけど」

「だからホントなの……！」

明那は必死に訴える。

「はいはい、大ファンなのは分ったから」

「……そうじゃなくて。正確には、オフィリアの論理人格を動かすためのマージがインプラントされているの」

「……ごめん。意味が分からん」

「つまり、オフィリアはマージって事……？」

臃の補足する言葉に、明那は頷く。

「姿形はぜんぜん違うじゃないか？」

レイジが思わず突っ込む。

「……仮象変身機能。ウィザードとは思えない言葉なんだけど……」
明那は呆れたように言う。

「言ったでしょ？ こいつ半人前だって」
朧の言葉に、レイジはムツとする。

「……すぐには信じられないよね？」

明那はレイジを伺うように言う。

「まあ……狙われたことは事実だからな」

「今、わたしのマージはあいつらに追っかけられないよう論理人格を自閉休眠にして完全に停止してあるの」

「追跡監視システムが組み込まれてるのね……？」

朧の言葉に、明那は頷く。

「わたしはシンカーと呼ばれる……」

「ちよつと待って」

朧が明那をさえぎる様に言った。

朧は空を見ていた。

店内を一匹の蜂が浮遊していた。

「……蜂。蜂がどうした……？」

レイジが朧にたずねる。

「……多分、ナノ集合体。自己組織化型機械よ」

朧の言葉に、レイジは状況をすぐに理解した。

「……もう、見つかったの？」

明那の問いに、朧は「らしいわね」と言った。

「……逃げたほうがいいな」

レイジが立ち上がると、明那も席を立ち上がっていた。

ウィザード同士の戦い

店を出ると、蜂を逃れるように、レイジと明那は町内を逃走していった。

「……どこに逃げるの？」

明那は走りながら、レイジに尋ねた。

「駅に決まってるんだろ……！」

駅入り口まで直線で約300メートルの所まで来ると、行き先を塞ぐように蜂の大群が待ち伏せしていた。

レイジの姿を確認すると、蜂の大群は一斉にレイジ達へ向かってきた。

レイジは舌打ちすると、蜂を避けるように来た道を振り返る。

蜂は適度な距離ととって追跡してくる。

「……誘導されてる」

レイジの肩に乗る朧が言った。

「みたいだな」

「……ハッキングしている暇はなさそうよ。戦闘蜂に装填されているのは間違いなく毒物がBC兵器——。一匹クラックしている間に、体中刺されるわ」

「くっそ……！」

毒づくレイジの歩道すぐ横の道路に燃料電池駆動の白いセダンが横付けされている。運転席には誰も乗っていないかった。

車の脇を走りすぎるとき、朧が「車でもパクる？」とたずねてきた。

車の防犯機能をハックし、オート運転させる違法ソフトはメモリ内に保存していた。

「……できるわけないだろ」

レイジはすぐに断る。

さすがにそれはできなかった。

駅からどんどん離れていく。

レイジと明那は反対側の道路へ渡るため、歩道橋を駆け上がり、上に達した。

階段を上りきったとき、前方の空間が歪みながら油の油膜のように鈍く七色に輝いている。

レイジは足を止める。

「……どうしたの？」

明那は尋ねるが、レイジは無言だった。

ウィザードスキルの一つ、ステルス擬態^{カモフラージュ}だった。

ステルス擬態——エレメント制御によるウィザードの周囲をカメレオンのように背景にあわせ変幻自在にどんな色にでも変貌するウィザードスキルで、仮象変身機能もこれに当たる。

移動と共に常に変化する背景に合わせるリアルタイムな電子迷彩技術である。

電子迷彩技術の登場は、戦場の光景が一変させた。

アンブッシュや変装によるステルス技術と、そしてそれを見破るセンシング技術はもはや戦争において、どちらも必要不可欠な戦術だった。

そしてウィザードも戦争において外す事のできない戦略の要となっていた。

「……姿見せろよ」

レイジが言うと、カモフラージュが解かれ、人影が現れた。

「——紅龍^{ホンロン}。アイコニック社のPMCウィザードだ」

紅龍と名乗る女は、赤い戦闘スーツを纏っている。

「……こっちは名乗んねえぞ」

レイジは光学剣を讀込し、実行出現させると、紅龍へ向って威嚇するように構えた。

レイジの光学剣の実行スピードに、紅龍は感心していた。

「……ガキの癖にずいぶん高性能のマジを共生実装しているみたいだな？」

「関係ねーよ」

蜂が追いつき、レイジの後ろに位置する。

「……偵察型じゃないな。戦闘型か……？」

蜂を見ながら言うレイジに、紅龍は笑う。

「その通りだ。……^{ホーネット}戦闘蜂と言って、小型でありながら、スペックは無人戦闘機と同じだ。わたしのマージ<^{ハイブ}巣>は多数^{マルチワイドレンジ}広範囲モデル……それをカスタマイズしたものだ」

紅龍周辺のエレメントが励起し、電子光がチカチカする。

紅龍のマージ<巣>がその姿の現していた。

<巣>の仮象体は、童話に出てくる妖精のような姿だった。

黒いヒラヒラのドレスを纏い、頭には草花で作った冠を被った妖精をカリカチエアした仮象体は、セロファンのような羽根を広げ、マージの能力を全開にする。

戦闘蜂の一匹一匹が紅龍の眼であり、手足であり、忠実な僕だった。

「下がってる」

レイジは明那に指示を出す。

「生み出した蜂たちは、女王であり指揮官であるわたしに絶対服従だ。……では行け！！」

戦闘蜂が群れを成し、移動を開始した。

レイジは光学剣を振るい、飛び交う蜂を切り裂いていく。
剣で蜂を牽制しながら、レイジは距離をとった。

「サージ・ブリンガー^{ロード}読込！！」

レイジは臍に命令を出す。

「了解！」

^{フラット}戦闘ソフトが光学剣にインポートされ、蒼白く変色する。
「実行！！」

レイジはサージ・ブリンガーを発動させた。

光学剣を中心に、エレメントがクラッシュし、EMPパルスが発生する。

<巢>の仮象体が消え去り、戦闘蜂も電磁パルスのサージに飲み込まれ、電子回路が焼き切れる――はずだった。

戦闘蜂は健在だった。

紅龍は笑う。

「……戦闘蜂はECCMを施している。擬似EMP攻撃は効かない残念だったな」

戦闘蜂は一旦旋回し、警戒するようにレイジとの距離を開けていた。

茫然自失のレイジに、さらに別の出来事が襲った。

レイジの光学剣が消失していく。

「……しまった！」

レイジは致命的ミスを犯した事を悟った。

エレメントの消失は、ウィザードとしての技を発動させる触媒を失うことそのものであった。

「空気中のエレメント比率、急激に低下……！ 戦闘ソフトの一部が使用不可……！」

臃の仮象体も希薄になり、ノイズが走る。

レイジのDNAメモリー保存されている戦闘デッキはエレメントを媒介としたプログラムが多数を占める。エレメントが存在しないと、使用できるソフトに制限が出る。

一方で、マテリアルから作成した戦闘蜂は単独で行動し、エレメント消失にはほぼ影響がない。

マージの特性が明暗分かれた形になった。

紅龍は笑う。

「……素人の戦い方だな。エレメントが消失すれば、ソフトが使えなくなることぐらい想像つかなかったのか……？」

レイジはDNAメモリーのサムネイルを開き、使用できる戦闘デッキやソフトを検索するが、殆どが使用不可であった。

焦りがレイジの全身に伝わっていく。

じわじわと戦闘蜂がレイジを追い詰めていく。

「――行け」

紅龍が蜂に指示を出す。

戦闘蜂は黒雲の様に隊列を成して、レイジに迫ってきた。

「エレメント回復まで約五分。……場所を変えたほうがよさそうよ」
警告を告げる龍の姿も希薄になっている。

レイジはあるウィザード・スキルが頭を過ぎった。

「龍、ナノプレスだ……!!」

レイジは指示を出す。

胸部が熱くなっていく。

戦闘蜂が尾部を向け、毒針の狙いを定めた時、レイジは息を戦闘蜂に吹き付けた。

蜂が突然塵と化した。

ナノプレス――胎内の代謝制御用ナノマシンなどを、別の用途に作り換えた上で息に混入させ、放出するウィザード・スキルである。暗殺目的で、呼気にナノマシン型ウイルスを混ぜ、空気感染させるのが主流だが、レイジが合成したのは、自己組織化機能を初期化するナノマシンだった。

これを噴霧することで、カーキ・グーの自己組織化現象を破壊し、バラバラと化す。

エレメントは使用できないが、胎内のナノマシンならば存在した。

紅龍が舌打ちした。

レイジのナノプレスにより、戦闘蜂が次々と崩れ去ると、逃走経路が開けていた。

「走れ!!」

レイジの掛け声に明那は頷き、一緒に駆け出した。

「逃すか!!」

紅龍が戦闘蜂をけし掛け、レイジの後を追いかける。

歩道橋を降りようとするレイジ達を、羽音を立てながら、戦闘蜂は高速で飛行する。

レイジはナノプレスをすでに使い切っていた。

戦闘蜂全てを掃討するには、量が少なすぎた。ナノマシンの生産が追いつかない。

階段を降り切り、下に着いたとき、戦闘蜂が尾部を向けながら、飛び掛ってきた。

レイジに向けて毒針を発射した。

だが、レイジに着弾することはなかった。

明那が覆い被さって、盾となり、レイジを庇っていた。

明那の背中に毒針弾が被弾している。フレンチ

レイジは明那と一緒に道路に倒れたとき、右手に光学剣が再度出現した。

「エレメント率、戦闘ソフト使用基準値をクリア！ いつでもどうぞ……！！」

臃の言葉がレイジの頭に響く。

エレメント比率の回復に臃の姿も安定性を取り戻している。

レイジが起き上がると、紅龍が戦闘蜂と共に駆け足で降りてきた。右手にはレイジと同様、光学剣を出現させている。

レイジは怒りでカツときていた。

光学剣で戦闘蜂を蹴散らしながら、レイジは紅龍へ向かって行く。力任せにレイジは剣を上段から打ち込むと、紅龍が下段から受け止める。

光学剣が合わさり、反発しあうように放電現象を起こす。

「<ニューロブレイカー>読込！ロード！」

電磁高周波の刃を合わせながらレイジは戦闘ソフトの読込を命令していた。

ソフトの読込が終わると、光学剣にインポートする。光学剣が真っ黒に染まっていく。

紅龍の顔色が変わり、光学剣を離すとレイジから距離をとった。

一方で紅龍の防衛本能に呼応するように、戦闘蜂がレイジに襲い掛かった。

蜂はレイジに張り付き、身体中に針を突き立てていく。

だが、レイジは蜂の攻撃に怯むことなく、ソフトのターゲットイングを、紅龍に設定していた。

そのまま突進し、紅龍の間合いに再び踏み込む。

<巢>の仮象体が、レイジの行く手を阻むように出現した。

レイジは光学剣を仮象体に突き刺すと、

「^{ソフト}実行……！！」

と叫んでいた。

レイジの声と共に発動したプログラムに、仮象体が絶叫し、紅龍は激しい痙攣を起こし、頭を激しく揺らす。

ニューロ・ブレイカー——B M I ネットワーク経由の神経攻撃ソフトである。

米軍電子戦略部隊が作り上げた殺人兵器として悪名高く、仮想現実内でも使用が可能であり、現実世界同様に神経系にダメージを与える。出力しだいでは、ニューロンを焼き切り、即死させることも可能な強力なソフトだった。

B M I ネットワークが逆流現象を起こし、マージへ直接攻撃を企てる。

マルチワイドレンジ型マージはB M I 機能により、作業機械群と遠隔操作や情報交換を行っている。

情報量の過負荷による逆流防止のため、防壁を神経繊維レベルでブロック単位に展開しているが、ニューロブレイカーの過負荷は、簡単に防壁を吹き飛ばした。

広範囲高感度のマージであるがゆえに、効果は絶大だった。

破り裂かれた布のように、仮象体が散り散りと化し、マージと脳を連結するナノファイバーが断線し、マージを形成するDNAメモリや中枢核^{コア}クラスタなどの主要回路が次々とクラッシュしていく。戦闘蜂の動きも止まっていた。羽ばたきが停まると、地面に落下する。

紅龍は白目を剥き、後ろに派手に倒れた。

毒の影響か、レイジも足元がふらつき、息を荒くしながら、その

場に膝を屈していた。

「……毒は処理中よ。もう少し我慢してね」

朧の報告に、「ああ」とレイジは身体にくっついていいる戦闘蜂を払いのけながら言った。

「とりあえず明那ちゃんを運びましょ」

朧の言葉にレイジは頷くと、やっこの思いで明那を肩に担ぎ上げ、その場を去っていった。

ワクチン・キス

駅前近くの公園に來ると、レイジは明那をベンチに座らせる。

公園に着くころには、レイジに注入された毒は中和されていた。

しかし、明那の息は荒い。

顔色が悪く、風邪を引いたような症状に似ていた。

「なんか熱っぽくて、身体がダルい……ヤバいかも」

レイジは明那の額に手を当てながら、エレメントを利用し、身体を走査する。

明那の体温分布に異常があった。

レイジの掌が淡い光を放つ。

レイジは体毛や表皮をナノセンサーへ変化させていた。

「ちよつと手に息吐いてみて」

レイジは明那に指示を出した。

「……レイジ君に感染っちゃうよ」

「いいから」

採取した呼吸から検出される化学物質を元に、レイジはマージの記憶媒体であるDNAメモリファイルを検索する。脳内にストックされたデータと照合し、ナノマシンの解析に入る。

レイジに注入されたものと同じだった。

後は、明那の中に存在するナノマシンを作り変えるだけだった。

ウィザードの修行がこんな形で役に立つとは、教授に感謝したかった。

「明那の中のナノの組成を変えるぞ」

明那は「うん」と頷く。

顔色は益々悪くなっている。

「……ダメだわ。変換ファイルを受け付けない」

臃が言った。

「……マジかよ」

「マージが休眠状態になってるせいだね。プロテクトが働いているみたい」

「……エレメントの組み換えは？」

「ちょっと待って」

朧は目を閉じ、試みる。

「……こっちもダメみたい。エレメントでは組成できないわ」

エレメントを再自己組織化しても、生み出せるタイプのナノマシンではなかった。

「方法がないわけじゃないけど」

朧が言った。

「どう……するの……？」

明那が息も絶え絶えに尋ねてきた。

「レイジの中で生成して、後は粘膜同士による接触感染を行なう」

「それって——」

明那は反射的に唇を手で押さえた。

「やらしい……」

明那はレイジを睨む。

「ちょっと待て……！」

レイジは朧を見た。

「……仕方ないでしょ。この際」

「仕方ないって……！？」

「生成はすでに終了しているわ。あとは二人しだいよ」

ニヤニヤしながら、朧は楽しそうに二人をけし掛ける。

「……いいよ」

明那は洪々舌を動かし、唇を唾液で湿らせる。

そのしぐさにレイジはドキリとした。

「いいのか……？」

レイジは尋ねた。

「……背に腹は変えられないでしょ」

明那は唇を突き出した。

さすがのレイジもすぐには行動に移れなかった。

「あ、ひよっとしてビビってる？」

「う、うるさい」

レイジも唇を湿らせると、明那に顔を寄せる。

触れ合う直前で、一瞬止まったが、唇が重なる。

レイジの唇に触れた瞬間、今度は明那の方から口を押し付けてきた。

「……OKよ。お疲れ様」

朧の言葉にレイジと明那は離れると、互いに大きく息を吐いた。

「あっ」と明那は突然声を上げた。

「……どうした？」

「……しまった。まあ、いいか」

明那は残念そうな声を上げる。

「——ファーストキスだった」

レイジは、頭を不意に殴れたような感じだった。

「……あーあ、男として責任とらなきゃねえ」

朧の言葉に、レイジは苦虫をつぶしたような顔になる。

「……知らねえよ。大体、ナノマシン入りのキスなんて、キスのうちに入んねえよ」

ぶっきらぼうに言うレイジの言葉に、朧も明那もギョツとなる。

あまりにデリカシーを欠いた発言だった。

「……サイテー……！」

と明那、

「……コイツ、ホントモテない……！！」

と朧の言葉に、レイジは押し黙っていた。

仮想空間 『瞑想寺院別館＜日本様式＞』

07:30:56 <meditationtemple.an
nex/japonism> LOGIN

「……困ったことになったな」

グレイン教授はレイジを咎める様に言う。

不機嫌さを露にしている教授に、レイジは緊張を身体にみなぎらせていた。

朧もどこか居心地が悪そうだった。

「昨日の騒ぎは、やはり君の仕業かね……？」

P M C ウィザードの紅龍とレイジの戦闘はグレイン教授の耳にも届いていたようだ。

「……すみません」

レイジが頭を下げる。

今三人がいるのは茶室か和室のような部屋だった。

三人がいるのは、瞑想寺院別館アネックスジャポニズム日本様式である。

瞑想寺院本館とは別のサーバーに築かれた仮想空間である。

いわば別のアジトであり、本館の場所が探り当てられないものである。

本館で出会うことが危険な場合になどに使用する保険のような場所、グレイン教授の複製エージェントが常駐している。

法の目を掻い潜り、アンダーグラウンドを生きる者たちの当然の知恵と言えた。

「……幕張の騒ぎもその娘かね」

グレイン教授が尋ねる。

「……のようです」

「みたいね」

「マージの分離を希望しているようだが、それくらい君でどうにか

できんのかね。君の自慢のマジは何をやっている……？」

グレイン教授の言葉に、臃は口を尖らせて、肩をすくめる。

「……じえんじえん適いません。だって、AAA規格のデータだもん」

「AAAだと……？ 軍事機密レベルだな。高々バーチャルアイドルに大げなことだな」

教授の発言に、臃は失笑した。

「……バーチャルアイドルって、古い言い方……。アイドルの存在自体がバーチャルみたいなものじゃない」

臃のもつともな指摘に、グレイン教授は咳払いをした。

「でも、著作権保持にしちゃ、大げさなのよねえ」

臃の話に、教授は溜息を吐いた。

「……本来ならば、許される事ではないが、一緒に連れてきたまえ」「いいんですか？」

「……仕方あるまい。不肖な弟子のフォローを行うのも、師の役目だろう」

教授の言葉に、レイジは胸をなでおろす。

彼女のマジを調べ、撤去するには教授の力なくしては適わないと思っていた。

「君の家からのアクセスは避けたほうがいいな。しばらく家にも戻らないほうがいい」

「そのつもりです」

「こちらの方でアクセスポイントが準備でき次第、連絡する。その間、君達はどうするつもりだ……？」

「本人は情報を集めたいと秋葉原に行きたいそうです。情報避難地に向いたいらしくて」

「情報避難地——」

グレイン教授は考えるように言う。

「……まあいい。修行の一環と思い、探し当ててみたまえ」

「どうだった……？」

レイジが目を開けると、明那が心配そうに尋ねてきた。

「いいってさ」

レイジの言葉に、明那は「……よかった」とほっとした表情を見せる。

レイジ達がいるのは、現実世界は二四時間営業のファミレスである。

ファミレスのボックス席からの仮想空間へのアクセスだった。

明那の体調が回復すると、レイジ達はすぐに移動し、新宿の繁華街に身を潜めた。自宅へは戻らなかった。

マンガ喫茶で一夜を明かし、少し身体を休めた後、朝食をするためにファミレスに入っていた。

「……結構怒ってたねえ、教授」

仮象体で出現している隳の言葉に、レイジは溜息を吐く。

「しょうがねえよ、この場合……」

不機嫌な教授の様子に、レイジのテンションはすっかり下がっている。

「……でも、ウィザードってホントすごいね。接続デバイス無しで仮想空間にアクセスできるなんて……」

明那は感心したように言った。

「……まあ、エレメントを利用した単なる店内ネットワークの無断使用だけだね。マジを共生実装してるアキナッチもできるはずだけど……？」

隳の言葉に、明那は曖昧に笑っただけだった。

「この後どうする？」

「決まってんだろ……アキバだろ。メシ食ったらすぐに行くぞ」

「うん」

レイジの言葉に、明那は力強く頷いていた。

「何、食べよつかない……？」

明那はメニューを見ながら言った。

「——身体の方はもう大丈夫なんだよな？」

レイジは頼杖をつきながら、明那に尋ねた。

「うん、すっかり元気。レイジ君は何にする？」

「……焼魚定食でいいよ。メシ食う気分にもなれねえ」

「ダメだって。朝食は一日の活動の基本でしょ？ わたしハンバー
グ定食にしょ」

明那はスタッフを呼び出すために、ブザーを押す。

「……電気街か」

そう言うと、レイジは思わず欠伸をしていた。

秋葉原

ブラックシエルは病室内に居た。

「無様だな」

ブラックシエルはベッドに横たわる紅龍を見ながら言った。

「……申し訳……あり、ま……せん」

酸素マスク越しに、途切れ途切れに紅龍は謝罪した。

「素人同然のウィザードに後れを取るとは……」

紅龍は集中治療室で処置が終わったところだった。

倒れていた紅龍は回収され、医療機関に運び込まれた。

マジを対応できる医療機関は東京でも限られている。

紅龍のマジと脳を結線するナノファイバーは断線し、現在使用不可である。

マジ巢も壊滅的ダメージを被っている。^{ハイプ}

現在、液状医療ナノマシンが投薬され、紅龍の脳内神経の回復と修復が行われていた。

「仕事を引き継ぐ。お前の持つ情報をもらおうか……？」

ブラックシエルは言う。

「……マジは現在自己修復中です。DNAメモリー……は、生きている……ようですが……BMI通信は、でき……ません」

「必要ない」

ナノ粘土を近くに置き、袋を破り中身を出すと、ブラックシエルは紅龍の額を鷺掴みする。

「お前の脳から直接情報をもらおう」

「……ま、待ってくだ……さい……」

「時間が無い」

紅龍の呼吸が激しく乱れ、脳波や心拍数が大きく乱れる。

「……追跡は継続中か。腐ってもウィザードだな……巢の機能もつ^{ハイプ}

いでに借りるぞ」

呼応するようにナノ粘土に電子の光が走り、活性化していた。

山手線に乗りながら、レイジと明那は秋葉原を目指していた。

「ねえ、レイジ君……」

明那が聞きずらそうにレイジに尋ねてきた。

「何だよ？」

「お礼はどうする……？」

「はあ？」

「だって、タダって訳には行かないでしょ……？」

「……後で考える」

別に金などもらわなくても、レイジはやるつもりではいた。

アイコニック社が絡んでいる。理由がないわけではない。

「キスもしちゃったしねーっ」

臃の言葉に、レイジは渋い顔をする。

「……そっか、キスの貸しがあるか」

明那の言葉に、レイジは口を尖らせ、バツの悪い顔をする。

「まあ、お互い初キス同士、めでたいという事で。特に君はいい
思いたんだから、諦めなさい」

「……そう言えば、歌上手いんだな？」

話をそらす為か、レイジは別の話題を切り出してきた。

「そう思う……？」

「さすが歌手だな……皮肉じゃないぞ」

「——ありがとう」

レイジの言葉に、明那はどこか寂しそうだった。

秋葉原の電気街に入ったとたん、レイジ達は仮象体達の洪水に飲み込まれ、情報量が一気に増えたような感覚を味わった。

従来の大型広告看板に加え、エレメントを使用した仮象広告が無

数に踊り、まるでおとぎの国へ迷い込んだようだった。

どの店も、目玉商品をリアルタイムにリストアップし、仮象体スクリン広告で打ち出している。

安価で手軽な広告媒体であるエレメントは量販店にとって、有効な宣伝効果だった。

秋葉原もまた、エレメントに彩られた仮象現実空間である。

エレメントが生み出す仮象存在である広告マペットで埋め尽くされ、電気街のメイン通りを歩き回る。

まるでそれは妖精か精霊のようだ。

レイジと明那はメイン通りから、裏通りに入る。

広告マペットも数もさることながら、広告データロイドの姿も多い。

また店先では、アニメの女性キャラクターが仮象体となって、客引きを行っている。

さらに生身の身体を持つ人間がコスプレチックな格好をして、チラシを配っている。

チラシを受け取り、レイジは内容を確認する。

仮想現実没入型のゴーグルやレイジが持つエレメント投射型音楽再生プレイヤーなどが安売りされている。

「で、どこへ行くんだ……？」

レイジは明那に尋ねていた。

「電腦横丁に行きたいの。秋葉原にあるって話なんだけど」

「電腦横丁……？ そんな店聞いたことないな」

「……データウェアス 仮想空間。本当にウィザードなの？」

「……悪かったな。どーせ俺は半人前だよ」

レイジは明那の言葉にむくれた。

「で、そんなところに行つてどーすんだよ？」

「ウィザードの集まる仮想空間なんだって。情報避難地に関する情報を集めたいの。ウィザードしかいけない空間だし、わたしのマジも使えないから、今まで手をこまねいていたんだけど……」

「ふうん」

「噂だと、接続ポイントがこの街にしかないんだって。通常のネット経由の接続では、アクセスできない空間みたいなの」
明那は周りを見渡す。

「……でも、どこにあるのかしら」

「これだけ広告マップやアドロイドが溢れかえっている以上探しようがない。」

「朧に探させようか？」

レイジが提案した。

「お願いできる……？」

「やってみるよ」

朧が出現していた。

「仮想空間を探せばいいの？」

朧はレイジに尋ねる。

「ああ」

「……でも、ぱっと見、この街自体、はっきりいって余白はあまり残っていないみたいだけど」

「たぶん、アクセスポイントがどこかに隠されているはずだ。もしかしたら仮象体の類でひそんでいるのかも」

「……なるほどね。まあ、検索してみる。一時間ぐらい掛かるから、どっかで暇つぶしてて」

「わかった」

「……用心してよ。あのPMCウィザードがまだ探してると思うから。すぐに見つけたのも、すつごく気になるのよね」

「……無人追跡機か何かか？」

「多分ね。ナノ粘土作った安物じゃなく、単独で動ける軍事規格のハードなやつ。ステルス処理もかかっているから」

「ふわふわと朧は空中へ飛んでいった。」

「……彼女が居なくなるとどうなるの」

「ウィザードの能力が使えなくなる」

「……大丈夫なの？」

「すぐに呼びもどせるよ。あくまであれは臙の手足みたいなもんだから。……それまで臙の言う通り、時間潰すか」

「……メイド喫茶にでも行ってみる？」

楽しそうに言う明那に、レイジは「ええっ？」と思わず尋ねた。

仮想空間 『電腦横丁』

朧を待っている間、レイジと明那は外資系の喫茶チェーン店に入っていた。

さすがにメイド喫茶には入らなかった。

「……逃亡生活はキツイけど、なんか久しぶりにゆっくりした感じがする」

身体を伸ばしながら、明那は言った。

「あんま気抜くなよ。別に逃げられたわけじゃない」

レイジは注意を促す、明那は苦笑する。

二階の窓からは秋葉原のメインストリートである中央通りが見える。

秋葉原はエレメントによる拡張現実オグメントが充実している。

店という店に情報タグやウインドウが幾重にも重ね付けされ、層レイヤーと化している。

渋谷とは比べ物にはならないほどだ。

エレメントが作り出す仮象体を利用した情報は、現実世界を飲み込み、混ざり合っている。

まさに秋葉原は情報の拡張現実都市オグメント・タウンだった。

それは店内も同様である。

浮遊している情報の仮象体に手を触れるだけで、秋葉原のホットな情報をすぐ様垣間見せてくれる。現在位置や話題の店などの観光情報を手軽に、しかも無料で知ることができる。

携帯端末などはもはやこの時代、単なるファッションでしかない。レイジはテーブル近くで浮いている喫茶店のロゴマークに触れた。マークはメニュー表や喫茶店の運営会社が配信する情報を展開する。再び触れると、元の社名ロゴに戻った。

「レスンばかりで、地方出身者だから、近くに知り合いや友達はいないし、『仲間だけどライバル』っていう意識の方が強くて…」

…。サバイバル形式だから油断してるとすぐ脱落させられちゃうの。恋愛が発覚して解雇された候補生の娘もいたな……。恋愛も禁止だから。候補者同士でも恋愛の話や、彼氏がいるとかの話はしなかったし……。みんなしてたのかな。わたしはその頃は夢に没頭してたから、恋愛してる場合じゃなかった……。」

誰に聞かせるようでもなく、明那は語り出した。

明那の話を聞きながら、レイジは自分の発言を恥じていた。

今まで恋愛もままならなかったのだろう。

キスの発言はあまりにも無神経だったと、改めて反省していた。

「……歌手を目指して、どうしてウィザードに？」

レイジは明那にたずねる。

「わたし、ウィザードじゃないの。マジを共生実装しているけど、正確にはウィザードの技術を転用した、オフィリアの為のウェットウェアかな。関係者はシンカーって呼んでた」

「シンカー……？」

「森川ハルナって知ってる……？」

「一昔前の歌手だろ？ 自殺したとか何とか——」

レイジは自分で放った自殺という言葉にかすかに痛みを覚える。

「彼女をデータの再現したのがオフィリアなの。わたしはその付^オ属物か、デバイスみたいなもの——」

「……マジかよ」

「アイコン尼克社は森川ハルナのデータを買ったあさって、電子的に再生したの。わたしのDNAメモリーには、そのほとんどが格納されている」

「何の為に……？」

「……さあ。過去のスターにすぎりたかったんじゃない？ 森川ハルナは一時代を築いた伝説的アーティストだから……」

明那はどこか投げやりに言った。

確かに芸能人志望の女の子に、周りの大人の思惑など分らないだろう。

「……もともとわたし沖縄出身で、歌手を目指して、地元の芸能養成スクールに通ってたんだけど、アイコンック社がタレント候補生を募集していて、そのオーディションを受けたの。候補生になれば、上京の手助けや当面の生活費も面倒見るって……。うち貧乏だから親の負担も減るし、上京もしたかったから、いいチャンスかなって……。下流の人間が這い上がるのに、芸能界はチャンスがいっぱい転がっている……。そうでしょ？」

地方の経済格差——ニュースで語られる地方の真実を突然突きつけられた。

噂には聞いていたが、自分には関係ないとレイジは今まで気にも留めなかった。

しかし、体験者の話はやはり重く衝撃的だった。

「オフイリア開発のためのデータ収集の一環で、候補生たちの脳内データを取ったの。わたしの場合、オフイリアとの同調率が高いことがわかってね。会社はデビューの条件に、マージの共生実装を打診してきたの。わたしはその条件を飲んだ……。あたしのようなサンプル体は他にも何人かいるみたい」

「なんでそこまで——」

「候補生になつてはみたものの、デビューできる当ても無く、キツイ練習の毎日で、どうやったらデビューできるか先がまったく見えなかった……。ダンスが下手だったから、練習するしかないなって思っ、レッスンが終わってからずっと鏡の前で自主練習したり、ビデオに撮って自分がどう映ってるのか研究したり……。フリーも覚えるまで寮には帰してもらえなかった……。食えることを忘れちゃってずっとレッスンをし、倒れて緊急入院しちゃって……。いっつも周りの顔を窺ってたから、そのせいで、どんどん自分らしさがなくなっちゃった気がする——」

明那の笑みにはいつもどこか影がある。

レイジはその理由を見た気がした。

「……でも、さすがに限界みたい——。みんなが求めているのは、

わたしじゃなくて、結局オフィリア……森川ハルナだもの」

いつも明るいつ明那に疲れのようなものが見えた。

「ファンは裏切っちゃうことになるけど……。もう誰かの代わりに歌を歌うのはイヤだし、自分の歌をみんなに届けたいから……。また、一からやってみる。レベルはいつぱいあるし、なんとかなるでしょ」

いつしか店内にはオフィリアの最新曲が流れていた。先日レイジが入手したものだ。

拡張都市秋葉原でもオフィリアの人気は高かった。

非現実的存在であるディーヴァノイドは、現実よりも非現実的なものを求める住人や街の空気と馴染みがよかった。

「幕張の騒ぎは……？」

レイジは別のことを尋ねていた。

さすがにそれ以上は明那の話を受け止められなかった。

「……うん、わたし。連中から逃げ出すために、オフィリアの力を使ったの」

「どんな機能を使ったんだ？ オフィリアの……マジの機能は？」

「＜インタラクティブ・ボイス＞と＜エレメント・ハーモニー＞——インタラクティブ・ボイスはリスナーの識閥下やバイオリズムに働きかけ、ヒーリング効果のある声質を放つ機能。エレメント・ハーモニーはエレメントの同調による音域効果の拡張、設計上は無限に音域を広げられるって……。あとは、仮象変身機能による音源や演出の編集とか……。エレメントを媒介にして、——まあ、あくまで歌の演出効果関連のものよ」

明那のマジは、通常のウィザードのマジと仕様がかなり違うようだ。

「全部……歌のためか」

レイジはそう呟きながら、オフィリアの歌がサブリミナル識閥下に影響を及ぼすという事実に不快感を覚えていた。

依然、オフィリアの曲は店の中で流れている。

先ほどまで心地よかつたはずの音楽が、違つたものに聞こえてくる。

アイコニック社、そしてナノテックス社のやり方にはいつもながら反吐が出そうになる。

明那は完全なる犠牲者だつた。

「わたしは歌のための道具に過ぎない。自分で望んだのに……ね」
明那は自嘲気味に言う。

泣き出さないだけ、明那は強かつた。

「レイジ君こそ、どうしてウィザードに……？」

明那の問いに、レイジは言葉を詰まらせる。

「……あんまし答えたくないな」

「そう」

明那はあつさり引き下がつた。

「ならいい——」

話に夢中で、レイジと明那はオーダーしたカフェラテを飲んでいなかった。

二人のカフェラテは酷く冷めていた。

一時間すると、臃が戻つてきた。

臃は一匹の妖精のような仮象体を伴い、飛行している。

メイド服をまとい、背に羽を生やしている。まるで先日戦つたマジック^{ハイフ}巢^ノのようなようだ。

秋葉原は仮象体が多いため、臃が出現していても、一切違和感はない。

臃はテーブルに舞い降りる。

「これは……？」

レイジは臃に尋ねた。

「アクセスポイント用のポート・キャラクター。この子を通して、
電脳横丁には入れるわ」

「これが……」

明那も仮象体をまじまじと見る。

「暗号が組み込まれているけど、大したものじゃないわ。それでも一般人は無理でしょうね」

「じゃあ、さっそく——」

「……ちよつと待つてよ。身体をそのままにはできないでしょ？」
朧がレイジを止めた。

「どっか、ラブホテルみたいなところに移動しましょ」

「せめて漫画喫茶か、カラオケボックスにしてくれないかな。キスを奪われている立場としては——」

「……また、誤解を招くような言い方を」

レイジはウンザリしたように言う。

「いいわ。ちよつとピクアップするから。後はレイジの良心に任せましよう」

朧は含み笑いをする。

「一番危ない」

明那が笑いながら言った。

「……もう、いちいちツッコむのもメンドくさいんだけど」

ウンザリしながら、レイジは答えた。

結局セキュリティーの観点から、レイジと明那は秋葉原に程近いラブホテルに入った。

狭いパーティションで区切られた漫画喫茶のような所では、踏み込まれても即座に対応できない。

しかしホテルのような部屋ならば、さまざまな電子トラップを展開することも可能になってくる。

「こういう形で男の子と入ると思わなかったな……」

そついう明那の顔には、若干緊張に満ちていた。

「……相手が俺で悪かったな」

レイジは不満げに言う。

「そつでもないけど」

「えっ？」

「……噓。ドキドキした？」

明那に弄ばれ、レイジは顔を真っ赤にする。

明那のほうが一枚上手のようだ。

朧は手を叩きながら、「……はいはい、ラブコメはそこまで。後は帰ってからにしてくれる……？」とレイジと明那のやり取りを止める。

三時間の休憩を選び、レイジと明菜は部屋に入ってしまった。

共にベットに腰掛けると、朧は妖精の仮象体にに触れると、コードブレイク作業に入った。

妖精に施された暗号は解読されると、妖精は別の仮象体アイコンと化す。

一枚の扉だった。

ポートキャラクターには特定空間のアクセスの為の情報が組み込まれている。

「……いつでもいいわよ」

朧の言葉に、レイジと明那はうなずく。

「……身体のはうは、わたしが見張っているから。だから一緒には行けない。この部屋に幻覚防衛などの電子トラップ全種を展開して警備は万全にするけど、危なくなったら、すぐに戻すからそのつもりでね」

朧の言葉にレイジも明那も頷く。

「……ウィザードなら、一度行ってみるべき場所かもしれない。まあ、君は半人前だけだね」

むっとしながらもレイジはあえて反論しなかった。

「明那は仮想空間へアクセスできるのか？」と尋ねた。

「……あっ」と声を上げる明那に朧は微笑む。

「あなたのマージは休眠状態だけど、仮想世界へのアクセスポートは付いているみたいだから、わたしがヘルプすれば問題ないわ」

朧の言葉に、明那はほっとした表情を見せる。

「あなたたちのアバターは任意にセットしておくわ。文句言わない

だよ」

アイコンの扉が開いた。

「始めるわ」

臙の声と共に、レイジと明那の視界内の景色が急速に伸縮し、意識が拡張していく。

二人の意識は現実世界から、仮想世界へと旅立った。
データヴァース

11:10:43 <dennno-yokotyo> LOGIN

意識が現実世界のホテルの一室から、ブロックが幾つも積み重なったような壁が左右に立ちはだかつていく。

欧州の古都にあるような石畳の路地と壁にはさまれた圧迫感に満ちた世界だった。

まるで迷宮に迷い込んだような感覚だった。

「ここが電脳横丁……！」

レイジの言葉に明那は頷く。

「ウィザードの情報交換の地、ソーシャル・スペース社交空間——」

レイジのアバターに、明那は吹き出す。

レイジは木の杖を持ち、フード付きのローブを纏った、まるで魔法使いのような格好だった。

「……何その格好？」

明那は笑いながら尋ねた。

「……そっちこそ、スベってるぞ」

「そう？ 結構似合ってると思うけど……」

明那は童話に登場するお姫様そのものだ。

王冠を頭に乗せ、チェーンの首飾りにイヤリングを身につけ、裾の広がったピンク系のドレスを纏っている。髪の毛はごく丁寧に緩く巻かれ、セットされてある。

臙の作為を感じた。

現実世界に戻ったら、文句を言わないといけない。

「ファンタジー世界を模した仮想空間か……」

レイジは自分の姿と周りを見ながら言った。

まさに、剣と魔法の世界だった。

電腦横丁は、ウィザードの魔法使いや秘術を伝え受け継ぐ隠者へのあくなき憧れを象徴しているような世界だった。

サーバー上に築かれた仮想世界に敷かれた路地は曲がりくねり、どこまでも続いている。

路地の両脇には露天市場が並び、露天の店棚には、果物や野菜などの食材がぎっしりと置かれている。

レイジは露天においてあるリンゴを一つ取り上げた。

ただのオブジェクトだと思っていたが、違った。

フルーツと野菜は、違法ソフトを偽装ファイル化したものだった。軍の横流しのものから、マニアが作った同人戦闘ソフト、物を違法複製する偽造レプリケータのOS、フリーウェアのマジ形成ナノテクプログラム、神経系の擬似感覚麻薬などウィザード関係のアプリソフトやアングラツールが売買されている。

もちろん偽造されているのは捜査当局の眼を逃れるためである。

偽装を解く技術が無ければ、使用はできない。

「……あんまりグズグズしてられないぞ。さつさと情報避難地へ行く方法を探し出して、現実世界へ帰ろうぜ」

レイジはリンゴを戻しながら言った。

「うん。……では魔法使い様、参りましょうか」

そういいながら、明那は手を差し出した。

「ったく、ノリが良過ぎるんだよ……」

「……レイジ君こそ、せっかくなんだからもうちょっとノッてよ」

「はいはい、姫」

レイジは明那の手を取ると、ローブとドレスを翻し、道の奥へと進んでいった。

小鬼の郵便配達人

電腦横丁はまさに魔術師達^{ウィザード}の集まる魔法と情報の仮想世界だった。ヨーロッパの城塞都市をモデルにしたようなファンタジーのイメージ構築された仮想世界で、鉄壁のセキュリティシステムに守られたハッキングコミュニティは、富や一攫千金を欲する者、真理や技能を探究する者、世の中の裏側や好奇心に胸をときめかせる者、そして裏社会に身を置くものなど、さまざまな目的のウィザードが訪れていた。

レイジ自身ウィザードでありながら、裏社会に近いアンダーグラウンド的仮想空間へ赴いたのは初めてだった。

電腦横丁を訪れるウィザードはレイジと同じように、魔術師のようなローブ姿の格好がほとんどであった。

まるでウィザードの趣味性を理解できないものは、必然的に排除するかのものであった。

確かに電腦横丁は組合や互助会的要素が強い空間である。閉鎖性の高い秘密サークルか、コミュニティのような、他人にはいえないような危ない趣味を持つもの同士が法の目を逃れて、情報交換を行なう為に、厳しい掟に支配されているとあってよい。

情報一つとっても、表のネットワークでは決して流れない世界の裏側を知りえるような重要な情報が渦巻いている。

裏の危険な仕事の依頼や儲け話を筆頭に、表には絶対に流れないナノテク用最新ハッキングソフトウェア販売レプリケータにインプットすれば、寸分たがわぬものを生み出すことができる有名ブランド商品の偽造防止プロテクトの解除方法を教える情報屋、違法ナノテクにさらに軍用IT兵器の売買を行なう者や地下銀行のようなものまで存在する。

そして例外なく、それらの情報商材は高額で取引されている。事実、情報の一つ一つを集めるたびに、金がかかる。

そのことが情報の信憑性を誇示していた。
情報料の支払いは全て明那が行なっていた。

「その為に予め電子マネーに両替していたから、支払いの線からは追跡されないから安心して」

そついう明那は情報を得る為に、決して安くはない額の金を払っている。

酒場のような場所を手始めに、住人達に地味に聞き込みを行い、情報避難地への情報を集めた。

——郵便配達人ポストマンの元に行け。

皆が口を揃えていった言葉だった。

レイジと明那は一人の口利き屋に辿り着き、案内されるがままに、電脳横丁の奥の一角にある雑貨屋のような所に来ていた。

店内に入ると、中は木造で、蝋燭のような明りで照らされていた。店の奥には小さな生き物が居た。身体とは不釣り合いな大きな頭、目は突き出ている、尖った耳に、口は大きく裂け、牙が生えそろっている。

ファンタジーに登場する小鬼ゴブリンのような姿に似ていた。

小鬼の近くには郵便箱が設置されている。

「あんたが郵便配達人か？」

レイジは尋ねていた。

「……ああ」

小鬼は大きく裂けた口で答えた。

「人間か……？」

レイジの質問に、明那は首を振る。

「いいや、メール用のソフトウェア・エージェントさ」

「メールソフト……？　ずいぶん大げさだな」

「……言葉に気をつけるよ。俺をその辺のエージェントと一緒にするな」

ソフトウェアでありながら小鬼は胸を張るように言う。

「俺は情報避難地<メモリー・シティ>の代理人——メッセンジャー情報避難地の

日本法人の窓口そのものだ。で、何のようだ？」

「情報避難地への行く方法よ。場所とアクセス方法を教えてほしいの」

明那が小鬼に尋ねる。

「……難しいな」

小鬼は大きな目をぐりぐりさせながら言った。

「メモリー・シティ——世界最高峰の情報避難地だ。国家レベルのアクセス介入も許さない聖地……大富豪だっておいそれと簡単には入会できないんだ」

小鬼はいう。

「まあ、あんたらがここに来れた以上はそれなりの知識と技術を持つていることは分かる。

メールなら受け付けるぜ」

「メール……？」

「ああ、俺が受け取って、向こうへの代理人に送る。後は返事を待つだけ。ただし大概の場合、相手にすらされない」

小鬼は入り口近くのテーブルを指差した。

「その道具を使って、メールをつくってくれ。用意ができれば、また呼んでくれ」

そう言うと小鬼は消えた。

テーブルには一枚のメール用紙に羽根のペンが立てられている。

明那はペンを取った。

「情報避難地に行つて何をするつもりなんだ？」

レイジは明那に尋ねる。

「AAAデータ……わたしが持っているオフィリアおよび森川ハルナに関する全てのデータの移送、および保存」

明那は答えた。

「追っ手のウィザードを振り切るには、そこに逃げ込むしかない。これはオフィリアの意味でもあるの」

「論理人格の……か？」

明那は頷くと、メールを書き始める。

「データは諦めて、マージを物理的の取っ払っていうのは……？」

「アイコン尼克社の交渉材料は失いたくないの。犯罪行為が立証できなくなるし、裁判起こされたら、多分負けちゃう」

明那は首を振る。

「それにわたしはオフィリアも救いたい。彼女も勝手に再生されて、被害者みたいなものだから……」

「……そんなこと言ってる場合かよ」

「レイジ君は臆ちゃんを消去できるの……？」

レイジは明那の問いに詰まる。

「……ごめんなさい。身勝手でワケのわかんないこと言ってるのは分かってる。でも、彼女のシンカーとして活動してきたわたしの感情も分かってほしい」

レイジは何も言えなかった。

「ごめんね。わがまま言って」

「……まあ、確かにパートナーは大事だもんな」

観念し引き下がるレイジに、明那はペンを置くと、手紙の自らの手押し付ける。

手紙には、刻印のような物が押されている。

「これは？」

レイジは尋ねた。

「AAAの電子スタンプの複写。情報真偽の証拠になるわ」

小鬼がいつしかまた現れていた。

「準備はできたか……？」

明那は小鬼に手紙を手渡す。

小鬼はメールを受け取ると、便箋にいれ、近くの蠟燭の手に取った。火で炙って溶けた蠟を封筒の蓋の上に垂し、判子のようなものを押した。

シーリングワックス

「——封蝋。他の連中が覗き見できないよう暗号プロテクトを掛けた」

そう言うとお鬼は郵便箱に便箋を入れる。

「送信したぜ。まあ、回答が来るまで二、三日……」

小鬼の前に突然手紙の封筒が出現した。

「……驚いた。もう返答がきたぜ」

小鬼は明那に手紙を渡す。

明菜は手紙を開くと、英語の文章が並んでいた。

明那はメールに翻訳機能コンパイルを掛け、日本語に変換した。

「手紙を受理。ただしデータの受け渡しは本人が同行し、直接受け渡しを希望。アクセスキーを同封——」

最後にイニシャルなのか、『H』と記されている。

封筒の中には、鍵が一本入っていた。精緻な細工が施されたアンティーク調の銀の鍵で、長い鎖がついている。

「ようは、情報避難地に直接来いってことよ」

鍵を握りながら、明那はレイジにそう言った。

歌姫の秘密

アイコニック社の社長室で、田宮とブラックシエルは寿司をつまんでいた。

工場で作られた養殖ものやナノテクで作られた成型食材のものではない。日本全国の有名漁港で水揚げされた天然の高級食材だった。築地の寿司職人が料理したものを、ここに宅配させた。

「……外人の癖に、寿司が好きとは意外だな」

田宮はあきれたように、ブラックシエルに言った。

「日本に来たら、必ず食うことにしている。美味しい寿司を、な」

極上の寿司を食しているにもかかわらず、ブラックシエルの表情にさほど変化はない。

ナノテク関連企業の最大手でありながら、ナノテクで生み出された物に価値を見出さず、あくまで本物にこだわるのは、上層にいる人間ならば誰もが行なう性癖であり贅沢だった。

「なぜ、金を掛けてこんなディーヴァノイドを作った……？」

ブラックシエルは牡丹海老の寿司を醤油を着け、口に運びながら尋ねた。

「ネットの発達により、大衆は手軽に且重要な情報を入手できるようになった。今の時代、^{パッケージ}外見を整えただけでは、物は売れん。消費者が賢くなり簡単に騙されなくなった時代、^{コンテンツ}中身こそ重要だ。だが、コンテンツの充実を図ることは容易ではない。我々広告代理店の情報操作や広告活動だけではどうにもならん。そこで、我々は過去の遺産を有効活用することを思いついた。オフィリアのオリジナルである、森川ハルナというアーティストを、な」

「……聞いた事がないな」

「この国では知らないものはいないほどの有名な歌手だ。歌唱力に天性の音楽センス、そして美貌……、特に独特のビブラートや高音の歌声、豊かな表現力は、幅広い年代を魅了した。まれに歌の妖精

や楽神が人の姿を借りて、この世に光臨することがある……。彼女はまさに歌の女神の化身だった――」

「だった……？」

「……優れた才能の代償と言うべきか、精神的に不安定でね。こればかりはセラピーでもどうにもならん。結果、自ら命を絶った」

「芸術家肌……という奴か」

ブラックスエルは失笑するように鼻で笑う。

「その楽神の化身を莫大な投資を行い、復元したのがオフィリアだ」
「基本的な質問になるが、彼女はマージなのか？ それとも人間が化けたものか？」

「定義は難しいな」

田宮は日本茶を啜る。

「本体はむしろマージだ。共生実装された本人はオフィリアを構成するパーツに過ぎない」

「本人の意思に関係なく……か？」

「アイドルというのはそういうものだ。伝統工芸品のように、優秀な素材を発掘し、技を仕込み、時間を掛けて育成し、さらに戦略的プロモーションを仕掛けていく。多額の投資と、さまざまな人間の^オ手が入り、やっと完成するのだ。特に今の時代、ナノテクによる人体拡張は避けられん」

「奴隷契約と変わらん……俺たちと同じだな」

「……所有物といって欲しいな。所詮、商品だからな」

田宮の言葉に、ブラックスエルは再び笑う。

「アイコニック社は森川ハルナの入院時の脳波データや遺伝子情報はもとより、彼女の楽曲の著作権やマスターテープデータ、動画や映像データ、そして肖像権に至るまで、法的手段に則り、現存するあらゆるさまざまなデータを入手し、論理人格技術を応用し、さらにDNAデータを基に、ゲノムシンセサイザーによりコンピューター上で仮想身体を構築、サンプリングし、電子的な複製に成功した。その結晶がマージ、オフィリアだ」

「究極のディーバノイドの誕生……という訳か」

「……そうだ。まさにこれは楽神の電子的な方法による再誕そのものののだ」

田宮は自分の言葉に酔っているかのようにだった。

「そして、シンカーたる比嘉明那はウィザードというより、いわばシャーマンに近いな」

「……シャーマン？」

「事実、比嘉明那はシンカーとして素質に優れ、オフィリアのとの適合性も高い。脳梁部の神経線維が平均を大きく上回り、変性意識状態——シャーマニズム能力に優れた才能を持つ。タレントとしての才能は、いまひとつ伸び悩んでいるが——」

田宮の話が続く中、ブラックシエルは酢飯で口が甘ったるくなっ
たのか、ガリに箸をつけていた。

「一体化を促すため、彼女の脳梁部の神経線維は逆転写酵素機能ナ
ノマシンによる遺伝子適合化^{ジーン・クオリファイド}を行い、リフォーミングを行っている。
遺伝子レベルの整形手術みたいなものだ。芸能人志望者なら誰でも
行っていることだ」

「……売れない商品は、人権すらないということか」

「もちろん彼女自身には一生かかっても稼げないような契約金を払
っている。文句を言われる筋合いは無いな」

田宮は鼻息を荒げる。

「オフィリアとのユニゾン、彼女達が一体化することにより、あの
ビブラートと低音から高音の伸びを可能にする。まったくのオリジ
ナルではないが、ある程度の揺らぎと不確定要素なくして、リスナ
ーの心を震わせるような感動は生まれない」
ブラックシエルは鼻白んだように笑った。

戦闘の為に感情を普段から抑制している彼にとって、歌や娯楽な
ど何の関心も無かった。

「そして、彼女にはもう一つの役割がある。イモータル・プロジェ
クトの実験体^{テストベッド}——その試験体だ^{サンプル}」

「……イモータル・プロジェクト？」

「身体および人格データを情報化して保存する人体保存部門をより
リ・インカーネーション・テクノロジー

発展させた転生技術——わが社のトップシークレットだ。これ以上は説明できん。いずれにしろ、論理人格が生存戦略による自己保存本能と拡大解釈による抜け穴を見つけ出すとはな……。音楽的才能を高めるため、感性面と情動面を激しく設定した結果か——」

「オリジナルが持つ精神的不安定さと、シンカーとの相互作用が思わぬ事態を招いたな」

「いずれにしろ、捕獲した後で記録を全て洗い、原因追求を行う必要がありそうだな」

ブラックスエルは急に押し黙った。

「……どうした？」

「……俺のほうの網にかかったらしい。当りつけていた所に訪れたようだ。すぐにヘリの準備をしろ」

ブラックスエルは最後にとっておいた大ト口を口に放り込むと、ソファァーから立ち上がった。

仮想現実での戦闘

レイジと明那は郵便配達人の店を出ていた。

「用も済んだし、現実世界へ帰還するぜ」
シフト

「うん。向こう戻ったら、ラーメンでも食べにいか？ 美味しいつけ麺屋があるんだって」

レイジは明那をじつと見る。

「何？」

「……いや、不思議だなあと想着。男並みにバクバク食うくせに、よく太んねーな。ダイエットナノでもいれてんの？」

レイジの言葉に、明那は信じられないというような顔をする。

「……レイジ君、ホント問題発言多いよ。だから彼女できないんだよ……！」

「カンケーねーだろ！！ 臍みたい口聞きやがって……！！ 大体誰のために……」

いつしかレイジと明那は囲まれていた。

仮想現実型RPGに登場する傭兵か旅人風の男達で、フード付きのマントに武具を纏い、腰には剣を提げている。

しかし、男達の顔は一樣に表情がなく、感情を読み取ることはできない。

男達の視線は明那にまっすぐに注がれている。

レイジは男達の正体がすぐに分った。

「な、何……？」

明那はおびえたように言う。

「……多分、追跡型エージェントだ」

レイジは言った。

「アイコン尼克社がわたしを追って……？」

「……ああ。ウェブサイトにも網を張っていたんだろ」

「逃げよう、レイジ君」

明那の提言に、レイジは首を振る。

できなかった。

このまま逃げれば、場所を知られる恐れもある。

この場で処理しなくてはならない。

「大丈夫だ。臍がいなくなつて、あの程度なら——」

男達は剣を抜いた。

レイジは脳内に形成している記憶媒体であるDNAメモリから光学剣の実行を読み込み、光学剣を作り上げる。

光学剣の設定を現実世界から仮想現実へ、さらに切断モードからプログラム消去モードに、変更すると、レイジは光学剣を振るつた。

光の筋がエージェントに走る。切断消去による攻撃だった。

しかし、エージェントはシールドを展開し、光学剣を防ぐ。

「……戦闘型か」

レイジは舌打ちした。

戦闘型エージェント——仮想現実内を徘徊巡回するソフトウェア・エージェントである。

違法プログラムを排除する自律行動型プログラムで、その技術はクレイマトンの制御ソフトウェアにも利用されている。

やはり戦闘能力に優れたタイプのようなのだ。

「光学剣の単独攻撃じゃ、効果なしか……!!」

剣を構えながら、レイジは一旦後退する。

「別のソフトを読み込^{ロード}めるか——」

一体のエージェントの刀身が微かに光を放つと、エージェントはレイジに振り下ろす。

レイジは光学剣で受け止める。

レイジの光学剣が変色を起こし始めていた。

「こいつら……!?!」

エージェントの攻撃には光学剣を破壊するプログラムが組み込まれていた。

アンチプログラムを搭載した戦闘エージェントのようで、機能の立ち上がりは格段に早く、威力も高い。

オペレーターによる操縦型ではなく、常時自律行動している。

戦闘型であるということは学習機能も有していると予想できた。

長期戦になれば、レイジが不利になっていくのは目に見えていた。

レイジは光学剣を近接戦闘から長距離範囲攻撃へ設定を変える。
クロス・クォーター・バトルレンジ

光学剣は有効範囲の設定を変更することにより、飛び道具としても使用できた。

別のプログラムを光学剣にインポートしながら、レイジは距離をとると、光学剣をエージェントに放った。

光の矢と化した光学剣を、エージェントが展開する防御シールドが再び遮る。

しかし、光学剣は砕け散ることなく、そのまま防御シールドに付着すると、変色させていく。

レイジが光学剣に組み込んだのはウイルスだった。感染すると、機能不全を起こし、ソフトウェアの活動を停止させるサイバー兵器である。

某国の産業インフラを破壊し、世間を騒がしたウイルスがオリジナルだが、レイジが使用したものは拡大機能を取り除き、感染力を弱めたカスタムバージョンである。

エージェントは灰色に染まり、石像のように硬直していた。
グレイ

「もういっちょー!!」

再びウイルス混入型光学剣を出現させると、レイジは残りのエージェントへ放った。

ウイルスは、エージェントに感染し、犯していく。

エージェントのみならずシールドごと汚染崩壊させ、動かなくなつた。

レイジは明那の方を向く。

「……さすが、ウィザード」

「……急ぐぞ」

「うん」

頷く明那をレイジは抱き寄せると、仮想空間から消え去った。

戦闘機械

レイジと明那の意識は仮想現実から現実世界へ戻ると、ベッドから飛び起きた。

二人の様子に、朧が驚く。

「……敵が近づいているぞ！」

レイジは朧に言った。

「ウソ……！？ まさかそんなヘマ——」

「……とにかくここを離れるぞ」

レイジと明那、朧は急いで清算をし、ホテルを出ようとした時、入り口前に一人の男が立っていた。

銀色の長髪にサングラス、黒の戦闘スーツに、黒いコートを着た男だった。

銀髪の男は無言でレイジ達を見ている。

「……真っ昼間から女とホテルにしけ込むとは、元気な事だな」

男の言葉に、レイジは睨み返した。

「誰だよ、おっさん……？」

「ブラックシエル——アイコンニック社派遣のPMCウィザードだ……お前が壊した女の上官に当たる」

レイジは身動きできなかった。

ブラックシエルが放つ威圧感や迫力、そして修羅場をくぐってきた独特の体臭に、レイジは本能的に身が竦み、震える。

「——着いて来い。騒ぎを大きくしたくなければな」

レイジはブラックシエルの言葉に抗えなかった。

ブラックシエルが案内したのは、量販店の地下駐車場だった。

地下駐車場は三人とマージの仮象体以外誰も居なかった。

「システムに干渉し、しばらくの間は俺達以外の人間が入れないようにしている」

ブラックシエルはレイジ達に状況を説明した。

「……あんたのホームってわけか？」

レイジの言葉にブラックシエルは眉をかすかに動かした。

「安心しろ。他に小細工はしていない。ここならば誰にも邪魔されることなく、戦える」

「レイジ君……」

明那が不安そうな声を出す。

「……大丈夫だ、あんな奴。ケガするから下がってろ」

レイジは明那に指示を出す。

^{フット}
「実行——」

ブラックシエルの声と共に、手に光学剣が出現した。

ブラックシエルの光学剣はマチェットのような形状だった。

レイジも光学剣を作り出す。

ブラックシエルは光の大刀を、レイジに電光石火の速度で振り降ろしてきた。

レイジとブラックシエルは剣を合わせる。

出力は同等でありながら、ブラックシエルの剣は痺れるほど重かった。

ブラックシエルは光学剣を横に風いだ。

剣の威力に、レイジは弾き飛ばされる。

立ち上がるうとするレイジの眼前に、ブラックシエルがすでに迫っていた。

驚異的な身体能力が作り出すだった。

ブラックシエルの拳がレイジの腹部にめり込む。

レイジは胃が裏返ったような感覚が全身を貫く。

ブラックシエルは軍用格闘術^{マッシュルアーツ}を身につけていた猛者でもあった。

「神経系と筋力をナノテクで強化している戦闘兵士……！ 格闘だと勝ち目無いわよ……！」

臍から注意が飛ぶ。

「分かっている……！」

「動きはいい——」

ブラックシエルは感心したように言った。

「……光学剣の合成スピードも速い。マジとのコンビネーションも申し分ない……中々のセンスだ。マジの性能がいいのか、マスターが優秀なのか——」

ウィザードの力の源であるマジは、DNAおよび脳内ネットとの適合性に左右される。

ナノクラックは、マジとのインターフェイス能力なくして成されない。

車の運転技術に個人差があるように、ウィザードにも優劣が存在する。

優れたウィザード能力を有するには、生まれ持ったウィザードとしての才能が必要不可欠である。

「距離を取って！ 近距離戦闘に持ち込まれないよう、中距離戦闘を保つ——」

臍のアドバイスを、レイジは「うるせえ——」と一蹴する。

激昂するレイジに、ブラックシエルは眉をひそめる。

「……精神状態の最適化はそうでもないな。戦闘下での精神制御が行っていないのか……？ 惜しいな」

事実、ブラックシエル自身の精神はナノマシンによる精神制御処置を行っていた。

どんな状況に陥っても作戦を遂行できるよう、ナノマシンが神経伝達および脳内物質をコントロールし、心理的動揺を引き起こすことなく、冷静に対処することができる。

戦争体験によるPTSDなどの精神障害を未然に予防し、また戦闘下においては、身体中の代謝制御ナノマシンと連動することで、脳内に課せられたリミッターの段階的解放により、驚異的な身体能力を発揮することが可能だった。

まさにブラックシエルは戦闘機械そのものだった。

レイジは光学剣を中距離攻撃に設定し、投げ飛ばす。

イオノクラフトで高速に飛ぶ光学剣が、ブラックシエルの防御フィルターに阻まれ、消却される。

ブラックシエルが展開したのは光学防御だつた。オプティカル・シールド

光学剣を防御壁に転用した対光学兵器用ウィザードスキルで、対人レーザーなどを偏光させ、弾き返す事が出来る機能である。

展開範囲に計算能力を食う為、ハイベック高性能のマジでなければ、実行使用できない高等機能である。

ブラックシエルの共生実装しているマジの能力を如実に現していた。

舌打ちするとすぐに次の光学剣を出現させ、レイジは矢継ぎ早に剣をブラックシエルに投擲した。

光学剣は簡単に消却されていく。デリート

息が乱れるレイジとは対照的に、ブラックシエルの顔には何の感情も浮かんでいない。

「実に興味深いな。ほかにどんな機能やソフトを備えているのか、お前のDNAメモリーを少し漁ってみるか……」

ブラックシエルが光学剣を水平に構えた時、プールの飛び込み台から飛び降りたような落下感がレイジの全身を襲った。

「なんだ、これ……！？」

「気をつけて！！ 脳に侵入を受けている……！！」

注意を促す臃の声がやけに遠くの方から聞こえていた。

三半規管が大きく揺さぶられ、酷い車酔いに似た感覚を味わっていた。

「脳をクラックされるの初めてか……？」

ブラックシエルはレイジに尋ねる。

「クラックだと……！？」

レイジは頭を抑えながら言った。

集中力が途切れ、自らの意思に関係なく記憶が引き釣り出され、フラッシュバックが断続的に起きる。

まるで強制的に脳を掻きまわされ、過去を検索されているようだ

った。

「我がマジ<メルトダウン>の特化能力、『マインドハック』だ」
いつしかブラックシエルの肩に、マジ<メルトダウン>の仮象
体である黒い蛇が出現し、鎌首を上げる。

メルトダウン
黒い蛇は目をダイオードのように光らせると、レイジに向かって
威嚇するように吼えた。

「ナノマシンをクラックできて、人間の脳やマジをクラックでき
ない理由がどこにある……？」

ブラックシエルのマジ<メルトダウン>は、臆のようにコミュニ
ケーション機能に長けていない分、攻撃やネットワーク侵入に能
力を割いている。

BMI機能を通し、相手の脳内神経ネットワークへ侵入、記憶野
に立ち入り、必要とあれば記憶の書き換えや刷り込みによる精神支
配を施すことが可能だった。

「……いろいろ知りたいことがある」

そう言うブラックシエルに抵抗するように、レイジは光学剣を作
り上げる。

「——無駄だ」

レイジの手が弛緩すると、光学剣が消失した。

レイジの目から光が消える。

「レ……イジ」

ラグ
遅延現象を起こしながら、臆の活動も停滞していく。

「お前の記憶野をジャックさせてもらっぞ……」

ブラックシエルの言葉が、レイジの頭の奥の方から重低音で頭蓋
骨を震わせるように響いていた。

学校の教室内だった。

教室内は机と椅子が立ち並び、レイジだけが座っている。

身体は縮み、小学生くらいになっている。

レイジの意識は、幼少期まで退行していた。

レイジの他に、教室内にはブラックシエルがいた。

ブラックシエルのメルトダウンのハッキング攻撃は、BMI機能を介した精神の根幹たるレイジの記憶野へ侵入していた。

ブラックシエルを見ても、レイジは恐怖も怒りも何も感じなかった。

ブラックシエルは、子供のレイジに近づき、肩に触れる。

「より深部へ」

ブラックシエルはそう呟く。

鍵がかかった扉を一つ一つをこじ開けられ、土足で中に入られるような、嫌悪感がレイジに生まれ、全身を激しく振るわせる。

レイジの頭の中で、ある事柄が激しく思い出されていた。

父の自殺——レイジの心的外傷だった。

「ソレガ、才前ノ忌ムベキ記憶力……？」

無機質な言葉遣いだった。

ブラックシエルなのか、メルトダウンなのか、判断できなかった。長い年月を掛けて、他人との関わりを経て、癒し、乗り越えてきたものを全否定され、踏みにじられるような感覚だった。

ブラックシエル「メルトダウンはレイジのさらなる深層記憶に干渉しようとした。

レイジの固く閉ざされた記憶をこじ開けようとしたとき、磁石のように大きく反発しあった。

レイジとブラックシエルの間に見えない分厚い壁が突如出現していた。

「……精神防御か」

「ええ、その子に指一本触れさせないわ」
臃だった。

レイジを護るように、前に立ち、ブラックシエルと向き合う。
自我たるレイジを守るために、臃は超自我になっていた。

「マジカ……？」

「精神治療用の分析ソフトをこんな風に使うなんて……」

朧の言葉は嫌悪感に満ちていた。

「戦場デ使用サレテイルポピュラーナモノダ。兵士ノ記憶ヲ書キ換エルコトデ、心的外傷ノ治療ヲ行ウ為ノ……ナ」

「……ようは洗脳^{ブレインウォッシュ}でしょ……？ 人の過去や記憶を無断で掘り起こしていいワケ無いわ」

「……イヤニ感傷的ナマージダナ。単独行動可能ナオールラウンド・フルスペックタイプ——精神防御ニモ対応シテイル上級マージノヨウダガ……。メーカーハドコダ……？」

「答える必要は無いわ」

朧の言葉に、ブラックシエルは鼻で笑う。

「……ナラバ、オ前ゴトクラックスマルデダ」

蛇が多く口を開き、咆哮する。二股に分かれた舌が蠢いた。

「……そう！」

朧は手をひらめかせ、黒い光学剣を放った。

ブラックシエルの前に防御フィルターが展開し、光学剣を打ち消す。

「ニューロブレイカーが……！？」

「戦闘八常二進化スル。対ニューロ・ブレイカー用防御フィルター。精神戦闘ニ特化シタ、＜メルトダウン＞ニ通用スルカ」

ブラックシエルが手を広げると、触手と化し、レイジと朧に向かっていった。

その時、無数の六角形の結晶パネルが幾何学模様を描き、レイジの目の前に展開していく。

突如展開した謎の防御フィルターは今度はマインドハックを無力化する。

「コンナ強力ナ防壁ヲ短時間デ……」

ブラックシエルは朧を見た。

「……わたしじゃない」

朧とレイジの前に立方体が出現していた。

「ナンダ、ソノソフトハ……！？」

キューブが回転する。父から手渡されたいまだにコードブレイクできないプログラムの結晶体だった。

ウィンドウが展開し、プログラム情報を臙に開示する。

臙は情報を確認する。

→<self defense mechanism/automated reasoning mode>↑

「自動ユーザー保護防衛機能……!？」

レイジの脳内状態を緊急事態と判断し上での、モジュールの自動防衛機能だった。

アップデートモジュールであるキューブの構造体は、別の情報を臙に報告する。

→<Brain Alarm System Entrainment/Red Condition>↑

BASE
「脳内警告系信号路が赤信号……」

ブレイン・アラームシステム・エントレインメント
脳内警告系信号路——脳が出す危険信号である。身体に異常があるとき、脳は警告を発するようになっている。

事実、レイジの脳は危機的な精神状況であった。

→<Files/Wizard Firmware upgrade
demozilla/Advanced mode>↑

ウィザード・フォームウェア・アップグレード・モジュール——
キューブのファイル名だった。

わたし
「マジおよびウィザード用代謝ナノマシンのアップグレード拡張
モジュール機能……? これって……!？」

突如発生した防壁にマインドハックを遮断され、ブラックシエル

に隙が出来たのを、朧は見逃さなかった。

ある戦術用のファイルを作成すると、現実世界へ送信する。

再びブラックシエルがレイジにマインドハックを試みようとした時、ブラックシエルの意識が突如現実に戻っていた。

オラティカル・シールド

条件反射的に光学防壁が展開し、ブラックシエルと明那の間に激しく放電現象を起こす。

明那が光学剣を実行出現させ、ブラックシエルに攻撃を企てていた。

光学防壁に阻まれ、攻撃を免れたが、一方でブラックシエルからのレイジへの精神攻撃は完全に途絶えていた。

レイジは崩れ落ちるようにその場に倒れる。

「何故、お前が……？」

明那を見ながらそう言った後、ブラックシエルは何が起きたのか、すぐに理解した。

「貴様が……？」

ブラックシエルはレイジ近くにいる朧を見ながら言った。

「……そうよ。この娘の身体を借りて……あなたに攻撃したの。彼女のマージ……は休眠状態だけど、アクセスポートを通じて……わたしの操作で十分に使用で……きる」

遅延状態によるノイズを起こしながら、朧は言った。

朧の仮象体であるマージフォルムの形成が完全ではなかった。

本体であるレイジの脳活動が停滞している以上、そのマージたる朧は影響をもろに受ける。

「小ざかしい真似を……」

ブラックシエルは光学防御レベルのゲインを引き上げ、明那が弾き飛ばすと、ブラックシエルはマインドハックを再開した。

朧も光学防御を展開する。

幸い、まだアップグレードモジュールの防御現象はまだ生きていた。

光学防御と六角形の防御結晶パネルが重なり合って、レイジとブ

ラックシエルの中に、立ち塞がる。

マインドハック攻撃に抵抗する一方で、レイジおよび朧は完全に次の手を失っていた。

メルトダウンのマインドハック対策に、朧はレイジの脳内神経の一部を防壁で遮断していた。その為、運動機能などが低下している。今の状態では、戦闘ソフトの読込実行もままならない。

共生実装しているマスターへの反逆と自律暴走を防ぐために安全機構により、マージはマスターの承諾許可なくして活動できない。

また、下手にレイジの意識を強制的に回復すれば、防御現象が消失する恐れがある。

明那に攻撃ファイルを送信し、戦わせる手はもう通用しない。

そもそもマージ<オフィリア>は遠隔制御も攻撃ソフトを実装していない。レスポンスに遅れが生じるため、威力の高い戦闘ソフトの実行は不可能であった。

明那が朧とレイジの元に寄ってくると、「朧ちゃん」と声を掛けていた。

「な……に？」

「わたしのマージを起動して——」

明那の言葉に、朧はハッとなる。

「……でも」

「お願い」

「……分った……わ」

朧はオフィリアにアクセスした。

明那の瞳の電子の光が疾走する軌跡が見えた時、明那周辺のエレメントが急激に加速し、ある形態を作り上げる。

「マージフォルム……！！」

精神が最適化されているはずのブラックシエルが思わず声を上げていた。

トランスフォーム

「変身現象……！？ 休眠状態を解除したか！？」

ブラックシエルの言う通り、明那はエレメントを纏い、文字通り

変身していた。

アシンメトリーの前髪のヘアスタイルに、ステージ用の衣装へ変コスチュームわった。

オフィリアだった。

オフィリア「明那は歌を奏でていた。

心地よい高周波に似たような美しい歌声であつた。

歌声は防御壁越しに伝播し、ブラックシエルの識閥下に響き渡り、バイオリズムに影響を及ぼしていく。

「インタラクティブボイスか!？」

ブラックシエルは思わず片膝を付く。

「俺のマージ——マインドクラックに干渉しているのか……!？」
インタラクティブボイスはブラックシエルの精神制御に干渉し、
マージもろ共激しく擾乱していく。

さらにオフィリアが発するインタラクティブ・ボイスは、エレメントと同調連動し、別の現象を引き起こす。

エレメント・ハーモニーだった。

エレメント同士が起こす調和の旋律は、マインドクラックをジャミングするための効果を発し、オフィリアの仮象体をいくつも出現させていく。

オフィリアは歌を編集イコライズすることでさまざまな効果を發揮する機能をもつマージだった。

ブラックシエルは光学剣を作成すると、オフィリアへ刃を振るつた。

オフィリアの姿であるマージフォルムが光学剣を跳ね除ける。

ブラックシエルは舌打ちする。

マージフォルムは擬態のみならず、単独で強力な電子的防壁そのものである。

特にオフィリアのフォルムは、著作権や肖像権を守るためのより、光学防御に匹敵するほどの強固な防壁プロテクトが施されている。

ノーマルの光学剣で切り裂くことは容易ではなかった。

ブラックシエルは光学剣に別のプログラムを組み込み始めた。
オフィリアのプロテクトを破壊するウィルスをコンボさせると、
ブラックシエルの光学剣のパターンが変化し、大理石かモザイクの
ような模様を成す。

ブラックシエルはオフィリアの仮象体を切り裂いていく。

消失した分、次々と新しいオフィリアの仮象体が出現していく。

オフィリアの歌は依然続いていた。

「逃げましょう」

オフエリア「明那は臃に言った。

臃は頷く。

近くの車のドアが突然開いた。

臃が車の防犯システムを違法ハッキングして、管理を掌握強奪し
ていた。

犯罪行為そのものだった。

「乗って!!」

臃はオフエリア「明那に指示を出した。

オフィリアは頷いた。

「……どこに逃げてても無駄だ。休眠状態を解除した以上、お前は口
ツクオンされた——。マジの追跡システムがお前の居場所を伝え
るぞ」

仮象体に手こずるブラックシエルに対し、オフィリア「明那はイ
ンタラクティブボイスの出力を上げた。

歌は指向性を帯び、ブラックシエルに襲い掛かる。

ブラックシエルの聴覚を通じ、バイオリズムに干渉し、著しく乱
していく。

さすがのブラックシエルも耐えられないのか、頭を手で押さえて
いた。

歌いながら、オフィリアは車に入った。

臃もレイジを立ち上がらせる。酔っ払いのような覚束ない足取り
で歩くと、レイジは車になだれ込むように乗り込む。

抵抗の態度なのか、オフィリア「明那はブラックシエルに舌を突き出す。

車を動かすと、朧も舌を出し、その場を走り去った。

逃亡と裏切り

レイジが目を開くと、真っ先に見えたのは明那の顔だった。

「気が付いた……？」

疾走する車の中だった。

車は表向きはオートナビモードで走っている。

駐車場にある車を違法ハッキングして強奪し、その場を離れていた。

緊急措置による行為とはいえ本来許されるものではない。

「大丈夫？ レイジ君——」

レイジは明那の膝枕で、後部座席に寝ていた。

「……ああ」

レイジは身を起こす。

身体はだるく、精神的にも無力感が渦巻いていた。

「今、走りながら車と明那ちゃんのマージの逆探知プログラム両方を妨害する罠プログラムを走らせているけど、時間の問題ね。どこかで乗り捨てるから」

朧は状況をレイジに説明した。

「ごめんね。わたしのために……」

明那はレイジに謝罪した。

「……くっそお！！ 負けた！！」

レイジは悔しそうに大声を出すと、シートで仰け反った。

「しょうがないでしょ。騒いだってどうにもならないんだから。軍人相手に健闘した方よ」

朧もどこか苛立っている。

感情面においてオーナーであるレイジのフィードバックを受ける。明那は突然痛みに耐えるように顔を歪ませ、シートにもたれると、そのまま意識を失った。

「明那！」

レイジは明那の頬を軽くたたくが、反応を示さない。

明那は眼を見開く。

「……警告します。マージの成長侵食が再開しました」
いつもの明那とは違う口調だった。

「侵食……？ どういうことだ？」

レイジは思わず訊いていた。

「わたしはマージ<オフィリア>の論理人格^{ロジック・パーソナリティ}。シンカー比嘉明那ではありません」

「成長侵食って……状況をもっと詳しく説明して」

朧は尋ねる。

「マージに組み込まれた機能により、シンカー比嘉明那は、神経ネットワーク構造の再構築を行っています。このままでは比嘉明那はまったく別の人格に完全に変貌してしまいます。マージごとわたしを自閉休眠状態にすることで、侵食を食い止めていましたが……」

「変貌って……？ 明那はどうなる？」

レイジもオフィリアに質問した。

「神瀬明那の人格が破壊され、わたしが完全に主人格となります」

「……マージは共生関係が基本。オーナーを占領支配するなんて設計思想が狂つてるとしか言いようが無いわ」

朧は言った。朧もかなりショックを受けている。

「何でそんなことを……？」

レイジは質問を続ける。

「デীবノイド開発の関連事項であるイモータル・プロジェクトの為です」

「イモータル・プロジェクト……？」

「——アイコンニク社およびナノテックス社の機密事項です。これ以上は説明できません」

そういい残すと、明那は再び意識を喪失した。

「俺のせいだ」

朧がレイジの頬を張る。

「……しつかりなさい！ もう四の五の言ってる場合じゃないわよ」
「……ああ」

「——教授から瞑想寺院へのアクセスの許可が降りたわ。車を乗り捨てて、彼女達と一緒に行きましょう」

「わかった」

レイジの言葉に臆はうなずいた。

「インタラクティブボイスとエレメントハーモニーをこの身で味わうとはな……」

頭を揺さぶりながらブラックシエルは言った。

レイジと明那を取り逃がしたブラックシエルはアイコンニック社本社に戻っていた。

「お前まで取り逃がすとは……なんてザマだ」

田宮の言葉に、ブラックシエルは苦笑する。

「マージの追跡機能をアクティブ状態でロックした。場所はどこにいても分かる」

ブラックシエルの言葉はあくまでも冷静だった。手ばかりは一切無い。

「……まさかワザと引き下がったのか？」

「シンカーと一緒に居たウィザードのガキ——奴のバックボーンを知りたかったので、な。一網打尽にしたほうが、後々禍根を残さずにもすむだろう。で……？」

田宮はブラックシエルに封筒を放り投げた。

「調査部からの報告書だ」

ブラックシエルは報告書に目を通していく。

ある事実には、ブラックシエルは顔を上げた。

「あのウィザード……薬師レイジの父親は、元々ナノテクベンチャー企業の起業家兼開発者だったのか……？」

「そうだ。新型の胎内型大容量高速情報処理ナノテクチップを開発し、販売を行うも、生命倫理法に違反しているという疑いがあり、

暴走の危険性を指摘され、販売中止になった」

「……なるほど、マージの入手先はここか」

ブラックシエルは納得したように言った。

「柔軟性の高い新型チップは異種知性の誕生を促すものとされ、フランケンシュタイン症候群を助長する思想とか、グレイ・グーの危険性が極めて高いと競合相手から風評被害を起こされた。株価は暴落、ナノテックス社にM&A《敵対的買収》を仕掛けられ、吸収合併。パテントや権利関係も同社に委譲した。追い込まれた社長は自殺……まさか息子にこんな形で仕返しをされるとな」

田宮は憤慨したように言った。

「PR会社のネガティブキャンペーン——会社買収を仕掛けるとき、貴様たちがよくやる手だろう……？」

「言いがかりだな。恨まれる筋合いはない」

アイコニック社の存在理由の一つである情報操作工作である。

風評被害に、アイコニック社が動いたのは明らかだった。

「奴の母親は現在海外に出張中だ。母親の身柄をおさえるか？」

「必要ない」

ブラックシエルは即答した。

「くだらん真似をして、水を差すな」

「……つまらないプライドは、身を滅ぼすぞ」

「手を出すな、黙って見ている……と言っている」

「誰に向かって口を聞いている……！？」

田宮は席から立ち上がり、ブラックシエルの方に近づいていくと、

突然、口から泡を吹くと、絨毯に倒れた。

もがき苦しむ田宮を、ブラックシエルは田宮を見下ろしていた。

蔑む様な冷たい目だった。

「舐めるなよ、社畜風情が……。親会社の奴隷に等しいお前と一緒にするな。ウィザードがお前たちにただ従うだけだと思っていたか……？」

ブラックシエルの言葉に反応するように田宮は激しく咳き込む。

体内にはもちろん自己管理の一環として、生命維持および代謝制御ナノマシンが駆け巡っている。

社内出世競争に生き残ってきた、勝ち組エリートサラリーマンとしては当然の処置である。変死対策として、おかしなナノマシンを投与されても問題ないはずだった。

「な、何……？」

「マインドハックを仕掛けるまでもない。俺の質問に答えろ」

「何を……」

「オフィリアの秘密だ。イモータル・プロジェクト……だったな？」

田宮は涙を流しながら首を振る。

「心筋梗塞で死ぬか……？ それとも脳卒中がいいか……？ ナノテクテロで使用された逆転写酵素ナノマシンはどうだ……？ エボラ出血熱の如く、全身の細胞が溶解しながら血を噴出し、ウイルス死するのは中々壮観だぞ」

田宮は顔を青ざめ、全身を震わせている。

「死因を特定させずに殺すのは、得意中の得意だな。暗殺こそがPMCウィザードの真骨頂だからな」

ブラックシエルは薄く笑っていた。それ以上笑うことは許されない、そんな感情の制限が掛かっているような微かな笑いだった。

「——久しく忘れていた感覚を思い出した。このゲーム、最後まで楽しませてもらうぞ」

ブラックシエルは資料を手にしながら言った。

アップグレード・モジュール

18:30:24 <MEDITATION・TEMPLE>
LOGIN

「……大丈夫か？」

レイジは明那に尋ねていた。

「ちよつと楽になった……」

明那は笑顔を見せる。

あまりにも痛々しい笑顔だった。

レイジは何もできない、自分の力の無さを再確認した。

「……脳内ナノマシンを弄っただけだ。直ったわけじゃないからな」
「うん」

返事をする明那の声はどこか弱い。

教授が指定したのは、新宿パークハイアットのスイートルームだった。

グレイン教授がりザーブした部屋に入ると、明那と共にレイジはすぐ様瞑想寺院へアクセスした。

明那は横たわり、脳内の診断を受けている。

マジックオフィリアの論理人格は情報処理速度を遅延させることで、活動を停滞させている。

グレイン教授と臃は二人の目の前に浮かぶキューブを見ていた。
レイジの父から受け継いだ謎の構造体である。

「……ウィザード・フォームウェアのアップグレード・モジュールか」

グレイン教授は呟く。

「こいつが突然起動し、わたし達を守ったの。しかも超強力な防壁を展開して……。今まで情報すら開示しなかったくせに——」

臃が教授に説明した。

「おそらくレイジの脳内状態がキーファイルそのものなのだろう」

「……どおりで。いくらやっても暗号解除ができないわけだ」

朧自身何度かキューブの暗号解読にはトライしていた。

「で、こいつが解放されると、パワーアップするの？」

「アップグレードというくらいだ、君の演算能力とレイジのウィザードとしての能力は向上するだろうな」

「……そう都合よくいくのかしら」

「マスターの成長とウィザードとしての能力の覚醒に対して、マジの性能が追いつかないという事態が生じるのは当然予測されることだ。君の設計者であり、レイジのお父上である薬師キョウジは、その対策として、このキューブをオプションとして設けたのだろう」

「……オヤジが」

レイジは父親の話に大きく反応した。

「マジのデータ貯蔵庫^{バンク}の根幹を担うDNAメモリは、DNAの情報保存能力を記憶媒体に利用したものだ。君のお父上はDNAに潜むジャンクDNAの応用を目指していた。ジャンクDNAは通常のDNAとは情報の保存パターンが違い、分子進化に大きく関わる領域でもある。このキューブ自体がジャンクDNA領域を利用したものならば、マジとは仕様の違うセルオートマトン型人工知能の類なのかもしれんな」

「……セルオートマトン？　これが……？」

教授の説明に、朧は尋ねる。

「君の言葉を信じるならば、このプログラムが強固な防壁を展開してきた理由がそれだろうな。DNAメモリでもジャンク領域のDNA遺伝的アルゴリズムを利用したセルオートマトン——マスターおよびマジに将来訪れるだろう危機的状况に対処する為に備えて成長する——脳内宇宙は、コンピュータ内で処理される仮想現実^{データヴァース}以上の資源に満ちた世界だろうからな」

「脳内宇宙で成長するセルオートマトン……か。どんな夢を見ているのかしらね……？」

詩的なことを言う臙を、グレイン教授は見ていた。

「君自身がいい証拠だろう？ 現行の最新型マージとスペック的にまったく見劣りがないからな。……そういう意味では、やはり薬師は天才だな」

そう言つと、教授はレイジの方に視線を移す。

「……惜しい男を亡くしたな」

「——そんなことより、明那ですよ」

レイジは耐えられなくなったのか、二人の会話に入った。

グレイン教授は明那の周りに展開されるいくつもの情報ウィンドウを確認する。

「……侵食率が加速度的に上昇しているな」

「ええ」

「マージの追跡システムはアクティブ状態でロックが掛かり、解除はできない。ここを見つけ出すもの時間の問題か……」

明那のマージは、場所を知らせる追跡プログラムが走っている。妨害用の罠プログラムが動いているが、どこまで誤魔化せるか不透明だった。

「アイコニック社は森川ハルナのDNAデータを持ってるんでしょ？ なんでクローニング技術による複製を行わなかったのかしら……？ 生命倫理法には触れるけど、マージとの適合性だって格段に高くなるわけだし……」

臙もウィンドウを見ながら言つた。

「……考えられるのは、時間的コストの問題だろうな。プロダクト・クローンは時間が最大のネックだ。それ以上に、能力や才能までは受け継がれる事はない」

「いわゆる模倣子^{ミーム}の問題……？」

臙の問いに、教授は頷く。

「生活環境、文化、嗜好そして境遇が動機や才能を形作る。よりオフィリアのオリジナルに近い境遇の娘をリフォームすることにより、音楽的才能を手に入れたかったのだらう」

「より商売になるってことね」

「……トランスヒューマニズムをこんな風に扱うとは、嘆かわしいことだ。利益追求において倫理観は簡単に踏みにじられる。……だが、それだけではないな」

「……イモータル計画だっけ？　それが関係しているの？」

朧は明那に尋ねた。

「……わたしもよく聞かされてないの。ゴメンなさい」
明那は謝った。

「ねえ、瞑想寺院に保存されている強力なITウイルス兵器あったでしょう？　あのファイルを注入してマージごと破壊するのは？」

朧が教授に提案する。

「ここまで融合が進むと、神経も一緒に破壊しかねない。危険すぎるな」

グレイン教授は思案するように、明那の周りを歩いている。

「彼女が言うとおり、データを抜き出すことができれば、アイコンニック社の犯罪行為の立証も可能になるだろうし、交渉材料にもなるデータのロードは行うべきだな。……実地レッスんだ。マージへのウェットウェア部およびソフトウェア部への同時ハッキングを敢行する」

「マージを両面から攻めるの……！？」

「その通りだ。データの抜き出しとマージの分離を同時進行で行う」

「外科的アプローチでは無理なのですか？　マージを取り出した後で、データをサルベージするとか？」

レイジが教授に尋ねた。

「マージのプロテクトシステムは極めて強固だ。血液脳関門の関係もある。防衛システムを破壊、いや別のものに再構築する形で管理セクタに侵入する方法が最適だろうな」

「管理セクタを掌握してから、マージをパージしつつ、データも抜き出す……か」

朧は興奮を抑えられないように言った。

「怖いかね」

教授は明那に尋ねた。

「いいえ——大丈夫です」

明那は笑顔で答える。

教授はレイジと朧のほうに向き直った。

「……では、さっそくはじめよう。レイジ、接続シークエンスを開始したまえ。君のマージ殿と瞑想寺院の情報処理マトリックス機能と連結し、処理能力を可能な限り拡張しろ」

朧が口笛を鳴らしながら、「了解」と答えた。

「気をしっかり持っていないければ、君もデータの海に埋没する。十分に注意したまえ」

教授はレイジに注意を促した。

「心得てます」

「……教授こそ気をつけてよね」

朧は教授に言う。

「誰にものを言っている……?」

朧の言葉に教授はにやりと笑っていた。

マージ攻略

レイジは神経活動が構築する迷宮に迷い込んだかのような錯覚にとらわれていた。

マージへのハッキング経験は、レイジも初めてだった。

プログラムで視覚で認識できるよう翻訳し、分かりやすく認識させている。

体外離脱体験型の精神アップロードを行い、さらに瞑想寺院と連結して能力を拡張させた上で、侵入行為を行っていた。

レイジと臃が見ているのは、マージを中心とした明那の胎内で形成されているナノマシンネットワークだった。

リアルタイムで心拍数や血圧はもちろんのこと肝臓や血中糖分、酸素量、さらにシナプス伝達物質や脳内分泌液に至るまで体調管理や監視を行い、代謝系ナノの情報絶えず交換している。

特にマージ部およびニューラルネットワークが巨大で、現在も成長を続けている。

レイジと臃はマージのアクセスポートを経由して、マージ中枢部へ進んだ。

中枢部には生体認証を行なう為のインターフェイス用ゲートウェイが形成されていた。

ゲートウェイにはオフィリアが浮遊していた。

マージの論理人格である。

「ここから先がマージを基幹とする最重要機密サーバー^{セクタ}区です」

「――予想通り、氷壁^{アイス・ウォール}ね」

臃の言葉に、レイジは頷く。

氷壁――ウィザード^{スラング}隠語で、侵入迎撃型電子防壁（Intrusion Countermeasure Electronic Wall）の事を指す。

臃の言葉通り、ゲートウェイには防壁のみならず、不正アクセス

撃退用の防衛システムが展開していた。

仮想体験型幻覚を齎す電子トラップや神経攻撃により死に至らしめる電子的兵器、インターフェイス用ナノマシンを破壊する戦術プログラムなど最新鋭の攻撃システムが実戦配備された難攻不落の要塞そのものだった。

無数の防衛プログラムは防壁と共に一つのモザイク画のような巨大な一つの複合防壁と化している。

「手強そ……。今のわたしでも、攻略できるかしら……？」

朧は苦笑いする。

「——オフィリアのマジは情報処理を行う情報処理ブロックと、侵食改変作業を行う成長管理ブロック、そして違法アクセスを防ぐセキュリティ・ブロックの三重構造になっています。おかしい真似を行えば、セキュリティ・ブロックが直ちに起動し、追尾撃退します」

オフィリアはレイジと朧に説明する。レクチャー

「……これ以上の出助けはできません。あとはよろしくお願いいたします」

「任しといて」

朧がそう言うと、オフィリアは一礼して、姿を消した。

防衛システムが情報ウィンドウとして出現し、幾重にも展開している。

文字通り、いくつもの生体認証をクリアした上で、その区画に入り、サーバーにアクセスしなければならぬ。

一つ一つの生体認証が解読が不可能なほど強固かつ複雑で、さらに厳重な警備システムが設置され、本来であれば接続すらかなわないマジのサーバーに侵入を試みようとしている。

防衛ブロックの無数の目を、レイジは意識せずに入られなかった。……穴と成りそうなのは、コード照合用の仮想インターフェイスのみか。インターフェイスはセキュリティ・ブロックに直結。アクセスコードはキーファイル方式。構造は単純、ゆえに強固……さす

がA A A……。セキュリティ・ブロックを掌握して、情報処理ブロックに入るしかないわね」

朧の分析に、「だな」とレイジは同意する。

接触するだけで拒絶されていた朧は、瞑想寺院との連結により、情報処理能力を高めたオーバースペック状態である。

当然、朧のマスターであるレイジも同様だった。

「さあ、では悪い魔法使いに掛けられたお姫様の呪いを解くわよ。見習い魔法使い君」

朧はレイジに言った。

「無駄口叩いてないで、さっさと始めろ」

「はいはい」

朧はインターフェイスに手で触れた。

ウィザード——別名ナノ・ハッカーと呼ばれる所以である。

世界全土が仮想現実と電子ネットワークに覆われ、ナノテク技術が普遍化した時代、エレメントに管理されたサイバーネーション・シティで、ハッキング技術を持って己の願望を満たそうとするナノテクの申し子達であった。

本来、ウィザードはマジを駆使し、ナノマシンをハッキングし、自らの支配下に置く。

無論、コンピュータネットワーク網を自在に渡り歩く事など造作もない。

脳内ネットおよびマジも、電子ネットワークもウィザードから見れば大差はなかった。

インターフェイス
窓口はきわめて狭く、警備は厳重である。監視は常時行われ、さらに無数に存在し、おかしい真似をすれば直ちに追跡システムが起動し、狼藉ものを撃退する。

「……ものは試した。予測される解除コードを入力」
レイジが命令する。

「了解」

朧が予想解除コードを入力すると、危険表示を表す黄色と黒の縞

模様に囲まれた警告マークが激しく瞬く。

「セキュリティ・ブロックがわたしたちを感知したわ。防壁展開を開始」

朧の言う通り、防衛システムが迎撃体制に入った。

「……コードブレイクは無理と判断……プログラムのアプローチが最適と判断……活動中のナノマシンをハッキング、強制結線により、防衛ブロックへ接続……接続成功後、擬似神経ネットワークを形成、全感覚を投入」

レイジは意識が拡張したような感覚を味わった。

明那——オフィリア——レイジ——そして臃、全てがつながり、ネットワークとして一体化した。

「手始めにセキュリティ・ブロックを掌握するぞ」

「了解。侵食ウィルス型偽装分割ファイル^{バックドア}を注入開始。防壁構造の組み換え作業に移行、インターフェイスに裏口を強制設置します」

朧の言葉にいつものような軽妙さが消えていた。

情動活動すら計算処理に回し、ハッキング作業に全てを注いでいる。

「失敗」エラー

臃のガイダンスに、レイジは舌打ちする。

「再試行……失敗……再試行……失敗……再試行……失敗……再試行、……失敗……再試行……失敗……再試行……失敗……再試行」

強制介入用のオーダーを、何度も打ち込む。

繋がつては、すぐに断たれる。

終わりの見えない作業が永遠と繰り返される。

「作業開始」

朧は短く告げた。

到達不可能とされていた行為が、ようやく実を結んだ。

介入が成功すると、臃は直ぐ様、複合防壁のプログラムの書き換え作業を行う。

防壁が作り変えられ、モザイク画が別のパターンを描く。
中を守る外壁に、勝手に裏口を作るようなものだった。

形成している情報ウィンドウは、ウィザードスキルの＜魔法の鍵＞であった。

「防壁構造改変率三〇パーセント突破」

朧の声と共に、防壁プログラムは塗り替えられていく。

「プログラム侵食率二五パーセントまで低下……侵食停止。侵食作業再試行」

「……くっそ」

遅々として進まない作業に、レイジは苛立つ。

神経に圧迫感が襲い、脳が重くなる。

データの負荷に、意識を見失い、埋没しそうになる。

「……失敗、再試行」

舌打ちするレイジをよそに、朧は再び失敗と再試行を繰り返す。

「侵食率二〇パーセントまでクリア、別ルートから同時作業展開。侵食率低下に伴い、即座に対応」

レイジはセキュリティ・システムの次の活動を感知した。

拡張した脳そのものが、危険なプログラム群が活動する息遣いのようなものを検知していた。

自らに危険が迫っていることを、レイジは直感した。

「……追撃プログラムだ！ 神経レベルで対応……！」
レイジの指示が飛ぶ。

「了解。DNAメモリー内に迂回ルートを形成、破壊プログラムを投入——」

レイジは脳内の血流や神経伝達が逆流するような感覚を味わった。

「……追撃プログラムは神経攻撃型と幻覚型電子トラップの二種類と判明。神経攻撃を優先的に削除します。破壊プログラムおよび、
ファイヤーウォール神経単位で防火壁を展開」

神経攻撃型はニューロブレイカーと同様の殺人プログラムである。
文字通り脳や神経系に作用して、脳溢血や心停止、呼吸不全を引き

起こす。

対応を謝れば死に至る。レイジは緊張した。

神経単位でシューティングゲームを行なうような気分だった。

破壊プログラムが神経攻撃型を検出しては、次々と駆除していく。

「全ての神経攻撃型の駆逐作業を終了。電子トラップ型の対応に移行します——」

ガイダンス通り、破壊プログラムは神経攻撃型を一掃すると、攻撃目標を電子トラップ型へ移す。

しかし、電子トラップ型は破壊プログラムを交わしていった。

レイジは神経攻撃型が罠であり、電子トラップ型が本命であるということを悟った。

「防壁を突破されました……ファイルの強制介入を確認……対応間に合いません」

電子トラップ型が引き起こす事態に、レイジは否応無く呑み込まれていった。

「……ファイルが実行されました」

ホワイトアウト
臃の報告を最後に、レイジの意識は消失した。

仮想現実型幻覚の罭

鼓膜を突き破るような轟音に、レイジは目が覚めた。

レイジはコンサート会場にいた。

何万人も収容できるような巨大な施設だった。

客席は全て埋まり、会場中央にはステージがあった。

スポットライトが目まぐるしく切り替わるステージには、後光のような淡い光を放つ一人の歌手がいた。

オフィリアだった。

神経攻撃による仮想現実型幻覚——オフィリアの氷壁が繰り出した電子トラップの正体だった。

仮想現実が作り出す疑似体験と幻覚世界の迷路に、レイジは迷い込んでいた。

レイジ自身ようやく自分の状況を理解した。

観衆はオフィリアのパフォーマンスに熱狂する。

圧倒的な疾走感のあるオフィリアの曲にサイリウムを振り、声を張り上げ、歓声を上げる。

仮想現実には明那の記憶を元に生み出されているようだった。

最初はレイジもどこか冷めた気持ちで見えていたが、徐々にオフィリアのパフォーマンスに魅入られていった。

仮想現実型幻覚の恐ろしさは、時間の経過とともに判断力が低下し、現実なのか仮想現実なのか区別がつかなくなる点にある。

仮想現実妄想——この世界は仮想現実で、現実など存在しないという精神障害である。

現実と仮想現実の曖昧さと拡張現実技術が齎した現代病である。もちろんこうしている間も、臍は氷壁攻略と同時に、電子トラップにより強制介入されたファイルを削除する為の検出作業を行なっているはずだった。

レイジ自身行動を起こさないと、仮想現実から生還できなくなる。

だが、疑似体験の迷路は簡単に抜け出せるほど甘くない。

脳内分泌液や神経間の電位変化を測定し、相手の願望や欲望をフールドバックし、自分にとって都合のいい世界を映し出す。

何よりオフィリアのステージがレイジを捕らえて離さない。

ダンスと歌が一体となった見事な内容だった。

アジア系の美しさを秘めたルックスは人工的といえばそれまでだが、セクシーなステージ衣装を身につけ、バックダンサーと共に生み出される激しいダンスパフォーマンスに加え、オフィリア、正確には明那の歌唱力とインタラクティブボイスの相乗効果により会場全体が沸く。

バイオリズムおよび識閾下へに干渉するインタラクティブボイスは、一種の集団催眠のような状態へ観客を導いていく。

観客のボルテージが高まっていくと、会場のエレメントが励起状態になり、電子の光を放つ。

光がさまざまな音符の形に変化し、乱舞する会場で、エレメントが収束し、オフィリアの仮象体と化すと、会場の至るところに出現していく。

エレメントハーモニーだった。

エレメントとの同期によるインタラクティブボイスの効果を最大発現させる機能により、全員スタンディング状態になり、会場の熱気は最高潮に達しようとしていた。

プロモーションビデオのような世界が会場に広がり、観客全員が宗教的現象にも似た共有体験へ誘う。

エレメントハーモニーの真髄を知らずも見せ付けられていた。

レイジもすっかりオフィリアの歌を聞き入っていた。

日本人のみならず、さまざまな肌や顔の特徴を備えた観客達が訪れている。

人工的存在であるディーヴァノイド<オフィリア>は、人種や文化の壁を軽々と飛び越えて虜にする、まさに模倣子^{ミーム}の化身だった。

開発・販売元であり、レイジの宿敵たるアイコニック社がアジア

的美を徹底的に研究し生み出された外見と、森川ハルナと明那という二つの内容が作り出す中身は、確かに時代を象徴するに足るアイコンだった。

そのことに戦慄しつつも、オフィリアのパフォーマンスに抗えない自分があることをレイジは意識していた。

いつしか、オフィリアがレイジの近くに出現し、頭上に浮かんでいた。

幽霊のような淡い光を全身から放ちながら唄うオフィリアの視線は、はつきりとレイジに向けられていた。

レイジを飲み込むような妖しい魅力に満ちた瞳だった。

オフィリアはレイジに微笑みかけ、手を伸ばした。

頬に触れるオフィリアに、レイジも心を奪われそうになっていた。

——レイジ。

誰かの声が頭の隅から聞こえ、レイジは我に返ると、オフィリアの手を払いのける。

朧なのか、それとも明那なのか分らなかった。

誰かの似ていた声だった。

オフィリアの誘惑を受け入れていれば、レイジの意識は埋没し、永遠に仮想世界を彷徨うハメになっただろう。

レイジはオフィリアから逃れるように席から立ち上がると、コンサート会場から出ようとした。

昏い通路に出ると、レイジの前に女が一人立っていた。

オフィリアだった。

「——どこへ行くの、レイジ……？」

オフィリアはレイジに尋ねてきた。

レイジの後ろで観客が熱狂することが聞こえてくる。

目の前のオフィリアは仮象体のような淡く、虚ろなものではなく、肉の質感を伴った生身の女だった。

「最後まで聴いてくれないの……？」

オフィリアは右手を上げる。

手には銃が握られていた。
リボルバー式のスナブノーズだった。
レイジはたじろぐ。

仮想現実内ではこれほど効果的な武器は無かった。
もし銃弾を喰らえば、現実的に死ぬ危険性がある。

これほど直接的に攻撃を仕掛けてくるとは考えていなかった。
レイジは光学剣を讀込実行していた。

暗い通路の中で、光の剣を揺らめかせながら、オフィリアを威嚇
するように構える。

電磁高周波の振動音が二人の間で響いた。

「切れるの？」

オフィリアはレイジをからかう様に笑う。

「——わたしを」

オフィリアは明那に変わっていた。

動揺がレイジに走ると、明那は引き金を引く。

マズルフラッシュが瞬く中、レイジも反射的に前に出ている。

銃弾は大きく逸れ、レイジは明那を斬っていた。

光学剣の削除機能^{デリート}により、プログラムならば消滅する——はずだ
った。

明那は消えることなく、血が飛び散りながら、後ろに倒れた。

レイジは明那に近づく。

明那の死体がそこにあった。

傷から夥しい血が流れ、血溜まりを広げていく。

頭では分っていた。

取り返しのつかないことをしてしまったのではないか、という疑
いがレイジの中で芽生える。

罪悪感が沸き、激しく混乱していく。

そもそもこれは現実なのか、仮想現実なのか、レイジはよく分ら
なくなっていた。

困惑状態のレイジの首に、誰かが後ろから腕を回してきた。

オフィリアだった。

「……あーあ、殺しちゃった」

オフィリアはレイジの心理的空隙を突き、忍び込んで来る事は頭では理解していた。

オフィリアの息遣いが耳を撫でる。

生温かい甘い息はあまりにもリアルで、生々しかった。

催眠状態にも似た現実から遊離したような感覚が全身を包んでいく。

レイジはもうどうでもよくなっていた。

オフィリアはレイジにキスをした。

オフィリアの唇が触れた瞬間、レイジは明那とのキスを思い出していた。

その時、レイジの全身に電流のようなものが走った。

——非常事態と判断し、強制離脱ジャックアウトを敢行します。

頭に入ってきた報告に、レイジの意識に活力が入り、失い掛けていた現実感を取り戻す。

——失敗エラー。防壁改変作業率は60パーセントを突破……現在も進行中。

オフィリアの手を振り払うと、レイジは再び光学剣を讀込実行させ、オフィリアを切り裂いた。

オフィリアが画素単位で電子的に消失すると、明那の死体も消えていた。

周囲の景色が漂白されるように白色の光と化し、レイジも光の激流に飲まれていった。

彼岸の海

I . C . E W a l l R e w r i t i
n g 6 1 %

E l e c t r o n i c t r a p f i l e s y
s t e m s c a n n i n g 2 4 3 7 8 9 f i l e

W a r i n g ! < B A S E / S t a t u s > i n
t h e S i m u l a t e d r e a l i t y h a l l u c i
n a t i o n

夜明け間近の海岸だった。

レイジは砂場の波打ち際に立っている。

長い長い浜辺だった。

所々岩礁がつきだし、夜明けが近いのか、青緑の海は目も開けられないほど黄金色に輝き、眩しかった。

もしかしたら、沖縄の海かもしれない、とレイジは思った。

明那は沖縄出身である。

先ほどのコンサート会場同様、明那の記憶に基づき、この世界が構築されているのは間違いない。

レイジの近くにもう一人立っていた。

オフィリアだった。

オフィリアは白い布のようなものを全身に纏っている。

死者が埋葬の際に巻かれる屍衣シムツクフウモノのようにも見える。

オフィリアはいつしか歌を口ずさんでいた。

インタラクティブボイスなのかどうかは分らない。

鼻歌にも似た歌は、先ほど聞いた疾走感溢れるものではなく、静かで穏やかな音楽だった。

「……この歌は魂の導者音楽なの」
サイコポップ ミュージック

オフィリアは歌をやめると、レイジを見ながら言った。

「……サイコポップ・ミュージック？」

「死者の魂を死の国に導く為の歌よ——」

「……俺を殺すって言いたいのか？」

レイジの問いに答えず、オフィリアは視線を海に向ける。

「きれいだと思わない……？ ウィザード——」

レイジも目の前に広がる海を見る。

魂を揺さぶられるような景色だった。

空気中に細菌と共に極微作業機械の群れが飛びまわり、環境建築型超高層ビルが林立した窒息するようなナノテク都市環境に住む都会っ子のレイジにしてみれば、明那の記憶により生み出された世界と知りつつも、美しい海は新鮮で、どこか懐かしかった。

レイジは本物を見てみたい衝動に駆られた。

「……海は言い伝えでは、生命の全ての起源であり、魂が還る場所とされているわ。わたしもあなたもいつか戻る所なのよ」

オフィリアは言った。

「……明那の記憶を基に勝手に複製した偽物だろ？」
フェイク

レイジはわざと冷めた事を言った。

レイジなりのささやかな抵抗だった。

「——そう、この海は情報の海でもある。生命や遺伝子の情報のみならず、脳に混在するデータ……人の記憶や思いといった精神活動に至るまで余さず全てありとあらゆるものが情報化され、大量に溶けあった記録の羊水……まるで、アミノ酸や有機化合物で満たされた原初の生命のスープのようなもの」

「……………」

「イモータル・プロジェクト……人類が思い描いてきた永遠の夢……
イモータル有限生命体たる人間が無限生命体へなる方法……。イモータル・

プロジェクトにより、細胞一片に至るまで全てのデータ化され、その相互作用が解き明かされた時、人類は別の存在へ生まれ変わる。不死とともに、肉体のくびきを解かれ、より高度で、より自由な形態を獲得する——」

オフィリアはレイジに再び視線を向ける。

「……んなもんにはなりたくないな」

レイジの言葉に、オフィリアは冷たい眼で見る。

「ウィザードならば理解できるはずよ……ナノテクにより身体的能力の向上を目指す者達ならば——」

「……答えは同じだ。さつさと俺を元の世界へ返せ」

「そう——」

オフィリアの表情が陰しくなると、全身から波動が放たれた。

インタラクティブボイスだった。

オフィリアは直接的な攻撃をレイジに向けて仕掛けてきた。

バイオリズムの出力レベルによつては、強力な精神支配マインドコントロールを施すこともできる。

レイジが敗北したブラックシエルを、オフィリアはこの機能で打ち負かしている。

マジおよびイモータル・プロジェクトの最終防衛システムは、オフィリア自身だった。

レイジは光学防壁を展開し、インタラクティブボイスを防いだ。

インタラクティブボイスは光学障壁の激しく揺さぶり、食い破ろうとする。

レイジは必死に耐える。

暴風雨が起す強風と豪雨に対し、ビニール傘一本で耐えるようなものであった。

光学障壁が機能障害を起こし、消失すると、レイジは吹き飛ばされた。

とつさに光学剣を実行出現させ、構えながら抵抗の意を見せるレイジに、オフィリアが嘲るように微笑する。

インタラクティブボイスを放とうとした時、オフィリアの動きが止まった。

人形のように身体の動きから、顔の表情筋に至るまで硬直していた。

まるで無数の業務をこなし切れなくなったプログラムのようフリーズした状態だった。

いつしか朧がレイジの隣に佇んでいた。

「……朧！」

レイジは言った。

「——改変作業率は現在70パーセントを突破……電子トラップの偽装潜伏ファイルの検出を完了。削除と同時に追跡プログラムを逆流^{リス}し、仮想世界から離脱します」

朧は無表情で事実だけを無機質に告げる。

オフィリアは再起動したが、すぐに遅延現象とノイズを起こすと、^{ピクセル}画素と格子へ量子分解した。^{グリット}

レイジの周りの仮想世界も急速に崩壊し、記憶の光景が消去した時、レイジ自身も別の世界へ転送^{シフト}する。

転送先は、氷壁の前だった。

「——改変作業率百パーセントを突破。^{バックドア}裏口の設置を開始」

朧の報告と同時に、レイジの脳内の神経への負荷が急激に無くなり、頭が軽くなった。

無数の情報ウィンドウが折り重なるように展開し、氷壁を覆っていく。

細胞全てが別のものに入れ替わるように、氷壁の構造がまったく別のものに作り変えられていく。

氷壁の前に、ひととき大きなウィンドウが出現した。^{ウィザード・ロック}裏口プログラムであるく魔法の錠前>だった。

「——侵入口設置完了。セキュリティブロックを一時凍結。このまま情報処理ブロックの管理セクタへ踏み込みます」

「よっしゃー!!」

臃の報告にレイジは咆え、＜魔法の錠前＞用の暗号鍵を目の前に出現させると、ウィンドウへ身体ごと飛び込んでいた。

宗教的仮想空間

レイジが電子トラップを抜け出した頃、一人のウィザードが瞑想寺院へ違法侵入を試みようとしていた。

追っているマジの追跡プログラムを妨害する無数の罠プログラムに手を焼き、やっとの思いで、接続先を探り当てた。

仮想空間へのアクセスが成功し、足を踏み入れた瞬間、襲い掛かってきたのは仮想トラップファイルだった。

侵入者に対し、マジのB M I機能を通じ、仮想現実を応用した疑似体験型の幻覚作用ファイルを強制インストールするものである。しかし、侵入者が常時展開する防壁や防御フィルターには何の効果もなかった。

ファイルはすぐ様検出解析され、消去すると、ウィザードは瞑想寺院へ踏み込んでいた。

侵入者の周りに石造りの歴史ある荘厳な仮想空間が広がっていた。空間内に一人の老人が現れていた。

「……よくここが分かったな。さすがP M Cウィザードだな」

老人の言葉に侵入者——ブラックシエルは笑う。

「そうでもない。無数の罠プログラムから割り出すのは中々骨のいる作業だった。しかし、まだ瞑想寺院が生き残っていたとは、な」

「……久しぶりだな。ブラックシエル」

老人——グレイン教授が言うと、ブラックシエルは満足そうな尾錠を浮かべる。

「グレイン教授……リチャード・グレインか。シミュレーターか、それともオンラインか……？」

「当ててみたまえ」

グランドマスター

「天才科学者にして大導師、いやクリエイター」に会えるとはな……」

「ヴァーチャルアイドル作りにご執心とは酔狂なことだ……最近の

ナノテックス社は人身売買も行うのかね？」

「自社でモデルージェンシーを抱える企業など珍しくは無いだろう。ましてナノテックス社は、世界有数の複合企業体だ」
コンクロマリット

ブラックシエルの言葉に、教授は冷ややかな目を向ける。

「……ただのナノテクフリークとは思っていなかったが、まさか瞑想寺院に関わりのある由緒正しいウィザードとは、な。あのガキはお前が仕込んだものか……？」

ブラックシエルは尋ねた。

「友人の頼みでね。家族と本人を守れる様な強い男に育てて欲しいと——」

「ナノテックス社に買収された会社社長の息子……か。ようは復讐か……？」

「……そこまで暗い育ち方はしていないはずだ。君とは違う。若者が抱く若さゆえの無謀な行為と、高潔な精神に基づくものだ。試練と通過儀礼は人を無限に成長し、高めていく」

グレイン教授の言葉にブラックシエルは鼻白んだように笑った。

「自由意志を持つマージの研究——だったな。あれはその試作品か何か……？」

「……私の作品ではないが。人間ですら自由意志は幻想に過ぎない……人は平等ではなく民族、宗教、家族、経済状況といった呪縛に囚われ、植えつけられたマインドセットに支配される」

「……幼少時からのマージを共生させ、ともに発展させるなど狂気の沙汰だ。我々と大して代わらん」

「——否定はしない」

教授は手元の情報ウィンドウを見ていた。

停滞していたマージの攻略作業が再開していた。

レイジの生命活動および脳波計の動きも活発化している。

教授は安堵した。

「彼ら若きウィザード風に言えば、人類はテクノロジーの発達により、エレメントという魔力を取り戻した。……いや、獲得したとい

う言い方が正しいな」

教授はブラックシエルに視線を戻す。

「……しかし、現実の魔法使いは違った。トランスヒューマニズム主義と非難され、さらに為政者達は危機感を抱き、犯罪者と断罪した。……当然だな」

「……………」

「弾圧を避けるために、お前達はネットのさらにアンダーグラウンドに潜り、このような空白空間に身を顰めるしかなかった。技術や情報と共に」

「君のように企業に飼われるしか、生き延びる術は無い……か」

教授の皮肉に、ブラックシエルは鼻を鳴らす。

「……下流の人間が上流に上がる為の努力と言って貰おう。上を指して何が悪い？」

教授は冷めた眼を、ブラックシエルに向ける。

「錬金術は、物質を完全な物質に精製すると共に、さらには人間も完全な存在に変性しようという意味を持つこともあった。哲学的思想と精神的向上無くして、大地の秘術はなされない。あつてはならない」

「まさか使うものの思想無くして……などという寝言を言うつもりか？」

「……技術とはそういうものだ。哲学的理想なくては、ただ暴走するだけだ。ナノテックス社がいい例だろう」

「……何故、お前はこうして生きている？」

ブラックシエルはうんざりした様に言った。

「私はナノテクとの対話による人類の変容と行末を見てみたいだけだ」

「……マッドサイエンティスト風情がキレイ事を吐かすな。ましてお前はコピーに過ぎん」

ブラックシエルは低い声で言うと、光学剣を出現させる。

「……君たちの企みは読めている。イモータル・プロジェクト――」

意識の完全アップロード化か」

グレイン教授はブラックシエルに言い放つと、明那から入手したデータの一部をブラックシエルに見せた。

ブラックシエルは笑う。

「人間が神にでも成るつもりかね……？」

「……金持ちの考えることはいつの時代も変わらない。ナノテクが全てを実現するこの時代、無理もないだろう」

「哲学的思想と精神的成熟さを併せ持つものが、技術を使う資格のあるものだ。それ無くして、技術はただ暴走するだけだ」

「老人の戯言だな」

ブラックシエルは一蹴する。

「ナノテクにより人類は身体的疾患を全て克服できた……ように見えた。しかし、エレメント耐性型インフルエンザに代表されるような新種のウイルスが毎年のように発生している」

教授はどこか憂いたように言った。

「人が進化すれば、それに比例するように新たな病が出現する。自然がバランスを保つ為のホメオスタシスそのものだ。恒常性の関係で環境と種は保たれる」

「人は永遠に人を超えることはできないと……？」

「その通りだ」

「……あんたが言うത്詭弁にしか聞こえんな。まあいい——」

ブラックシエルは光学剣を閃かせると、背後に黒い蛇竜が出現していた。

ブラックシエルはマインドクラック機能を発動した。

「……我がマジックメルtdownのマインドクラックは、最新型の電子戦略プログラムが組み込まれたものだ。お前の弟子は膝を屈したぞ」

光学剣にメルtdownの仮象体が絡みつくと、ブラックシエルは剣を振り上げる。

「この空間ごと、消却してくれ——」

意気込むブラックシエルに、グレイン教授は溜息を吐く。

「……今度は私が君に訊こう。ここは現実か、それとも仮想か？」

グレイン教授およびブラックシエルの周囲が光を放っていた。

グレイン教授の求めに応じ、瞑想寺院という仮想空間が真の姿を現していた。

石造りのゴシック建築風の仮想空間は影を潜め、空間面積をどんどん拡張しながら、神殿や大聖堂のような空間へ変化していく。

幾何学模様にも似たさまざまな装飾が施された天蓋に、荘厳な祭壇がいくつも出現し、膨大なデータを収めた宝塔や柱が立ち並ぶ。

ある種の宗教的世界観を体現した仮想空間は、東洋思想的曼荼羅に似ていた。

瞑想寺院は、空間が秘めている情報処理能力を解放しつつあった。

いつしかグレイン教授は空間内に設けられた最も高い祭壇に立ち、ブラックシエルを見下ろす。

「ここは瞑想寺院……膨大な情報を蓄積するアーカイバにしてライブラリー。世界に存在するあらゆる情報を収集する知の保管庫——」

ブラックシエルの周りに無数のウィンドウが展開する。

瞑想寺院の攻撃システムがブラックシエルへのハッキングを開始していた。

ブラックシエルの顔にも動揺が走っている。

瞑想寺院の力の前に、さすがのブラックシエルも肝を冷やしたようだ。

攻撃システムがブラックシエルの電子的身体の手足の末端から量子単位で侵食していく。

「これほどの処理能力を保有しているとは……。さすがは瞑想寺院、腐ってもリチャードグレインのシミュレーターという訳か……」

ブラックシエルは口惜しそうに言った。

「狼藉者はとつと立ち去りたまえ。俗物風情にこの聖域がどうこうできるものか。身の程を知れ」

そう言うグレイン教授の目の前に新たなウィンドウが出現した。

「……弟子がデータの抽出、およびマージの物理的消去の最終段階に入ったようだ」

グレイン教授はブラックシエルに告げた。

「行き先はメモリーシテイ——データハイブンだろう……？ 電腦横丁でのやり取りは確認済みだ。ならば、先回りして奪い取る。貴様の弟子である以上、手加減は無い……」

感情の揺らぎのようなものを見せながら、ブラックシエルもウィンドウを出現させていた。

「……よかるう。イモータル・プロジェクトともども潰させてもらうぞ。データ・ハイブンで互いの雌雄を決しよう——」

グレイン教授の言葉に、ブラックシエルは鼻で笑うと、ウィンドウに手を叩きつけた。

その瞬間、ブラックシエルの姿がその場から完全に消え去っていた。

非常事態を回避する為に電子身体に設けられた緊急転送避難による逃走であった。

「……相変わらず、逃げ足だけ速いな」
グレイン教授はそう呟いていた。

解放区

レイジは氷壁を裏口から潜り抜け、仮想現実世界から、再び電子の世界へ戻っていた。

今いる世界は、数値化^{ソリッド}的なデータに支配された世界であり、仮想世界のように疑似体験用の五感情報が絶えず入出力されているわけではない。

光が飛び交うような、データが常時やり取りされている、さまざまなコードに彩られたプログラムとソフトウェアの世界を、五感で認識しやすいよう生身的な情報に変換^{ウェア}翻訳^{コンパイル}し、さらに乗り物の航法システムや制御系AIへ神経を直結して思考制御する為のアプリをプラグインすることで、五感で感覚的に認識でき、神経レベルで迅速かつ容易にデバイスを制御することができる。

レイジ自身、今は極めて作業ファイルに近い存在と化していた。作業ファイル化したレイジはマージ解体の為の業務を行っていた。

レイジはマージのナノチップの構造内容を完全に把握していた。オフィリアの言う通り、マージは三重構造だった。

成長管理ブロックとセキュリティシステム、そして情報処理ブロックの結合^{ネクス}型マージである。

セキュリティブロックは機能が完全に停止し、現在、マージの各結合部の分離および、データの転送作業が進行し、成長管理ブロックのデータを抜き出している。

全データのダウンロード終了後、アンインストール作業の最終段階である、マージのCPUといえる核^{コア}チップ区画の解体作業に入る予定だった。

ダウンロードは、オフィリアの論理人格データが進められている。――……論理人格のダウンロード終了。DNAメモリ部へ作業を移行します。

臙が作業の進行状況を報告する。

臙とのコミュニケーションは脳内チャットに切り替わっている。脳内チャットは言語通信のみならず、さまざまな情報を添付し、同時に行なえる為、情報量のみならず伝達速度も格段に上がる。

特に今のような作業の場合は、そのほうが都合がよかった。

——……DNAメモリー内のデータが別の区画セクターに流出しているようです。

臙の突然の報告に、レイジは驚く。

——どういうことだ……？

——確認します。

脳内にDNAメモリーのネットワークチャートが映し出された。

——DNAメモリーのデータがオーナーの記憶野にバイパス経路されているようです。データのみならず、論理人格の仮想精神活動もフォードバックしています。

説明を受けても、レイジには意味が分らなかった。

——マージのマスターの記憶野へ接続し、直接確認してみますか？

——ああ。

明那の記憶を覗き見るように気が引けたが、レイジは承認した後で問題が起きないよう、見定める必要があった。

明那の記憶野へアクセスすると、膨大な情報量がレイジの脳内に流れ込んできた。

翻訳された明那の脳内区画は、まるで澄み切った美しい膨大な記憶野の資源の海、いや宇宙空間そのものだった。

明那の記憶の一つ一つが精神活動とともにさまざまな成分として混ざり合い、溶け合い、記憶区画を満たしている。

先ほどまで居た電子世界とはまったく異なる世界だった。

どちらかといえば、視覚的な世界である論理空間とは一変し、むしろ流れや圧力のような触覚的な感覚が全身を包む。

広大なる深海をダイビングするような感じだった。

記憶野の情報は確認することも認識することも困難である一方、

レイジの動きに敏感に反応を示す。

温かく心地よい感触に、レイジも触発され、内に潜む過去の遠い記憶がかすかに蘇ってくる。

そんな記憶宇宙に、固形状のデータが幾つも浮遊していた。不法投棄された粗大ゴミや残骸が漂っているようだった。

明らかに異質なデータに対し、記憶の海は拒絶反応を起こし、互いにせめぎあっている。

記憶の海を泳ぎながら、投棄されている情報をレイジは確認する。

——開発中のソフトウェアエージェントと付属関連データ、……DNA解析データに、著作権保持プロテクト規格の動画……なんだこりゃ？

明那そのものの記憶がウェットでソフトな感触に満ちたものならば、オフィリアの活動記録はハード、あるいはソリッド的な感覚であった。

——記憶野へのバイパス……オフィリアの仮想精神活動の記録が、記憶野へ流れて、明那ちゃんの記憶と混在しているみたい。こんなのが流れ込んだら、そりゃ頭が痛くなるわ。

臃の情動活動が回復していた。人間味が増し、いつもの口調に戻っている。

状況分析に、情動活動は必要不可欠だった。

——何のために……？

レイジは臃に尋ねた。

——……一体化を促すためかしら。共生型ではなく、侵食制圧型だから。でも何の意味が——。

臃も情報不足のため、よく分らないようだ。

——データの変換も無しに……か？

——……うん、そうみたい。

曖昧な答えが続く。

——脳内に直接データを入出力するのは今の技術でも難しいのよ。マジの情報サーバーであるDNAメモリーは設計上容量の許す限

り、情報をストックできる。でも情報を取り出す時は、あくまでマ
ージを仲立ちにして、DNAメモリーから読込むの。ようは外部記
憶装置を脳内に埋め込んでいるのと同じなのは、理解できるわよね
……？

——ああ。

レイジは理解の意を示す。

——でも説明するまでもなく、記憶野とDNAメモリーは記録フ
ォーマットがまったく違うでしょ？メモリー内のデータを、マス
ターの脳内にダイレクトに伝達すると、拒絶反応を起こし、デー
タも勝手に変換され、大部分を破壊しちゃう。最悪の場合、デー
タが人格や精神を破壊しかねない。明那ちゃんが頭痛で苦しんでる原因
がそれよ。

頭の中に異物を突っ込むことと同じだった。

臃の言葉に、レイジは明那が苦痛に何度も顔を歪めている様を思
い出していた。

よく正気を保っていたものである。

いや、耐えられないから逃げ出したのだろう。

——マージが脳内伝達物質の制御による精神の安定を図ることは
できても、思考を助けたり、天才的な発想を促すようなボトムアッ
プ効果は望めない。マージが補助脳としての役割を担うには、幾つ
ものブレイクスルーが必要なのよ。逆もまた同じ——。

臃の説明が続く。

——DNAメモリーはネットに転がっているような情報をストッ
クするのは得意でも、ウェットウェア系の情報保存はあまり向かな
い媒体なの。記憶や経験、人格や精神活動などのバックアップは桁
違いに情報量が多い上、非可逆圧縮してもオリジナルをそのまま保
持することは極めて難しい……SFみたいに、事故などにより脳が
破損して、埋め込まれた補助脳の保存データから、完全に脳を復元
するなんて夢のまた夢——。

レイジは臃の説明に、沈黙する。

レイジの脳はマージ攻略の為に、瞑想寺院と結合化し、フル・パフォーマンスで動いているにも関わらず、創発的思考は反比例するように何も思いつかなかった。

——君の頭の中にあるアップグレードモジュール……ジャンクDNA式の情報保存形式なら可能なんじゃない……？

朧の発言に、レイジは呆れた。

——……適當ことを言うなよ。そもそもモジュールが、ジャンクDNA式なのかどうかさえも確かじゃないだろ……？

——……そうでした。

朧は自分の言葉を引っ込める。

父親が残したアップグレードモジュールに関しては何もわかっていない。

明那のことが片付き次第、早急に調べなければならない。

——……まあいいわ。どの道データは抜き出すつもりだったんだから。マージのアンインストール作業をどんどん進めましょう。明那ちゃんの記憶マトリックスのファイルチェック作業およびオフィリアのデータを抽出、その後一括ファイル化して瞑想寺院へ転送するわよ。

——……ああ。リムーバーを排除する抗体システムがある。まず、これを停止して、結線用ナノマシンを再自己組織化、アンインストール用にリフォームしろ。

——了解。

タスクバーが伸び、機能性ナノマシンが再自己組織化され、別のものに作り変えられていく。

さながら、別の素材から金を生み出そうとする錬金術師さながらだ。

——アンインストールの準備が完了し次第、各部結線をナノ単位で切断。セキュリティ・ブロックおよび記憶バイパス部からパージを実行するわよ。

オフィリアのマージはレイジや朧との接続を断ち切られないよう、

比較的影響を少ない区画から切り離されていく。

——これで大分負担は軽くなるか——。

成長管理ブロックから抽出されるファイル名がレイジの眼に入ってきた。

マジの適合性や成長速度、侵食状況、マスターの健康状態など全ての経過観察データが全て記録されている。

——開発コード イモータル・プロジェクト……。これが例の……？。

仮想世界でオフィリアがレイジに語っていたことだった。

人類の永遠の夢。

ウィザードの究極の目標。

より高度に、より自由な存在へと化す方法。

オフィリアの話は、どこかカルト宗教じみていた。

——遊んでる暇ないわよ……。今は作業に集中しましょう。データは教授が洗ってくれるわ。……防衛ブロックおよび記憶バイパス部終了。成長管理ブロックのデータ抜き出しはまだ時間がかかるみたいだから後回しにして、DNAメモリーのサブセクタのパージを実行するわよ。

——ああ。

進行状況を告げる臃の言葉を聴きながら、言いようの無い不安が、レイジの心を掠めていた。

決戦前夜

「貴方とこうして現実世界で話をするなんて思わなかった」

明那がベットルームでオフィリアと向き合っていた。

オフィリアは諦観に満ちた静かな佇まいでベットに座っている。

「——そうね」

オフィリアは微笑しながら、外の景色に眼を移す。

新宿パークハイアットのスイートルームからは、塔のような新宿の環境建築タワービル郡が見える。仮象体スクリーン広告がビル周囲を取り巻き、彩っている。

東京都再構築化計画の中心区画たる新宿は今なおも開発が行われ、変貌し続けている。

「もう身体は大丈夫なの……？」

オフィリアは明那に尋ねた。

オフィリア自身、明那との完全に分離されているため、身体内をモニターすることはできない。

オフィリアは論理人格のソフトウェアとして独立し、マージ本体に保存されている全データを体内に所持した存在であった。

明那内に巢食ってたマージは全て撤去され、さらに自滅機能により、マージの本体ウェットウェアも分子レベルでアンインストールが終了している。

現在オフィリアは、臍のDNAメモリーに仮想マージ用のフォルダを作成し、プログラムを走らせていた。

論理人格ソフトウェアは特殊機能ほど演算能力を食わない為、実行が可能だった。

「マージも分離できたから、もう頭も痛くないし、平気」

明那を苦しめていたイモータルプロジェクトの関連データは手元にはない。

情報保持の為、瞑想寺院のアーカイバに格納されている。

受け入れ先相手と接触の際、ダウンロードし、渡すつもりだった。
「データからアイコンツク社の犯罪行為としても立件出来るだろう
って……法的闘争に持ち込んでも十分勝てるって」

「……二人のお陰ね」

「そうね」

「御礼をしなきゃ」

「うん」

オフィリアは立ち上がるとパーラールームの方に向った。

明那も後に続く

レイジも臃も情報避難地へ向う為の準備を進めていた。

マージの解体作業が完全に終了し、瞑想寺院から現実世界へ帰ると、すぐには情報避難地へは出向かなかった。

ブラックシエルも情報避難地へ来る以上、対抗策無くしては、あまりに無謀だった。

パーラールームの方では、仮象体スクリーンの情報ウィンドがいくつも展開している。

その一つに、アイコンツク社の本社ビル内部の映像があった。

レイジはブラックシエルとアイコンツク社の動きを探る為、監視活動も行なっていた。

ホームセンターで売られている市販のクレイマトンを購入し、「
モスキート」
蚊」と呼ばれる盗聴用の自己組織化機械を製作すると、本社ビルの内部に侵入させた。

アイコンツク社内の動きは慌しかった。

ブラックシエルは行方をくらまし、支社長が突然体調を崩し、緊急入院していた。

「蚊」を監視システムに取り付け、監視記録を洗ったが、ブラックシエルの姿が映った画像や動画データの類はまったく残されていなかった。

臃もあるプログラムをダウンロード作業を行っていた。

死者の魂を自らの身体に降ろす巫女のように目を閉じ、立っている。

「ダウンロード終了……と」

業務を終えると、朧は目を開き、息を吐く。

「何を落としていたの……？」

明那が朧に尋ねてきた。

体調はかなり戻ったようだ。

「＜アポトーシス＞っていうウイルス型ＩＴ兵器型よ。対ブラックシエル用の……ね。瞑想寺院で厳重に管理されているんだけど、教授の許可をもらって持ち出したの」

「あいつに勝てる……？」

明那は不安げに朧に尋ねた。

「……正直勝率は低いけど、＜オフィリア＞の機能だけを取り出した編集海賊版もあるし、まあ大丈夫よ」

安心させるように微笑む朧とは対照的に、明那は笑わなかった。

「そっちはどう？」

朧はレイジの方を向き、尋ねた。

「……駄目だな」

レイジは言った。

アップグレードモジュールのコードブレイク作業を行なっていた。ジャンクDNAや自らの脳内状態のサンプルを元に試みたが、適わなかった。

「……やっぱり脳内状態の複製じゃ駄目か」

「ああ」

「メルトダウンの精神攻撃対応型の光学防御を組み上げたほうが現実的ね」

「……マインドハックはBMIを通し、マージをハッキングしてくる。基本俺らの戦闘はBMIでエレメントと同期した上で行なわれるから、完全に接続を断てば、今度はエレメントのハッキングができなくなる。仮想現実での戦闘も考慮するならば、防壁に電子トラ

ツプを組み込んだほうが、より効果的じゃないか……？」

「氷壁を構築するの……？　時間が掛かるし、演算能力食いそう……」

「……あまり実戦的じゃないな……向こうは戦闘のプロだもの」

「臍の鋭い指摘に、レイジもそれ以上何も言えなくなった。」

「一息入れましょ。焦ってもしょうがないし……」

「……ああ」

諦めきれないようにレイジは言った。

「オフィリアが二人にお礼を言いたいわ」

明那が言った。

「本当にありがとう……二人のお陰でわたしも彼女も救われたわ」
オフィリアは頭を下げる。

「……そんなことより、この際聞いておくがイモータル・プロジェクトってなんなんだ……？」

レイジはオフィリアに尋ねた。

「わたしも聞きたい」

明那も食いついてきた。

オフィリアの顔が少し曇る。

「プロテクトが解除されているから、もう話せるのよね……？」
明那はオフィリアに確認した。

「……ええ」

オフィリアは憂いたように言った。

「精神転送技術……アイニツク社の親会社であるナノテックス社が進める有限生命体から無限生命体になる為の研究のことです。精神活動を肉体から完全に分離し、取り出す技術で、情報体としての複写ではなく、あくまで魂をコンピュータ上あるいは別の身体に移動させる——」

「……？」

オフィリアの説明に、レイジも明那の顔にもクエスチョンマークが浮かんでいる。

「どうということだ……？」

レイジが臙に尋ねた。

「教授にはあんまり話すなって言われてんだけど……ようは意識の完全アップロード化よ」

臙もどこか憂鬱そうに言った。

「アップロード……？ 仮想現実と違うのか？」

レイジの質問に、臙は首を振る。

「精神活動をネットに一時的に没入させる体外離脱体験の類じゃない。ナノテクによるリインカーネーション……っていう言い方が正しいのかしら。身体活動から精神活動のみを完全に分離して解放つ為の研究の一環——」

臙は情報ウインドウを展開した。

脳の模式図だった。

ナノマシンが脳を侵食し、作り変えていく様が映し出される。

「ナノテクにより脳を徐々に従来の有機物から人工物へ置換していくのが一般的な方法よ。記録のバイパス処置行っていたのも、おそらくこの為でしょ」

ウインドウを見せながら、臙は言った。

「……知らなかった。肉体から完全に、ってそんなこと可能なの？ 明那の問いに、臙は肩をすくめる。

「……昔から研究されているけど、成功したなんて聞いたこと無いわ。脳を人工物に変えると、精神活動が変容して人格崩壊する……その前にショック死かな？ 不老不死を求める金持ちの道楽よ……。アンチエイジングってほら、年喰ったババアがハマるやつ？ 明那 っちはそのテストベッドでしょ」

「……不老不死」

レイジは言葉を口にしていた。

「ナノテクで先天的疾患は回避できるようになったけど、完全じゃないでしょ……？ 医療メーカーとの法外な契約や定期的なメンテナンス費は掛かるし、老化は依然避けられない……仮に身体が不死身になっても、今度は脳内の容量が問題になってくる。絶えず入出

力される情報や経験が許容量を超え、脳を圧迫するから」

「……だろうな」

「実現できれば、仮想現実内での恒久的活動や他者への身体へ自分の意識を移し変えることもできるようになるしょうね。古い身体を捨てて新しい身体へ、ってことも夢じゃない……法的整備や宗教的問題も絡んでくるから、おおぴらにはできないんでしょけど……。ナノテックス社の資本の源は案外にそういう連中に支えられているのかも……」

不老不死と医療ビジネスの間に、レイジも明那も言葉を失っている。

四人の沈黙を破るように、部屋に一つの仮象体が出現する。

グレイン教授だった。

「スイートルームの居心地はどうかね……？」

グレイン教授はレイジに尋ねてきた。

「ありがとうございます。何から何まで——」

レイジの言葉に、教授の苦笑とも取れる笑い声がもれる。

「今回の件は、君の騎士道精神に免じ、不問としよう」

「わたしもお礼を言わせてください」

明那も頭を下げる。

「私にはやることがある。……これ以上の手助けはできん。油断はするな」

「はい」

レイジは返事をした。

「データハイブンではブラックシエルが待ち構えているだろう。苦戦は必至……手ごわい相手だ」

「……分かっています」

教授の言葉を、レイジ自身一番身に染みていた。

実際に戦い、敗北している。

ブラックシエルの動向が分からない以上手の打ちようがない。向こうもこちらの動きを探っているのだけは間違いない。

見えざる敵に、内心不安が募っていた。

「……本来であれば、圧縮構造体を瞑想寺院の情報処理能力で暗号解除し、解析するべきだろうが時間が無い。ノンコーディング領域であるジャンクDNAそのものを解読することと同義……暗号構造はコーディング領域であるゲノム解析以上の手間と時間を要する」

教授そう言いながら、朧を見る。

「それに無用なバージョンアップはマージである彼女に不具合を起こす危険性もある。あまり得策では無いな」

「……そうね。調整も必要だし」

朧も予測がついているようだった。

「今まであえて尋ねなかった。父上が自ら命を絶ったこと、君にとつては許し難いかね……？」

教授の問いに、レイジは少し考えると、「いいえ」と答えた。

「そうか」

レイジの答えに、教授は納得したように言った。

「人の弱さを受け入れて、人は他者に優しくできる。君の成長をうれしく思う——」

そう言い残すと教授の姿はスイートルームから消え去った。

「……何者なの、グレイン教授って？」

明那の問いに「さあ」とレイジは肩をすくめる。

ホテルの支払いは電子マネーで支払い済みだった。

教授名義で、スイス銀行経由で支払われているが、それ以上はレイジにも分らなかった。

「俺もよく知らないんだ。オヤジの古い友人だって……。データヘイブンに行くには、それなりのセキュリティがしっかりした所でないってことでこの部屋をリザーブしてくれたんだけど……。シミュレーターなのか、それともどっかに本物がいるのか……。基本、世捨て人だから、あんまり世の中のことに関心ねーんだよな」

「……じゃあ、わたし達も今日はもう寝るから」

朧がそう言うと、オフィリアも頷いた。

「明那ちゃんにへんな事しちゃ駄目よ」

「……うっさい。さつさと寝ろ」

レイジがそう言うと、朧は笑う。

二人の仮象体が部屋から消えると、レイジと明那の二人だけになった。

「……明日行くのよね」

明那が尋ねてきた。

「ああ」

答えながら、レイジは窓の外を見ていた。

「わたしも行くからね。受け渡しはわたしを指定してるし、見届けたいの。ダメ……？」

明那は伺うようにレイジに言った。

「……別に反対しねえよ。ダメつつても着いてくるんだろ……？ どうせ」

レイジの言葉に、明那はふふッと笑う。

レイジはすでに諦めていた。

「……親父が自殺したんだ」

「えっ？」

「前に聞いてただろ？ ウィザードになった理由を……さ」

「……どうして自殺したの？」

「ナノテックス社に根も葉もない風評被害流されて、追い込まれて……さ。実は俺もあの会社には恨みはあるんだ」

「……そう」

明那はそれ以上言わなかった。

「勝手に死にやがって……何度そう思ったことか……。でも、どうでも良くなった。許してはいない……そんなできた子供じゃない。でも、きつと事情があつたんだ。そう思うことにしている」

「……親が弱いと大変だよね。お互い」

明那の言葉に、レイジは曖昧に笑った。

「教授や朧に会えたのは親父のおかげみたいなもんだし、祐樹やり

サミtainな友達^{ッレ}なんだか、そうじゃないだか分からないような奴らに囲まれてるし、まあ退屈はしないけどね」

「……わたしは含まれないの？」

明那はさびしそうに尋ねた。

「もう友達みたいなもんだろ？」

「……えっ、わたしはそう思ってないけど」

明那の冗談に、レイジはムツとした。

「……嘘。キスもしたしね」

戸惑うレイジを尻目に、明那は突然ベットルームに駆け込んだ。

レイジは「あっ!？」と声を上げる。

「レイジ君はゲストルームで我慢してね……一度スイートの豪華ベツトで寝てみたかったの」

ドアを半開きにした状態で、明那は顔を覗かせ、舌を出しながら言った。

「……ズリいぞ!」

「……だって襲われたら困るもの、キス奪われている身としては」

「だから不可抗力だろうが……!」

レイジは必死に抗議した。

「おやすみなさい」

そう言っと、明那はドアを閉めた。

「……ったく女って!!」

レイジは齒噛みしながら、悔しそうに言った。

メモリーシティへ

レイジと臙は接続の準備を行っていた。

仮想空間へ結節点の形成するため、エレメントのゲートウェイを構築していた。

さらに電子トラップと対追跡システム用防御を展開する。

いつもより念入りに組み上げていた。

明那は椅子に座り、レイジと臙の様子を見守っている。バイザー型の外付け型の仮想現実デバイスを装着している。

曼荼羅か魔方陣のような構築図が部屋の床に浮かび上がり、周囲のエレメントが励起し、発光している。

「用意はいい？」

臙の言葉に、レイジと明那はうなづく。

「わたしもオフィリアをつれてすぐそちにアップするから」

明那とレイジが床に横たわると、中心に一本の鍵が現れた。

情報避難地へのアクセスキーだった。

「いくわ——」

臙がそう言うと、アクセスキーが発光した。

アクセスキーが解凍され、プログラムが実行されたと同時に、レイジと明那の意識は、瞬時に仮想現実へ転送された。

出現した場所は空港か駅のような場所だった。

世界の目の前に広がるの情報避難地は、大都会そのものだった。

ゲートで厳しい入国審査のようなチェックとアヴァターにいくつかのアプリをプラグインした後に、ようやく通過できた。

ステーションの外は近代的なタワービル郡が立ち並び、ネオンにも見た電子の光が駆け巡っている。

硝子か水晶を素材に作られたような尖塔郡の壁面を脈打つように、さまざまな情報が電子の光となって疾走している。

東京やニューヨークのようなメガロポリスそのものが仮想空間内に収まっている。

一端にそそり立つ、超巨大な塔を、レイジは下から見上げていた。環境建築を模した超高層ビル群の塔は天まで伸びていた。

ビル郡の周りを自走型立体高速道路が血管のように取り巻いている。

空は現実の都市空間のように、ビルの隙間からわずかしが見えない。

煌びやかな理想郷——SFで描くような世界が広がっていた。

レイジと明那二人の前を人々が行きかう。

マージやエージェントのような人工生命体であることは、動きや振る舞いから分かる。

しかしその服装スタイルは、遥か昔に流行したような服装ばかりだった。

ナノテク製法で生み出されたファストファッションとは違い、時代を感じさせるものの優雅さと気品さに満ちている。

レイジと明那の方がどこか安っぽく、完全に浮いていた。

「……すごいな」

これほどの規模の広さを持つ仮想空間は、レイジも初めてだった。

「……うん」

明那も言葉を失っていた。

「レコーディングでニューヨークにいったことあるけど、それ以上だわ。第一ニューヨークにはあんな塔なかったもの」

過去と現在、そして未来の建築物が一つの都市に混在しているかのようなだった。

道路を走る車もかつて名車と呼ばれたような過去の高級車がほとんどである。

レイジと明那の近くにプログラムが転送されてきた。

朧とオフィリアだった。

「……ここがうわさの情報避難地か。もう、セレブリティの街って

感じね」

周囲を見ながら、朧は感想を述べた。

「相手の指定先はどこだっけ？」

「メモリーシティのメイン通り沿いのナイトクラブ、『キネトロスコープ』」

明那は答えた。

「……一気に移動して、さっさと要件を済ませましょう。その後で許されるならば、この街を見物しましょう」

朧の言葉に、レイジと明那、オフィリアは頷くと、アプリを起動した。

メモリーシティ内へ入国した際、レイジと明那の仮想身体にはさまざまなアプリがプラグインされていた。

メモリーシティの地図や移動手段、言語翻訳機能を行なう為のプログラムだった。

ウェブページをネットサーフィンするように、レイジ達一行は目的地に瞬間的に移動していた。

座標や店名などを指定すれば、アバターそのものを転送することが可能な一方で、車両交通機関が再現されている。

電車や車など時代を彩ったさまざまな乗り物が仮想空間で再現され、運転を楽しむことができた。

まるで情報という形で、この仮想空間に保存されているようだ。

巨大都市の過去、あるいは未来の姿をそのまま仮想空間に収めているかのようだった。

ナイトクラブは都市の中心部である商業地区に建っている巨大塔群の一つの上層階に存在した。

目的のビルに到着すると、四人はそのままビルへ入り、エレベーターに乗った。

ナイトクラブがあるフロアでエレベーターを降り、店に到着すると、中に入った。

ナイトクラブ『キネトロスコープ』は、高級感あふれる内装に、

テーブル席がいくつも並んだ、広い空間の店だった。

店内は客は一人だった。

スタッフの姿すら見えず、窓際が一番いい席に座る客は、レイジ達の姿を見ると、立ち上がる。

白のスーツに、金髪の美女だった。

「あの人か？」

レイジは明那に尋ねる。

「……多分」

レイジ達は美女に近づいていく。

「ようこそ、データハイブン『メモリーシティ』へ——」

美女はレイジ達にそう言った。

「わたしはデータハイブン代理人の一人『H』、みんなはミスHと呼んでいるわ」

< H氏 > と名乗る美女は挨拶した。

「^{エイチ}H……？ イニシャルか……？」

レイジの言葉にHは否定も肯定もせず微笑む。

「本名は名乗れないってこと……？」

隴の問いに、「人でない私が名前なんてどうでもいいのよ」とHは言う。

「……こんな仮想空間見たことありません」

明那はH氏に素直に感想を漏らした。

H氏は微笑む。

「メモリーシティは人類の総データ化を目的に建設された超巨大サーバー……それを改装したものよ。会員制の仮想高級リゾートにして、ネット内に作られた独立国家……古きよき時代を再現した世界……でも、ただのウェブサイトではないわ。国家も、民族も、人種も、そして遺伝子にも縛られない者たちが集う有志達のコミュニティ。決して検閲されることのない世界。そして、わたしも歴史の残像の一部——」

「残像……？」

明那の言葉に答えるように、H氏は窓の外を見る。

窓には巨大な都市と摩天楼の様子が垣間見えた。

レイジも窓を見る。

高層ビルの上層階から見る景観そのものだった。

高所恐怖症ではないが、その再現率に思わず頭がくらくらした。

「このビルの一つ一つが巨大なデータ群塔……膨大なデータを納めたものの。わたし自身、顔はハリウッド黄金期の女優のものなのよ。データヘイブンの住人はその持てあまる財力により、過去の女優や俳優の肖像データなどを法的手続きを踏んだ上で、入手しているの」

Hの言葉に、レイジはHの顔を確認した。

たしかに、エージェントのような完璧な人工的美ではない。

どこか特徴的な部分が目立つ、人間的な自然の美だった。

データがすべての世界だからこそ、本物を保存したものが、より価値を帯びる。

ここに来るまで見たものの全てがそれを物語っていた。

「……無駄話が多すぎたわね。商談に移りましょう」

H氏の言葉に、皆一様に席に座る。

「データの提供がそちらの希望ね」

「はい」

明那が返事をする、H氏はオフィリアに目を向ける。

「あなたがナノテックス社の機密情報、AAAレベルのデータね」

「そうです」

今度はオフィリアが答えた。

Hはオフィリアと明那を交互に見る。

「このデータが存在しないと、あなたのマージは機能しないんじゃないかって……？」

Hは明那に尋ねた。

「大丈夫です」

「いくらで買い取って欲しいのかしら……？」

「……お金は要りません。必要なときに、データを提供していただければ」

ミスHは微笑する。

明那と交渉するHに対し、レイジはどこかグレイン教授と同じ印象を受けていた。

プログラムのような不自然さはない。

優雅で滑らかな、気品すら漂っている。

レイジと同じアバターなのかシミュレーターなのか判断できなかった。

鑑定するように、Hはオフィリアを眼踏みするようになると、オフィリアに手を触れた。

Hの瞳が微かに揺れる。

オフィリアおよび内部保存データを走査しているようだ。

「……面白い存在ね。あなたって」

Hは感想を述べた。

「死んだ人間の残存する記録を元に復元再生したもの……か。ただの論理人格ソフトウェアではなさそうね」

ミスHは臃に目を向ける。

「あなたも中々興味深いわ」

ミスHは臃のほうを見る。

「どーも」

臃は関心がなさそうに言った。

「本当はイモータル・プロジェクトの概要データと経過観察記録だけだよかったんだけど……」

ミスHの言葉に、レイジと明那は目を丸くした。

「どうしてそれ……？」

明那の言葉に、ミスHは笑う。

「ここは情報避難地よ。情報の永世中立国……そしてさまざまな情報が売り買いされている場でもあるの。だから、貴重な情報についてのホットなネタがひっきりなしに舞い込んでくる。そして、われ

われもさまざまなプロを抱えている……例えば、情報収集専門のウィザードとかね」

「あんた達が最も欲しがってる情報……ってことか？」

レイジは皮肉交じりで言う、Hは苦笑した。

「……否定はしないわ。でも、それを実現するにはいくつものイノベーションとブレークスルーを待たなければならない。一企業がなし得るには技術的にも道徳的にもまだまだ先の話よ。あなたのようにサイボーグおよびトランスヒューマニズムの最先端たるウィザードならば理解できるはずだわ」

Hの話聞きながら、レイジは人がどう変容するのか想像した。いつしか、自分も肉体を脱ぎ捨て、より精神あるいは魂のような存在と化するのだろうか。

それははたして進化と呼べるのか。

単純にネットという世界への引きこもりにしか思えない。

現に今いる仮想空間も現実を映し出す鏡に過ぎず、今の自分の姿も現実とまったく同じものだ。

それとも肉体を捨てた時、自分の姿もまるっきり変わるのだろうか。

「……いいでしょう、彼女共々引き取りましょう。彼女に内在するデータは互いに共有……それでいいのね？」

レイジの思考を止める様に、Hは言った。

「はい」

オフィリアは頷いた。

「その前にあなた達と話をしたい人がいるそうよ」

Hがそう言うと、店の奥から男が一人現れた。

黒いスーツにサングラスをかけた長身の男だった。

見覚えのある男の姿に、レイジは立ち上がる。

「ブラックスエル……！」

レイジの言葉に、ブラックスエルはやりと笑った。

「……データハイブンはPMCウィザードにとって、活動拠点のひ

とつだからな」

サングラスを外しながら、ブラックシエルは言った。

黒スーツの姿のブラックシエルは、まるで死後の世界へ誘う死神のようだった。

「……ご免なさい。彼はわたしの客の一人であり、貴重な情報を提供してくれる有能なブローカーでもあるの」

Hは申し訳なさそうに言った。

追跡してくるとは思っていたが、提供先の知り合いだったとはまったくの想定外だった。

レイジはPMCウィザードの顔の広さを垣間見たような気分だった。

アンダーグラウンド
裏の世界は、PMCウィザードにとって本拠地ホームも同じだった。

「お前はアイコン尼克社……正確にはナノテックス社所有のコンテンツだ。簡単に渡すわけにはいかん」

ブラックシエルは明那とオフィリアを見ながら言う。

「明らかに違法行為であるにも関わらず……？」

レイジ達に助け舟を出すようにミスHはブラックシエルに言い放った。

「お互い様だろう。ミスH……」

ブラックシエルは抗議するようにHを見た。

「知り合いは優遇する……商売の基本だわ。でも、わたしの立場は中立よ」

「……俺からあんたに後でこの情報売ってやるよ」

ブラックシエルの言葉に、Hは溜息を吐いた。

「——まず、彼と話をつけなさい。話はそれからよ」

諦めたようにHが一步下がると、ブラックシエルが代わりに前に出た。

余計なトラブルには関わらない主義らしい。

ブラックシエルのマジックメルトダウンがその姿を現す。

「後ろに下がってろ」

レイジは明那とオフィリアに指示を出す。

不安そうな顔をしながらも、明那とオフィリアは無言で従う。

レイジは臙に視線を移すと、臙も身構えていた。

同時にレイジの中でインストールされているナノマシンが蠢き、戦闘モードへの設定を変更を行っていく。

「長期戦は不利になるわ。短期決戦に持ち込んで、アポトーシスを叩き込むわよ……！」

仮想現実には臙の領分と言えた。

「異存はねえ！！」

臙の戦術プランに、レイジは自分を鼓舞するように大声を上げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057t/>

C Y B E R A G E 2 1 1 1 - N A N O T E C H C I T Y T O K Y O -

2011年9月12日03時20分発行